
ドラゴンズヘブン

田崎 将司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンズヘブン

【NZコード】

N6023X

【作者名】

田崎 将司

【あらすじ】

新大陸コルドア。肥沃な大地と豊富な資源に恵まれたコルドアは、旧大陸の国々に大きな富をもたらすはずであった。

しかし、コルドアで人類を待ち受けていたのは、竜という存在。強大な力をもつて人間を蹂躪する竜。人は多大な被害を出しながらも竜を討伐し、少しづつコルドアを切り開いていた。

コルドアフロンティアの最前線に暮らす青年・フランシスが、偶然竜に襲われたことから物語は始まる。

辺境騎士団・対竜部隊の戦いを描くファンタジー。

巨大生物と、異能力者との戦いを描いていきます。

異能力者といつても万能最強系ではありません。

2011年11月1日、ラノベでいえば1巻に相当する部分が完結しました。

続くエピソードも執筆中です。

別サイト、『小説＆まんが投稿屋』<http://works.booksudio.com/index.html>にも投稿を予定しています。

プロローグ

時はルゲール暦1279年のことである。列強各国が世界の霸を握らんと、大海に帆船を繰り出した大航海時代が収束しつつあるころ。所は『新大陸』コルドア東部、開拓村を結ぶ田舎道。

日差しもうららかな、春の昼下がり。広大な平原を貫く街道沿いにはスミレやシロツメクサの花が咲き誇り、新緑の緑とともに辺りを彩る。実に平和で牧歌的な風景の中、およそその景観に似合わぬ絶叫と、どしん、どしんという『何者か』による巨大な足音が響き渡る。

「いつたい、どうして、僕が、こんな目に…」

声の主は、開拓村の青年、フラン시스・ファウラー。身の丈5フィート半ほど、優しそうな茶色の瞳を持ち、簡素な衣服に身を包んだ、いかにも純朴な田舎の青年といった風采だ。彼は、大きな町で職を探そうと、住み慣れた故郷から馬に乗り旅立たんとしていたところであった。

恐怖に顔を引きつけながらも、必死で馬を駆るフラン시스。

（少しでも速度を落としたら、僕はたぶん死ぬ。きっと死ぬ。絶対死ぬ）

彼をそこまで怯えさせるもの。それは、『何者か』の大きな足音だ。全速で馬を駆けさせる彼の背後に迫るもの。それは、『竜』であつた。

身の丈六〇フィート以上。全身をくまなく赤褐色の鱗で覆い、トカゲのような頭部に長い首。頭頂部から首筋にかけて鋭角なつるこ

が逆立つて生えており、さながらトサカのよ。口元からは一フイート以上もあるうかという巨大な牙が見え隠れし、指の先には鋭い爪。まさに、御伽噺に出てくる『竜』そのもの。人類が『新大陸』コルドアで出会った、人が文明を得て以来最大の天敵。それが竜だ。そんな竜が後足で立ち、時速四〇マイルにも届こつかという速度で、先刻からフランシスを追い回しているのである。

「どうしてこんな場所に竜が？　ここは安全地帯のはずだろ？」

フランシスの疑問はもつともである。竜とはきわめて繩張り意識の強い生物であり、自分の繩張りから出ることはまずない。ゆえに、一度安全が確認された場所で竜と遭遇することはあり得ない。これは、開拓地に生きる者の常識だった。

もし、フランシスに竜を観察する余裕があつたならば、この竜が身体のあちこちに手傷を負わされていることに気が付いたかもしれない。そして、それが元で我を忘れ、自らの繩張りから出てきたという結論に達することもできたかもしれない。

竜と遭遇したのは十数分前のことだ。フランシスは、街道沿いの木陰で昼食がてら休憩をしていた。ぽかぽかと降り注ぐ陽気と満腹感から、ついうとうとしてしまったのが間違いのもと。木々の異常なざわめきと、鳴り響く足音に目を覚ました時には既に遅く、フランシスは竜に捕捉されてしまっていた。慌てて馬に飛び乗り、今に至るというわけだ。

しかし、そのまま逃げ続けても事態が好転する気配はない。この竜の走行速度は、実際のところフランシスの愛馬の全速力に及ばない。整地された都市部の街道や、競馬場のコースだったならば、あるいは逃げ切ることが可能だつただろう。しかし、ここは馬車の轍がわずかに残るのみの田舎道。所々に岩が露出し、雨水が作つた水

溜りやぬかるみもある。全速力で馬を走らせることは困難だ。結果、振り切ることも適わず、付かず離れずの距離で追われ続けることになっている。

護身用に持っていた猟銃を一発撃つてみたが、鱗に阻まれなんら手傷を負わせることができなかつた。豆鉄砲ほどの効果もあつたかどうか。

竜が諦めるのが先か、フランシスの馬が潰れるのが先か。前者であつてくれと願うフランシスだが、背後の竜の速度が衰える気配はない。それどころか、愛馬は明らかに疲れを見せ始めている。

「ちよ、まずいって！ もう少し頑張つてくれ！」

必死に拍車をかけるものの、速度は段々と落ちていく。足元も覚束なくなってきた。無理もない。この馬は軍馬でもない農耕馬で、全速で駆け続けることはまるで慣れていないのだから。

竜との距離は徐々に縮まり、既に生ぬるい竜の息吹を感じられるほどである。そして

「グアアアアラアア――」「――」

平原一杯に轟き渡る、竜の咆哮。驚いたフランシスの馬はバランスを崩し、転倒。フランシスは背中から地面に叩き付けられた。

「ぐうつ……！」

身体のあちこちに、鈍い痛みが走る。逃げなきや、と思つても身体がいうことを聞いてくれない。這いずるようにもがくも、一ヤードも進んでくれない。よく見ると、腹部がざっくり切れて、真っ赤な血がびくびくと流れている。落馬したときに岩角か木の枝かで切

り裂かれたのだろうか。いずれにせよ、かなりの深手だ。命に関わるかもしない。

背後から、は、ゆっくりと竜が迫るのを感じる。振り向くと、竜はもう田の前だった。

爛々としたひづれの面眼、剥き出しになつた鋭い牙。牙の隙間から、ふしゅむ、ふしゅむと荒い息が漏れる。

(トカゲみたいな顔だけど ロイツ、怒ってる)

果たして感情と呼べるもののが竜に備わつてゐるのか、フランシスには知る由もない。しかし、その表情からは明確な『怒り』が伝わってきた。

(ああ、これは死んだ。絶対死んだ)

爪で引き裂かれるのか、牙で噛み殺されるのか、あるいは踏み殺されるのか。いずれにせよ、もはや死は免れないことを悟る。恐怖を通り越し、諦観の情が浮かぶ。

(顔も覚えていない父さんと母さん、息子は今からそつちに行きます。神父様と教会の弟たち、仕送りできなくてごめんよ)

竜は前足を大きく振り上げて、今にもフランシスに叩き付けようとしている。覚悟を決めて、田を開じる。

ダーンという音が、遠くから響いた。僅かに遅れて、至近から炸裂音。

何事かと薄田を開ぐと、前足を振り上げたままの体勢で、首筋から鮮血を噴き出す竜の姿が。ぬるい竜の血が、フランシスの身体に

も降り注ぐ。遠くから放たれた特殊弾頭が竜の鱗を貫いたということを、フランシスが理解できるはずもなかつた。

次にフランシスの視界に入つてきたのは、一人の人影。一人は小柄で華奢な女性、もう一人は大柄で筋骨隆々の男性だ。一人とも、深緑色の軍服に身を包んでいる。

「もう大丈夫だよ」

そうフランシスに声をかけると、小柄な女性は両手に小剣を持つて果敢にも竜に向かつていく。

大柄な男性はフランシスを抱え、一〇ヤードほど離れた場所に横たえた。

「悪いな、アイツを片付けないことにあちおち手当てもしてらんねえ。痛えだろうがもう少し我慢してくれ」

そう言つと、彼もまた巨大な戦斧を掲げて竜に向かつていった。

「……無茶、だ、にげ、て……」

腹部の激痛に朦朧としながらも、フランシスは一人を止めようとする。いくら手負いとはいえ、生身の人間があんな化け物に立ち向かうなんて、正氣の沙汰じやない。助かるには、逃げるしかない。そう思つていたフランシスの目に、信じられない光景が飛び込んできた。

そこには、身の丈六〇フィートの巨大生物と、その身に帯びた刃のみで互角に戦う二人の姿があつたのだ。

竜は、両の腕と尻尾で矢継ぎ早に攻撃を繰り出す。その両腕は唸りを上げ、熊や獅子をも一撃で粉碎してしまうであろう勢い。尻尾

は鞭のようにしなり、辺りの立ち木や岩を破碎する。しかし、一人にはまるで当たらない。二人は尋常ならざる速度でその攻撃を避け、間隙を付いて竜に斬撃を加えている。そして、信じられないことに、彼らの攻撃は分厚い鱗を切り裂き、竜に対して着実にダメージを与えているのだ。猟銃の弾丸をものともしなかつた相手に、である。

（これは何なんだ？！ 僕は夢でも見ているのか？ それともひょつとしてもう死んじゃつてる？！）

わが目を疑うフランシス。その間にも、二人は凄まじい速度・膂力をもつて竜と戦い続ける。

と、竜の尻尾が横薙ぎに振り払われた。二人は跳躍してそれをかわす。が、その跳躍も尋常ではない。明らかに3ヤードほどは跳んでいるのだ。

（ああ、わかった。あの人たちは人間じゃないんだ。きっと、神様から遣わされた天使か何かだ）

混濁する意識の中、そんなことを考える。

やがて、竜の動きが段々と鈍くなつていぐ。全身から血を流し、余命が僅かなことはフランシスにもわかつた。遂には後足で立つこともままならなくなり、四つんばいの格好になる。

「エドガー、止め！」

「応よー！」

これを勝機と見てか、掛け声とともに大柄な男性が高く跳躍。大きく振り上げた戦斧を、自身の全体重とともに竜の脳天に叩きつける。「じりっ、という鈍い音。頭から鮮血を噴き出し、竜の身体が大きく傾ぐ。

「クリス、もう一撃だ！」

「おっしゃ！」

続いて小柄な女性が跳躍、先ほど戦斧が作った傷口に、一本の刃を柄をも通れとばかりに突き刺した。一、二度竜の身体が痙攣したかと思うと 大地を震わせ、竜は倒れた。

「よっしゃ、討伐四匹目！」

「おーおい、浮かれてんな。あっちの兄ちゃんの手当でが先だろう

「つと、そうだった。おーい、大丈夫〜？」

いや、大丈夫じゃないから、と言いたくても、喉からは僅かなうめき声が漏れるのみでもはや声を出すことすらできない。目の前が段々と暗くなつていき フランシスの意識は途切れた。

コルドア大陸 ルゲール暦一一〇九年、旧大陸エウレシウスの强国・ブリーディアの探検家アマディアスによつて発見された、人類の新天地だ。エウレシウスから大海を挟んで東にハ〇〇〇マイル。海流や季節風の関係で未だ大陸を周航できた船は未だなく、正確な広さを推し量ることすらできていない。

ブリーディアの調査団により、豊かな土壌と豊富な鉱物資源の存在の可能性が示唆されると、旧大陸で霸権を争っていた各国はこぞつてこの新大陸の開拓に乗り出した。

しかし、コルドアで待ち受けていたのは、人類が有史以来初めて

出会い天敵 竜だった。

沿岸部を除く、大陸のほぼ全土に分布すると見られている竜は、圧倒的な戦闘力を持つていた。数十フィートの巨躯に矢も鉄砲も通じない堅牢な鱗、爪や尻尾の一撃は岩をも容易く粉砕し、『竜の息^{ドラゴン}吹^{スプレス}』はあるゆるものなぎ払う。時には馬をも超える速度で疾駆するこの生き物には、大砲の弾を当てることも困難だった。

意氣揚々とコルドア開拓に乗り出した旧大陸各国が、多大な被害により新大陸からの一時撤退を余儀なくされるまでさほど時間はからなかつた。

そんな中 唯一竜との徹底抗戦を選んだのが、大陸を発見した国でもあるブリーディア王国だ。

ブリーディアは、古代ルゲール帝国を祖に持つ伝統と格式のある国家だ。一一〇〇年台中ごろ、周辺国の発展に危機感を覚えた時のブリーディア王は軍制の改革に着手。他国に先駆けた常備軍の編成、兵学校・士官学校の設置と効率的な兵士育成、国営工廠の設立など

の施策により、世界一と言われる強力な軍隊を創り上げた。この近代的な軍があつたからこそ、ブリー・ディアは竜に対抗することができたのだ。

しかし、この改革は歳費の増大と財政悪化も伴った。ブリー・ディアがコルドアから撤退しなかつたのは、コルドアの資源を手に入れ財政赤字を補填したい、という考えがあつたためである。ブリーディアには、竜に対抗し得る軍事力があつたのと同時に、その軍事力ゆえに竜と戦わねばならない理由があつたのだ。

ブリー・ディアにとつて幸運だったのは、竜が非常に縄張り意識の強い、自分の縄張り以外に興味を持たない生物であったこと、生殖能力が極めて低かつたことだ。一度特定の地域の竜を討伐してしまえば、そこにはもうほぼ竜が出現しないないと考えていいのである。

一度にわたる大規模な竜討伐作戦が実施され、壮絶な戦いの末ブリー・ディアは、海岸線から四〇〇マイルほどの範囲まで領地を拡大することに成功する。

軍の再編を余儀なくされるほどの多大な被害を出したものの、新たに開拓した領地からもたらされた富はそれを補つて余りあるものだった。とりわけ、新たに開発されたサー・ディーン金鉱は、ブリーディアの景気を一気に好転させたほどだ。

竜との戦いは一段落したものの、ブリー・ディアにはコルドアの利権を奪わんとするエウレシウス列強国との争いが待ち受けていた。私鯨船を繰り出しコルドアからの積荷を狙つたり、コルドア領そのものへ侵攻を試みたり。要するに、ブリー・ディアが苦心して切り開いたコルドアからの富を横から搔つ攫おう、というわけだ。こうした国際情勢があり、海路の確保とコルドア沿岸部の防衛がブリー・ディアにとっての最優先課題となり、現在コルドアの領地拡大政策はその分緩やかになつてている。

フランシスが育つたのは、そんなコルドア開拓地の最前線 フロンティアにある小さな村、ジーンだ。彼の両親はブリーディア本国で細々と暮らす葡萄農家だった。大規模な植物の伝染病により生活の糧を失い、藁にもすがる思いで新大陸に渡ったのが一〇年前。その開拓地で生まれたのがフランシスだった。しかし、程なくして両親は他界。フランシスは教会の孤児院で育つことになる。

18歳になるまで、教会の仕事と村の農作業の手伝いをして暮らしていたフランシスだったが、そろそろ独立立ちが望まれる年齢となつた。しかし、畑をやろうにも独力で新たに農地を切り開くのは至難、借地でやろうにも収穫が出るまでは収入を得ることができない。孤児院の財政が思わしくないという話を漏れ聞いていたフランシスには、手取り早い収入が必要だった。そこで、大きな町に出て働き口を見つけようと考えたのだ。

そんなわけで、住み慣れた村に別れを告げたフランシスだったが、その矢先に出くわしたのが例の竜だったのである。

すんでの所で救出されたフランシス。彼の前途に待ち受けるもののはいったい何であろうか。物語は次の章を紡いでいく。

辺境騎士団・対竜部隊

繽紛の中でもどひむフランシスの意識を覚醒させたのは、遠くから響くラッパの音色だつた。

目を開けると、そこには見慣れない天井。石作りの建物の一室に据えられた、簡素なベッドに寝かされているよつだ。

(「は、どこだ? 僕は、なにを ）

一度寝をした後のような倦怠感に包まれ、考へが纏まらない。と、自分の胸に包帯が巻かれていることに気が付く。同時に、フランシスに「あの時」の記憶が怒濤のように蘇ってきた。

「うあああああ！ つてあれ、僕、生きてる？」

混乱するフランシス。無理もない。巨大な竜に追い回され、決して浅くない傷を負つたと思つていたのに。恐る恐る、包帯を捲つてみる。そこには想像していた酷い傷はなく、乾きかけた大きなかさぶたがあるのみだつた。

思ったより大した傷じやなかつたのだろうか。そんなことを考えていると、不意に部屋の扉が開いた。

「あ、なんか騒がしいと思つたら目、醒ましたんだ」

入ってきたのは、一人の小柄な女性。年のころはフランシスと同じくらい、明るいブロンドの髪を肩口で無造作に切り落とし、パッチリとした明るい碧眼からは、いかにも快活で活発な印象を受ける。そして、彼女は深い緑色の制服に身を包んでいた。その制服には、フランシスも見覚えがあつた。彼女自身もどこかで見たことがある

ような。

「えっと……軍人さん？」こはどこですか？あなたは

「ここはシラーズの町、辺境騎士団対竜部隊本部。あたしはクリスティ・キーツ少尉」

崩した敬礼をしながら女性が答える。

「あ、どうも。僕はフラン시스・ファウラーです……ってシラーズ？どうしてそんな所に」

シラーズは、フロンティアの中心地的存在である都市だ。フラン시스が馬を走らせていた街道からは40マイルほど離れている。

「それに……対竜部隊って『あの』対竜部隊？」
「コルドアの対竜部隊つたら一つしかないでしょ」

コルドア辺境騎士団、対竜部隊。それは、竜という強大な生物が闊歩するコルドアにおいて、その討伐を専らとする精銳部隊だ。フロンティアという竜の脅威が身近に存在する土地で育ったフラン시스も、当然その存在を知っている。もつとも、その詳しい実態までは知らないかつたのだが。

「まあ、聞きたいことはたくさんあるだろうけど。まずは食事にしない？お腹空いてるでしょ」

と、丁度いいタイミングでフラン시스の腹が鳴った。混乱状態で気付かなかつたが、相当な空腹である。思わず赤面するフラン시스。

「しょうがないよ、一週間も眠つてたんだから。ちょっと待つて、

今「」飯運んでくるから

「一週間！？ 僕はそんなに つて、行っちゃったよ」

程なくして、両手に食事を満載したトレイを持ったクリステイが戻ってきた。

干し葡萄とナツツ入りのパンにベーコンと野菜のスープ、山盛りのソーセージに白かびチーズと、貧しい開拓民であるフランシスにとって結構なご馳走だ。フランシスは食欲に任せ、貪るように腹に流し込む。結構な量の食事を平らげ、水差しの水を一気飲みしてようやく人心地付く。

「うん、それだけ食べられるならもう身体は大丈夫そうだね」「それで……僕の身に何が起きたのか、話を聞かせてもらえますか」

「んー、簡単に言つと街道で竜に襲われてたキミをあたしたちが助けて、ここへ運んできた。そんだけ」「あ、やっぱりそうでしたか……。助けてもらって、有難うございました」

朦朧とする意識の中で見た人影は、辺境騎士団の軍人だったのだろう。口ぶりからすると、このクリステイもその場に居合わせていたらしい。

「いやあ、お礼を言われることじゃないっていうか……」

何となく気まずそうな表情を浮かべるクリステイ。

「でも、死ぬかと思ったけど大した傷じやなかつたんですね。もう直りかけてるみたいだし」

「いやいや。キミ、死にかけてたよ。腹が裂けて腸が飛び出してた

し

「ええっ！？ でも、それならどうして……」「んー、これってあたしの口から言つてもいいのかなあ

何やら曰くありげな話しぶりである。

その時、部屋のドアをノックする音が響いた。返事をする間も無く、二人の人間が部屋に入ってきた。一人は壮年の男性。広い肩幅と厚い胸板、ブラウンの髪を短く切りそろえ、顎に濃い髭を蓄えている。柔軟な表情を浮かべながらも眼光は鋭く、糊の利いた制服がよく似合う。歴戦の勇士を思わせる雰囲気である。もう一人は、20代中盤であろう女性。ブルネットの美しい髪を肩の下で綺麗に切りそろえた美女である。切れ長の黒目でこちらも眼光鋭く、抜き身の刃のような空気を見にまとっている。

「ファウラーくん、と言つたかな」

口を開いたのは壮年の男性。

「私はレナード・パーシヴァル。こここの司令官を務めている
「パーシヴァル将軍！？ まさか、あの『ドランゴンスレイヤー』
の？」

フランシスが驚くもの無理はない。レナード・パーシヴァルと言えば、竜討伐で多大な功績を挙げ、コルドア全土にその名を轟かす大英雄なのだ。子供のごっこ遊びで『パーシヴァル将軍役』が取り合いになるほどの有名人である。ドラゴンスレイヤーとは、その功績を認められブリーディア国王から直々に賜った称号だ。コルドアにおいて彼より高い発言力を持つ者は数えるほどしかいないとも言われる傑物である。

「まずは、我々の不手際で一般市民である君を負傷させてしまったこと、心より謝罪する。本当に申し訳ない」

「いやいや、止してください！ 将軍ほどのお人が僕なんかに……」

そんな英雄に平伏され、フランシスは恐縮しきりだ。

「いや、完全に我々の手落ちだったからな。君は運よく助かっただが、危うく死なせてしまうところだったのだ。そうなつては、いくら謝罪しても意味が無いからな」

「ええと、不手際とか手落ちとか仰っていますが……あの時一体何があつたのか、聞いてもいいですか？」

「そのことに関しては私から」

ブルネットの女性が進み出る。見た目に違わず、話し方からも理知的な印象を感じさせる。

「私はダイアナ・ヘイワード少佐。あなたを負傷させた竜の討伐作戦の指揮を執っていたのは私です。私からも、この度のこと謝罪させてください」

「それはもういいですって……。それより、あの時のこと教えてもらえますか」

「はい。私たちはあの日、ジーンの村からおよそ50マイルの地点で、竜の討伐作戦を実行中でした。竜に手傷を負わせ、あと一歩のところまで追い詰めたのですが……一瞬の隙を突かれ、竜に包囲を突破されてしまったのです」

「それが……僕を襲った竜ですか」

「はい。完全に指揮官たる私の失態です。申し訳ありませんでした」「上司として少佐を弁護させてもらうが……知っているかもしれないが、本来竜はとても繩張り意識が強い生き物でね。自分の繩張りからは滅多に出ようとしないものなんだ。ところが、あの時の竜は

手傷を負つて半狂乱になり、自分の縄張りから大きく外れたところまで出て行つてしまつた。これは今までに無い事態で、少佐が対応できなかつたのも仕方ないことなんだ」

「いえ、常に不測の事態に備えるのが指揮官の務めです。私の手落ちであることに違いはありません」

「まったく、君は頑固だな。キーツ少尉、頭の固い上司で君も大変だろう」「うう

「いやあ、えーっと、ソシナコトアリマセンヨ?」

誤魔化すクリスティだが、真意は表情から見て取れる。隠し事が苦手なんだろうなあ、とフラン시스は思う。

「コホン。……そして追跡の末、あなたを引き裂こうとしていたところを補足し、竜を倒すことに成功しました」

「しかし、我々がこう言つのもなんだが、君もお手柄だつたんだよ。あそこで君が竜と出くわしていなかつたら、あの竜はそのまま暴走しどこかの村落を襲つていたかもしれない。君が竜を引きつけてくれたおかげで、被害が出ずにするんだ」

フラン시스が襲われたのは、故郷のジーンの村から20マイルほどの地点だ。あの竜のスピードを考えれば、目と鼻の先と言つてもいい距離である。村が襲われていたらと思つとゾッとするフラン시스であった。

「以上が、一週間前に起こつたことの顛末です」

凡そのあらましを聞いて、フラン시스は納得する。自分の記憶と照らし合わせて、特におかしいことは無い。ただ、一つだけ疑問が残つた。

「一つ聞きたいんですが。僕の傷のことなんですけど。酷い傷だったと思ひますが、もう直りかけてますよね」

先ほどのクリスティの話しづぶりが気になっていたフランシスが質問する。

「それなんだがね……質問に質問を返すことになるんだが、君はあの時『竜の血』を何らかの形で身体の中に取り込むようなことはなかつたかな？」 例えば口に入つたとか

「そうですね、確かに……腹をやられて、もう駄目だと思ったとき……大きな銃声のようなものが聞こえて、竜の首からたくさん血が噴き出して……それが僕の身体にかかつたような気はします。それが傷口に入つたことはあり得るかも……ただ、あの時は意識が朦朧としていてはつきり覚えていないんですけど」

レナードがダイアナと顔を見合させ、頷く。

「間違いないな。君はその時、竜の血によつて『竜人』ドラゴンヒューマンとなつた。致命傷と思われた傷が治癒したのも、竜の血の力によるものだ」

「竜の血？ 竜人？」

レナードの言葉が理解できず、フランシスがたくさん疑惑の疑問符を浮かべる。ただ、フランシスは竜人という単語には聞き覚えがあつた。『対竜部隊には竜人兵ドラゴンヒューマントルバ』と呼ばれる凄く強い精鋭がいるらしい程度のことを聞きかじつただけだが。

「閣下、少し端折りすぎです」

「すまんな、少佐。また説明を任せていいかな」

「はい。一から説明すると少々長くなりますが構いませんか」

領くフランシス。辛抱強く、人の話をしつかり聞くことができる
のは彼の美点の一つである。

「では……『ルドアでは過去、一度の東方遠征が行われたのを知つ
ていますか』

「教会の日曜学校で習いました。竜を倒して開拓地を広げるための
戦い、ですよね」

東方遠征とは、フランシスの答えたとおり、竜を討伐してブリー
ディア領コルドアの支配地を広げるために行われた大規模遠征のこ
とである。一度行われたこの戦いは多大な損害を出したものの、領
地を大きく拡大させた。そこには良質な金山が存在したため、損害
以上に利益をブリー・ディアにもたらした。フランシスが育つたジ
ーンの村も、第二次東方遠征で切り開いた地域に位置している。

「その通りです。そして、その戦いの最中、一人の兵士がある試み
を実行に移しました。『竜の血を飲むと不死身になる』という御伽
噺を真に受け、実際に竜の血を飲んだのです」

ダイアナの話に、レナードが何故だか苦笑する。

「すると、その兵士の肉体に変化が起きました。不死身にこそな
りませんでしたが、身体能力、回復力などが常人を遥かに越える水
準まで向上したのです。俄には信じられないような話でしょうが」

ここまでの説明で、フランシスもおぼろげながら話の核心がつか
めてきた。

「ここことが軍全体に広まり、兵はこぞって竜の血を飲みました。
しかし、先の兵士のような効果が得られた人間は僅かに三人。他の

大多数には何の変化もありませんでした。数千人、いや、万人に一人の割合です。何によって選別されるのかはわかつていませんが、竜の血が合う人間と合わない人間がいるということです。そして、この竜の血によって強化された人間のことを『竜人』と呼ぶようになりましたのです」

「あの時僕の身体に竜の血が入り、その力で僕は死ぬほどの傷から回復することができた。そういうことですか」「理解が早くて結構。詳しく調べなければ確實なことは言えませんが、そう考えるのが妥当でしょう」

「うんうん。苦しまないように止めを刺してあげようか、つて相談してたら、その間に傷がみるみる塞がつていつたからねー。普通の人間じゃありえないよ」

「なるほど……ちょっと信じられないような話だけど、納得はしました」

実際直りかけている自分の傷口を見せられでは、フランシスも信じるほかはない。理解の早さ、適応力の高さというのもフランシスの長所と言えるだろう。

「ちなみに、先の話に出た兵士とは私のことだよ

悪戯っぽい笑顔で言うレナード。かの大英雄が『御伽噺を真に受けて』竜の血を飲んだ兵士だったとは。人体に毒のあるものだつたらどうするつもりだつたんだろう、とレナードは思う。

「この私、そしてそここのキーツ少尉も同じく竜人兵です

「そうだつたんですねか」

「さて、大体のところは分かつてもらえただろう。次に、君の事を聞かせてもらいたいのだが、いいかね?」

「わかりました」

フランシスは自分がジーンの村の開拓民であること、両親と幼い頃に死別したこと、職を見つけて独り立ちしようと大きな町を目指していたことなどを話す。

「ほうほう。君は職を探していたのか。それは好都合

「あの、好都合って……」

レナードがその言葉を遮るように、ベッドのフランシスにずっと顔を近づける。

「ファウラー君。対竜部隊に入つて竜と戦わないか

「へ？」

突然の言葉に呆気に取られるフランシス。畳み掛けるようにレナードが続ける。

「衣食住付き、給料も高い。求職中の若者にこれほどいい勤め先はないぞ。どうだね、私と一緒に竜を倒そうじゃないか

「ちょ、待つてください！ 話がいきなりすぎて何が何だか……」

暑苦しく迫るレナードを押し留めるフランシス。呆れ顔のダイアナがフォローに入つた。

「閣下、話を急ぐのは悪い癖かと。彼も混乱しています

「おお、悪い悪い」

「ファウラー君、閣下はあなたの竜人としての力を『ご所望なのです。先ほど言った通り、竜人となれるのは万人にひとり。貴重な戦力となりうるその力を、騎士団で發揮してみませんか』

「僕なんかが貴重な戦力？」

「そうです。竜人の力は常人を凌駕します。然るべき装備をした竜人は数個小隊　おおよそ百人分の働きができると言われているのですから」

「うーん、そう言われても……」

「軍人になることなど考へてもいなかつたフランシスである。困惑するのも無理は無い。しかも、対竜部隊といえばその名の通り竜と戦う専門部隊だ。あの恐ろしい竜と戦うことを考えると、おいそれと返事ができるものでもない。

「我々の仕事は確かに極めて危険だ。しかし、国家に大きく貢献できる誇り高き職業だぞ。そう思わんか、少尉」

「あたしは国ととかそんな大層なことは考へてませんけど……でも、フロンティアの平和を守る、っていうのは立派な仕事だと思つてます」

考へてみれば、フランシスと両親が暮らしたジーンの村も、騎士団がその血をもつて切り開いた土地なのだ。それに、騎士団に入つてフロンティアの平和を守ることは、孤児だった自分を育ててくれた村の人たちへの恩返しになるのでは、とフランシスは思い始める。

「閣下が仰つたとおり、対竜部隊員はかなり高給です。また、負傷等で除隊した場合でも、20年間年金が支給されます。危険度を考慮に入れても、かなりの好待遇かと」

高給という言葉に心動かされる。これは、フランシスが欲深いといふわけではない。彼が育つた孤児院の経営が思わしくないのは前述した。そして、そこには共に育つた家族同然の子供たちが何人もいる。給料が高ければ、孤児院に仕送りをして、弟・妹たちにより良い暮らしをさせることができる、と考えたのだ。

それでも踏ん切りが付かないフランシス。生来争いごとが嫌いな性質である自分に、軍人が務まるのかという不安もある。

そこに、レナードが最後の一押し。

「よし、それではひとまず仮入隊ということにしないか？ 我々の任務がどんなものか、体験してみるといい。もちろん、危険な前線に立たせることはしないし、給料も満額ではないが出そう。ここが気に入らなければ、その時点で辞めて別の仕事を探せばいい。どうだね？」

「……わかりました。こんな僕で良ければ、入隊させてください」

レナードほどの人物にここまで言われて、とうとう断れなくなつたフランシス。

「よく言つてくれた、ファウラー君。とりあえずは、ゆっくり休んでその腹の傷を治してくれ。完治したら訓練に入つてもういい。いいね？」

「はい」

かくして、開拓村の青年フランシス・ファウラーは、辺境騎士団・対竜部隊に体験入隊することとなつたのだ。

幕間その一

「コルドア辺境騎士団。ブリー＝ディア領コルドアの、辺境地域の防衛と治安維持を目的として組織された騎士団である。

ただ、この『騎士団』という言葉、一般的な『騎士が寄り集まつた集団』という意味では使われていない。

ブリー＝ディアにおいては、近年大きな軍制改革が行われた。旧来の封建的契約による騎士と傭兵を主力とする軍制を見直し、常備軍を編成。また兵学校を設立し、共通した基礎訓練を課すことにより、兵士の質の向上・均一化を図つたのである。結果、ブリー＝ディアはいち早く軍の近代化を成し遂げ、世界最強の軍事国家となつたのである。

そんなわけで、現在のブリー＝ディアには『戦闘職としての騎士』は存在しない。ブリー＝ディアにおいて騎士団という言葉は軍の編成単位でしかなく、かつての名残として使われているに過ぎないのだ。

現在ブリー＝ディアには、第一から第七までの七騎士団と、辺境騎士団を合わせた八つの騎士団が存在する。第一から第三はブリー＝ディア本国内を、第四から第六は海軍として海を、第七はコルドア沿岸部の都市群を。そしてコルドア辺境地方を受け持つのが辺境騎士団である。

辺境騎士団は、辺境地方の中心都市、ニエマイアに本部が置かれ、兵力は総勢6千。本来定員は1万人以上なのだが、一度にわたる東方遠征の損耗や、海軍を強化せざるを得ない国際情勢などの影響で兵力を削られている。

その中で、竜の討伐を主任務とするのが対竜部隊である。騎士団の中から約六百の精銳が選抜され、任に就いている。フロンティア

の先の未開拓地に生息する竜を相手にするという性質上、その本部はニエマイアからさらに東の都市、シラーズに設置されている。

シラーズ郊外の広大な土地に造られた対竜部隊本部基地。その敷地内には複数の兵舎や作戦本部棟、医務棟などいくつもの大きな建造物が建ち、広大な練兵場、さらには武器工廠まで併設され、小規模な街をも凌ぐ規模を誇っている。

これが、フランシスが暮らすことになった場所である。

幕間その一（後書き）

ここでは、本文中で述べられている通り部隊編成の単位です。概ね師団～旅団クラスのまとまりというイメージです。

訓練開始、その前に

数日の療養で、フランシスの傷はすっかり癒えた。僅か十日ばかりで、内臓が飛び出るほどの傷が癒えてしまったのだから脅威と言ふほか無い。フランシスの腹には、うつすらと傷跡が残るのみ。フランシスとしては妖精に化かされたか、夢でも見ていたような感覚である。

さて、この日フランシスとクリスティは対竜部隊本部にある部隊長執務室に呼び出されていた。しかし、肝心のレナードの姿は見えない。部屋には簡素な執務机と本棚が据えられており、本棚には軍学や鍛冶技術などに関する本がぎっしりと並んでいる。壁には、赤地に竜の頭と交差する剣を配した立派な隊旗が飾られていた。

「何の話だりづね」

暇そろそろあぐびをしながら、クリスティが話しかけてくる。

「傷が治つたら訓練開始って言つてたから、僕のほうは多分その話だと思いますけど」

「うーん、あたしは呼び出されるようなことあつたかなあ？……つて、その堅苦しい話し方止めようよ。同じ年なんだし」

「そう言わても……キーツ少尉は先輩になるわけだし、階級も上になりますよね？」軍隊つてそういう上下関係厳しいんですね？」

「他所はどううけど、ここは結構いい加減だよ。仲間同士の連帯が一番大事だ、つて隊長がね。だからあんまり煩いことは言われないんだ。少佐は苦い顔してるけど」

「そうなんですか」

「だから、普通でいってば。呼び方もクリスでいいよ。うちにほ

あたしのことキーツ少尉、なんて呼ぶ奴はいないからむず痒くつて

「……わかつた、クリス。僕のことはフランでいいよ」

「うん、それでオーケー」

そこで、ダイアナを引き連れてレナードが入ってきた。

「待たせてスマン、会議が長引いてな」

「いえ、とんでもありません」

「さて、察しあついていると思うが、今日はフランシスの今後についての話だ」

レナードも、いつの間にやらフランシスをファーストネームで呼んでいる。やつくばらんというか、アットホームというか、クリステイの言つた通りそのあたりはいい加減らしい。

「まず、フランシスは士官見習い扱いとなる。本来なら竜人は『竜人である』というだけで士官扱いになるんだが、フランシスの場合兵学校で正規教育を受けていないからな。当面は、この基地で訓練を受けながら対竜部隊について体験してもらうことになる。訓練が終わって、正式入隊を決意してもらえば、その時点で少尉に任官される。それまでは、便宜上准尉という仮の階級が与えられる」

「はい」

「それから少佐、書類を」

「はい、少々お待ちを……これです。准尉、読み書きは?」

「あ、准尉つて僕のことか。はい、できます」

「結構。一番上にあるのが契約書。給料や年金などに関する条件が書かれています。一読して内容が理解できたらサインをしてください」

言われて、フランシスは書類に目を通す。給料の額を見て驚愕す

る。フロンティアの一般的な農家の年収の10倍を超える額である。

「あの……」んなにもらつちやつていいんですか？」

「もちろんだ。ただ、世の中に楽な仕事は無い。君が正式入隊した暁には、相応の仕事はしてもらつぞ」

「対竜部隊の任務は、ブリーディア、コルドア全土を見渡しても他に類がないほど危険なものです。もし恐怖を感じるなら止めておいたほうがいいでしょう」「う

受け取り方によつては、『』で『ハイ、止めます』なんて言つてしまつと臆病者だと思われてしまつような言い方に聞こえる。同い年の女の子であるクリスティも居る手前、引く訳には行かない。

「……大丈夫です。サインはここに？」

「はい、確かに。残りの書類には、隊規　隊の中での決まり」と書かれています。これは後で熟読するよ」

「まあ、隊規など大した重要じやない。流し読みしておけばいいさ」「閣下、あなたがそういう態度では困ると何度も申し上げているはずですが」

「そう睨むなよ。……まあ、私はあれこれ細かいことは言わん、気楽にやつてくれ。私からは以上だ、あとは少佐に任せらる」

そう言つて、レナードは部屋を出て行つた。大雑把なレナードの物言いに、やれやれといった風に首を振つて、ダイアナが先を続ける。

「さて、当面の教育係としてじぱいへはキーシ少尉についてももらつことになります」

「あたしがですか？」

「少尉も任官して一年です。士官としての自覚をより強く持つても

らおうとこう大佐の、」判断です」

「わかりました……（面倒くさいなあ）」

「何か言いましたか？」

「いえ、何でもありません！ 拝命します！」

ダイアナに一睨みされ、クリスティイが背筋を正す。

「准尉の住むところですが、傷が治つたということなので、今の医務棟から士官用兵舎に移動してもらうことになります。場所は後ほど案内します」

「はい」

「それから、早速訓練開始、といいたいところですが、その前に今日はちょっとした試験を受けでもらいます」

「試験ですか？」

「試験と言つても、それによつてあなたの待遇が左右されることはありません。竜人としての能力を測りサンプルを取る、実験を兼ねたものです。構えずとも大丈夫ですよ」

「わかりました」

「それでは少尉、准尉の案内を。部屋には一通りの支給品が揃えてありますので、まずは訓練服に着替えて速やかに第一練兵場へ来るようだ」

「了解《イエス、マム》！」

クリスティイが敬礼する。見よが見真似でフランシスもぎこちなく敬礼する。よろしい、と軽く返礼し、ダイアナ出て行つた。

「じゃ、行こつか」

クリスティイに先導され、兵舎に向かうフランシス。執務室がある作戦本部棟から少し歩いたところに、士官用宿舎はあつた。フラン

シスの部屋は三階建ての一階で、部屋の造りは「ここ10日間過ごした医務棟のそれと大差はない。簡素なベッドと机、大きなクローゼットが据えられているのみである。クリスティはクローゼットを開くと、そこからオリーブ色のウールのズボンと麻のシャツ、ゲートルを取り出した。

「訓練服つていつたらこれね。じゃ、ちゃつちやと着替えちゃつて先ほどは面倒くさそうにしていたクリスティだが、なんだかんだといって面倒見がいい性格だつた。

と言つたものの、クリスティは一向に部屋から出て行こうとしない。孤児院では性別年齢様々な兄弟たちと暮らしていたフランスだが、同年代の、しかも知り合つたばかりの女の子に着替えを見られるのは恥ずかしい。

「あの、クリス……、着替えるんで少し出て行つてもらえる?」「ん? あたしのことは気にせずにどうぞ。……お、小銭入れのデザイン変わつてるんだ」

机の引き出しの中のものをいじりながら、クリスティが事もなさげに答える。

(軍人つて女人の人でもこんなものなのかなあ……)

しようがないので、クリスティに背を向けてもそもそもそと着替え始める。なんとなく、背中に視線が向けられているようではやはり恥ずかしい。

「ん、終わったね。ゲートルの巻き方も……大丈夫そうだね」「それじゃ、行こつか

今度は、兵舎の裏手に広がる練兵場へ向かう。ダイアナが指定した第一練兵場は、およそ500ヤード四方ほどの広さの整地された広場で、トラックや丸木で組んだ障害物などが設置されている。基礎体力作りのための施設だった。

「キーツ少尉、ファウラー准尉両名、参上しました！」

待ち構えていたダイアナに、一人して敬礼。ダイアナが返礼する。

「10分35秒、少し遅いですね。戦場で敵は待ってくれません。身支度などは、可能な限り迅速に済ませるよ！」

「了解しました」

早速軍人の心得を教えられるフランシス。

と、ダイアナの後ろに人影があることに気付く。かなり小柄な女性だ。クリスティも小柄だが、さらに小さい。女の子、と言つてい体格だ。ぼさぼさの赤髪を耳の後ろで一つに結び、釣り上がり気味のどび色の瞳に、開拓地では珍しいメガネをかけている。全体的に幼い風貌で、騎士団という無骨な場所には似つかわぬ雰囲気だ。

「紹介しましょう。こちらは、パトリシア・スタンフォード博士。アカデミーから派遣された生物学者です」

「博士？ こんなちっちゃい子が！？」

しまった、と思つたときには既に遅く、フランシスの言葉にパトリシアはみるみる不機嫌顔になる。どうやら、その外見にコンプレックスがあるようだ。

「あ、『J』へ、『J』めんなさい！ なんだか失礼なことを言つちゃったみたいで……」

「はあ、まあいいわ。大体の人はあなたと同じ反応をするから。そこのクリスも含めてね」

と、パトリシアは嘆息する。クリスはぱつが悪そうに顔を逸らしている。

「本当に『J』めんなさい、悪氣があつたわけじゃないんです」

「それは十分分かったわ。あなたもこれからは私の研究対象になるわけだし、良好な関係を築いていきましょう」

やれやれ、と肩をすくめるパトリシア。

「研究対象って？」

「パティは竜と竜人について研究してるんだ。あたしたちより一つも歳下なのに、アカデミーを飛び級で、しかも主席で卒業した天才少女なんだよ」

天才と言われ、パトリシアは満更でもないという表情を浮かべる。

(一一つ歳下、つてことは一六歳か……。一六歳にしても小さいよな
あ)

なんてことを考えるフランシスだが、無論それは心の中に留めておいた。

「これからはあなたにも色々な実験に付き合つてもいいことになるから。よろしくね」

「よろしくお願ひします、博士」

「ああ、博士はやめてちょうだい。パーティでいいわ。愚かった話し方もナシね」

彼女もクリスティ同様、堅苦しげのが苦手な性質のようだった。

「血口紹介はもうこいでしょう。早速始めますよ」

ダイアナに促され、一同はトラックへと向かった。

訓練開始、その前に（後書き）

途中です。キリがいこと「」んで一旦投下せてもうこまか。

訓練開始、その前に「体力測定」

「さて、竜人となつたことを身をもつて体験してもらいましょう。ついでに記録も取らせてもらいます」

そう言つて、ダイアナがフランシスをトランクに連れ出す。

「向こうに旗が見えるでしょう。これからあそこまで一度二〇〇ヤードあります。三、二、一の命令とともに、あそこまで全力で走つてみてください」

「わかりました」

「少尉、あなたは計測を

「了解」

クリスティがゴール地点に向かつて走つていく。彼女がゴール地点に着いたのを見計らつて、ダイアナが

「いいですか……三、二、一、GO！」

フランシスは、強く大地を蹴つて走り始めた。全力疾走など、子供の頃に駆けっこや鬼ごっこをしたとき以来である。始めは手足が上手く動かなかつたが、十歩もしないうちに身体感覚が戻つてきた。とにかくゴールに向かつて全力で腕を振り、足を前に運ぶ。そうしているうちに、フランシスは違和感に気付いた。消える景色が凄い速さで流れしていくのだ。ゴールのクリスティの姿がぐんぐんと近づいてくる。自分の足がとんでもなく速いのだ、と氣付いたときには、フランシスは既にゴールしていた。

程なくして、ダイアナとパトリシアももゴール地点まで歩いて来

た。

「少尉、記録は」

「九秒弱、つてところですかねー」

「それって凄いんでしょつか」

なにせ、走行タイムなど計ったこともないフランシスである。九秒といわれても、それがどれほどのもののかまるでピンと来ない。

「概ね、競馬に出る競走馬と同程度のスピードね。あなたがその身体に慣れれば、もう少し速くなるはずだけど」

「馬並み？ 速いとは思つたけど、道理で……」

「ちなみにあたしのベストは7秒。騎士団ナンバーワンなんだから」

クリスティが自慢げに薄い胸をそびやかす。はじこに見えた目の印象どおりだな、とフランシスは思う。

「それから、あの距離を走つて息も切れてないでしょ」

「そう言われてみれば」

フランシスも言われるまで気が付かなかつたが、確かにほとんど息切れしておらず、動悸も上がつていない。よくよく考えれば異常なことである。これも竜人としての力の一端なのだろうか。

次に一同が向かつたのは、障害物コースに組まれている丸太のやぐらである。上から吊り下げられたロープを昇降する訓練に使用されるものだ。高さは五ヤード以上ある。

ダイアナは地面からぼぼ垂直に立てられた一本の柱を指差し、

「今度は、あの柱の脇から全力で上に跳躍してください。最高点に

達したら、それで柱に印をつける」と

やう言つて、フランシスに一本の墨を渡す。

「わかりました。……セーの、よつー」

跳躍した瞬間、フランシスは物凄い勢いで自分の身体が上昇するのを感じた。上昇速度が弱まるとともに、今まで感じたことのない浮遊感。気が付くともう少しでやぐらの頂上に手が届くほどの中まで達しており あつと思つても無く今度は身体が落なし始めた。

「あ痛つー」

あまりの跳躍力に自分でも面食らつたせいか、フランシスは着地に失敗して尻餅をついてしまった。

「もー、なにやつてんのよまつたく

クリスティから差し伸べられた手を取つて、フランシスが立ち上がる。

「ありがとう」
「いいつて。ほら、印付けるの忘れたでしょ？ もう一回
「わかった」

今度は失敗しないよつこ、と自分に言い聞かせながら一度目の跳躍。一度目の跳躍のときの感覚を思い出す。今度は混乱することも無く、最高点に達したところで柱に印をつけ、見事に着地する。

「後で詳しく計測するけど……あなたの身長を差し引きして、3ヤ

一ヤード前後といったところね。若い体力自慢の騎士団員でも一ヤードに届くかどうか、ってところだから、あなたはその三倍ということになるわね」

フラン시스も、猫や狐が自らの身の丈の何倍もの高さまで跳躍する姿を見たことがあつたが、まさか、自分がそんな跳躍をすることになるとは思つてもみなかつた。

「どうですか。竜人の力というものを理解できましたか？」

「はい。……自分でもまだ信じられないところはありますけど

今の自分が普通の人間じゃない、ということはわかります」

「へえ、冷静なんだね。あたしだって、最初は我ながらちょっと気持ち悪いって思つたもんだけど」

「正直薄気味悪いっていうのはあるよ。でも、そうなつちやつたらには仕方ないだろ」

フラン시스の適応力は高い。幼い頃から孤児院育ちで、それなりの逆境を乗り越えてきた苦労人ならではの精神力だ。

「では、次の試験にいきましょう。次は、あなたの膂力を試させてもらいます」

今度の試験は、一つ100ポンドの土嚢をどれだけ持ち上げることができるか、というもの。驚くべきことに、土嚢を10個積み上げたものを持ち上げても、まだ多少の余裕があるくらいだった。結局、12個を上げたところで限界に達する。

その次に行われたのは、視力聴力の試験。これらの試験においても、フラン시스の能力は大きく向上していることが示された。なにせ、100ヤード先の人物が持つ本の文字や、500ヤード先で鳴らされた鈴の音が判別できるのだから。

それから鉄球をどれだけ遠くまで投擲できるか計る試験、水平方向への跳躍力を計る試験、滑車で吊つた錘をどれだけの重さまで引っ張ることができるか計る試験 様々な試験が行われた。どれも、常人のそれをはるかに超える記録をはじき出したのは言うまでもない。

最後に行われたのは、持久力の試験。これは、騎馬のダイアナのペースに合わせ、ひたすらトラックを回り続けるというもの。この試験で、フランシスは唯一といつていい竜人の弱点を思い知ることになる。

初めの数周は快調そのもの。普通の人間ならばすぐに引き離されてしまうだろうスピードで先導するダイアナの乗馬にも、樂々ついていくことができた。異変を感じ始めたのは、10周も走ったあたりだろうか。足が重くなったり、どこか痛めたりしたわけではない。呼吸も動悸も上がっておらず正常だ。なのに、身体からどんどん力が抜けていく感覚。みるみる速度が落ちていき、とうとう一步も動けなくなってしまった。フランシスから活力を奪った原因 それは以外にも、『空腹』だった。

へたり込むフランシスに、顔をにやつかせたクリステイが近づく。

「大丈夫？ やっぱりアンタも引っかかったか」
「……クリス、これ、なんなの？ 引っかかったって？」
「これ、新しい竜人兵が入ったときの恒例行事らしいんだよね。あたしもやられたし。……立てる？」

クリステイの手を借り、何とか立ち上がる。しかし足腰は萎え、クリステイの肩に掴まなければ立つことすら覚束ない有様だ。貧しい孤児院の出であるフランシス。幼い兄弟たちに自分の分の食事を分け与えて自分はひもじさに耐える、なんてことは日常茶飯

事だった。そんなフランシスが、足腰も立たなくなるくらいの空腹。そもそも、数時間前に食事を取つたのだ。いくら走つたり跳んだりしたとて、たかだか数時間でこれほどの空腹を感じることは異常である。

「騙すような真似をしてしまいましたね。実は、今やつてもらつたのは試験ではないのです」

「どういうことでしよう」

「長時間全力で動き続けようとすると、空腹で動けなくなつてしまふ。このことを身をもつて感じてもらつためにやつたことなのです」

「……これつて、やっぱり竜人にだけ起きることなんですか」

「そうです。常人をはるかに凌ぐ能力を持つ竜人が、ただ一つ持つ欠点と言えるでしょう」

「代謝が激しいとか、筋繊維の破断を常に修復し続けてるとか、学術的に説明しようとすると長つたらしくなるんだけどまあ、簡単に言つてしまえば、普通の人の何倍もの能力を發揮すると、普通の人の何倍もお腹が減るつてことね。当たり前と言えば当たり前の理屈なんだけど」

「そう言われると、なんだか納得できるような……。でも、これつて実は凄く不便なんじゃ」

「普通の人並みの力しか出さないならこんなことにはならないわ。安心して」

「しかし、戦場では全力で力を行使し続けざるを得ない場合もあります。そのような事態に備え、常に自分の限界が何処なのかを念頭において行動すること。これを肝に銘じて欲しいのです」

「それから博士、彼の測定結果はどうでしたか」
もし、戦場で今のような状態に陥つてしまつたら、とフランシスは考える。想像するだけで背筋が寒くなる思いだ。

「それから博士、彼の測定結果はどうでしたか」

「うーん、どの記録もこれまでのサンプルの平均値周辺をうろついてる、って感じね。良くも悪くも平凡、といったところかしい」

「ふつ」

「笑う」とないじやないか

「いや、平凡って……。フラン西すひにしつくり来るもんだかられ。くくつ」

「笑う」とないじやないか

確かに、身長、風采、フランシスからはいかにも平凡そつな雰囲気が漂う。鉄面皮のダイアナも思わず相好を崩しそうになつたのが、それに気付いた者はいなかつた。

「平凡、大いに結構。近代の用兵理論では、兵士の質は均質であることが望ましいとされます。平凡であることも立派な長所ですよ」「そんなもんですか……」

「それでは、本日の試験は終了します。准尉はしつかり食事を取つて休養すること。少尉、食堂まで連れて行つてあげなさい」

「了解。ほら、しつかり！ 今日の食堂のメニューは豚バラの煮込みだぞー、もう一頑張り！」

べばつたフランシスを引きずるように、クリスティが食堂に向かつていく。

このあと、フランシスは自分でもびっくりするような食欲を見せた。食事をとつた後は急激な睡魔に襲われ、泥のように眠るのだった。

訓練の日々

翌日から、フランシスの訓練が始まった。

本来ならば、軍志願者は兵学校で規定の教育課程を経て、正式に任官されることになるのが、レナードの強引な勧誘によりそれを飛び越えて入隊（もつとも現段階では試験入隊なのだが）することになつたフランシスの場合、いささか事情が異なる。

なので、兵学校で教わるはずの課程の中から、特に必要と思われるものを抜き出し、現場での実体験を交えながら一気に教え込む、と言ひ形をとられることになつた。ダイアナが作成したカリキュラムを、クリスティ付き添いの下に形で行われる予定である。

「フラン、これがあんたの予定表。基本的に、この表のどおりに行動してね」

早朝の食堂で食事をしながら、クリスティから予定表を手渡される。フランシスはざつくり目を通して感想を漏らした。

「うーん、軍人さんの訓練って朝から晩まで走りっぱなし、みたいな印象あつたんだけど……。意外とそんなこともないんだね」

たとえば、ある一日の予定はこうだ。

- | | |
|---------------|---------|
| 7時～9時 | 座学（軍学） |
| 午前9時30分～11時 | 座学（救命術） |
| 11時30分～12時30分 | 格闘訓練 |
| 14時～15時30分 | 射撃訓練 |
| 16時～17時 | 剣術訓練 |

「ああ、これはあんた専用のカリキュラムだからね。ほら、あたし

たちには『基礎体力作り』ってやつがあんまり必要ないじゃない

フランシスの想像は確かに正しい。兵学校では一日をひたすら身体を苛め抜くことに費やされる。しかし、竜人にはそんなことをせずとも十分過ぎるほど体力が備わっている。そんなわけで、基礎体力を作るための訓練は一切が省かれているのだ。

「それに、昨日体験したでしょ。あたしたちって『全力で動く』とすぐに燃料が切れちゃうからね」

「ああ、なるほど。格闘術とか剣術の訓練が必ず昼休みの前か一日の最後になってるのもそういうわけなんだ」

全力で動くことが前提となる訓練のあと、すぐに食事が取れるようだといふ配慮だ。

「でも、一日3時間も4時間も座学でしょ？ あたしなら走らされただほうがマシだなあ」

「クリスって勉強嫌い？」

「つてか勉強好きなやつなんてこの世にいるの？」

「僕は結構好きだけど。新しいことを知るって楽しくない？」

勉強と言つても、教会の日曜学校で教わる程度のことしかしてこなかつたフランシスだが、勉強は好きだった。新たな知識を手に入れると、自分の中の世界が広がる気がするからだ。頭の回転や物覚えもいい部類であり、教会の神父は、常々フランシスをちゃんとした学校に行かせられないのを残念がっていた。

「あんたつて……マゾの変態？」

珍獣を見るような目でフランシスを見るクリスティ。

(印象どおりといえば印象どおりだけど……。そんなに勉強が嫌いなのか……)

「あら、随分な言い草ね、クリス」

一人が振り向くと、そこには食事を乗せたトレイ片手のパトリシアがいた。

「あはは……別に、パーティのこと言つてるんじゃなくてね、その、えーと……」

必死に取り繕おうと、しどろもどろになるクリスティを横目に、パトリシアは着席して嘆息する。

「はあ、いいわよ。」この軍人の9割9分は多かれ少なかれクリスと同じような考え方だし。でもフラン、あなたはなかなか見所がありそうだね」「ありがとう、と言つたほうがいいのかな」

「うん、あなたみたいな人なら教えがいがあるわね」「教えがい?」

「ああ、座学のうち竜に関する部分については私が受け持つことになつてゐるから」

「えつ、本当に?でも、パーティって忙しいんじや……」

パトリシアがこの対竜部隊で竜の研究をしてゐること、また研究班の長であることもフランシスは話に聞いていた。さぞ忙しいに違いない、と思っていたのだ。

「まあ、それなりに忙しいのは確かだけ……。でも、人に教える、

つていう行為は案外刺激になるのよ。素人考えから新しい発見が生まれることもあるし」

「へえ、そんなものなんだ」

「とにかく、やる気がありそうな生徒で楽しみだわ」

「期待に沿えるよう頑張るよ」

「まあ、頑張つてちょうどだい。あたしには関係ないことだし」

そう言つクリスティだが、これが他人事でないということに気が付くまでそつ時間はかかるないのであつた。

食事を終え、クリスティと連れ立つて食堂を後にするフランシス。この日の予定では、まず本部棟の作戦室で座学ということになつてゐる。一人して本部棟への道を歩いていると

「よう、クリス。そいつが例の新入りか?」

背後から野太い声。振り返ると、そこには一人の男がいた。

一人は、筋骨隆々の大男。身長は6フィート半ほどもあるだろうか。年齢は三十前後。広い肩幅に分厚い胸板。茶色の髪を短く刈り込み、顎までもみあげを生やしている。見た目の印象を端的に表すなら『豪傑』という言葉がふさわしいだろう。

もう一人は、細身の男。身長はフランシスと同じくらい、年齢は二十台中ごろだろう。艶やかな長い金髪を油でなでつけ、首の後ろで結んでいる。田鼻立ちの調つた一枚目だ。香水の匂いを漂わせ、襟元や袖口から装飾具をのぞかせる。かなりの洒落男といえる。

「エドガーにサイラス。一人にもその内紹介しようと思つてたんだ。フラン、こっちのでつかいのがエドガー。で、こっちの気障つたらしいのがサイラス。二人とも、あたしたちと同じ竜人兵だよ」

エドガーが進み出て、フランシスにその大きな手を差し伸べる。

「エドガー・ノ里斯中尉だ。よろしくな」

「よろしくお願ひします、ノ里斯中尉。フランシス・ファウラーです」

「ああ、俺のこととはエドガーでいいぜ。堅つ苦しいのはナシだ」

(エド)の人たちはみんなこうなのだろうか……)

などと思ひながらも、握手を交わすフランシス。

「ところでエドガーさん、ひょっとして僕が竜に襲われたとき……」

「おう、あん時は手当てが遅くなつて済まなかつたな。まあ、結果的に助かつて何よりだ」

どこか見覚えがあると思つていた。朦朧とする意識の中での、フランシスが見た二人の兵士。一人はクリスで、もう一人はこのエドガードつたようだ。

次いで、優男が進み出る。

「俺はサイラス・ガーランド少尉だ。家名で呼ばれるのは好きじゃないんで、俺のこともサイラスでいいぜ」

「お世話になります」

「お嬢さんじやなかつたのは残念だが……新しい仲間が増えるのは大歓迎だ。よろしくな」

サイラスとも握手を交わす。外見に似合わず、その掌は硬くじつごつしていた。

と、基地内にラッパの音が響き渡る。訓練開始10分前の合図だ。

「おっと、ゆっくりしてられないな。またあとで、な」
サイラスはクリスティに意味有りげま配せをすると、エドガー
と共に去つていった。

「それじゃ、あたしたちも行こつか

二人は、再び本部棟を目指して歩き始めた。

訓練の日々（後書き）

長くなつたので一日切りました。

訓練の日々～竜学を学ぶ～

「フランシスが一番最初に受けたことになつてゐる科目は、竜学である。竜学とは、生物学の中でも特に竜の研究を専らとするのことを便宜的に表す言葉だ。

作戦室に到着すると、そこにはダイアナとパトリシアが待ち受けていた。

「おはようございます　ってあれ？ 少佐？」

竜に関する講義だけに、パトリシアがいるのは予想していたが、ダイアナがいるのはフランシスの予想の外だった。

「私たちは学者と違い、単に生物としての竜についてだけでなく、『敵』としての竜についても学ばなければいけませんから。戦場における竜については、私たち現場の兵士が教えるのが一番でしょう」「ふうん……。それじゃ、あたしはこれで」

フランシスを案内したことで自分の役目は終わと思っていたのか、クリスティがその場を辞しようとする。

「待ちなさい、少尉。あなたも講義を受けて行きなさい」
「へ？ あたしも？ なんで？」
「思い当たることはないですか」
「いや、全然」

ダイアナが盛大なため息を漏らす。

「前回の報告書と課題です。あなた、何を書いたか覚えてていますか？」

「えーと、何だっけな……」「

ダイアナの顔がますます険しくなる。眉間に皺がより、こめかみには血管が浮き出でている。

ちなみに、対竜部隊では一ヶ月に一度、士官全員に活動報告書と課題の提出が義務付けられている。責任感と田的意識を高く維持できるよう、どの意図からダイアナの発案により始められたものだ。

『『遠征の長期化・長距離化が予想される場合、指揮官として留意すべき点は何か』』というテーマに対し、あなたが返した答えがこれです。『引つ越す』。……これが！ れつきとした士官の書く答えですか！』

ダン、と机を叩いてダイアナが怒声を上げる。理知的で冷静な印象がある（事実その通りなのだが）ダイアナが珍しく発した怒号に、クリスティは冷や汗を流し、すっかり竦み上がってしまっている。

「今までパーシヴァル閣下がお許しになっていたから私も田をつぶつていましたが、今回ばかりは我慢しかねます。少尉、当面の間、准尉と共に座学を受けることを命じます。定期的に試験をして、結果が悪かった場合は懲罰があるものと思いまさい」

「そんなあ、酷い……」

「何か異論でも？」

「とんでもありません、マム！」

『めりりとひと睨みされ、背筋を伸ばすクリスティ。さながら蛇に睨まれた蛙だ。』

「……さて、それでは氣を取り直して」

「ホンと一つ咳払いをして、ダイアナが話し始める。

「戦に勝つためには、まず敵を知ること。准尉、あなたは竜という生物についてどれだけ知っていますか」

「えっと、大きくて、強くて……凄い牙と爪があつて……火を吹いたり……」

思いつく限りのことを、じどろむどろになつながら口に出す。我ながら拙い答えだと思つ。

「ブツ、アンタおつきくて強い、つて。子供じゃないんだからさー」「准尉はこの間まで一般人だったのですから、仕方ないでしょう。少尉、あなたが代わりに答えなさい」

すかさず茶々を入れるクリスティに矛先が向いた。
「えーっと、あれですよね、竜類？に分類される生物のことです……
その一、おつきくて強い？」

全然情報が増えてないじゃないか、と突っ込みたくなるフランシスだつた。

「ゴルドニア大陸に生息する巨大陸上生物。竜類というカテゴリーに属する生物の総称であることは、少尉の言った通りです」

それ見たか、と言わんばかりにクリスティが自慢げに薄い胸をそびやかす。別に自慢できるほどることはしていないのだが。

「では少尉、今までに発見されている竜の種類を全て挙げてください」

「えーと炎竜、森縁流、銀晶竜、黒鉄竜と……何だつけ？ ア、

アーパー竜？

琥珀竜だつてば

パトリシアが突っ込む。

「……やはり、少尉を参加させて正解だったようです。あなたに合格点を出した兵学校の教官は何をしていたのや？」

フラン시스が視線を向けると、クリスティはぱつが悪そうに顔を背けた。

「さて、この五種類に、たった一例目撃報告があるので実在が疑問視されている飛翼竜ワイングドラゴンを含めた六種を総称し、竜類と呼んでいます」「でも、この六種類を同じ生物種として纏めて取り扱うのは学者としては納得行かないけどね」

パトリシアが口を挟んだ。

「それはどうして？」

フラン시스が思わず疑問を口にしてしまったが、ダイアナの話の腰を折つてしまっていることに気付く。怒らせてしまったのでは、ヒダイアナの反応をうかがうが、

「これは本日の授業に大きく関わる話です。博士、先を続けて」

と意外な反応。

「生物を系統立てて分類する、分類学という学問があるの。生態、骨や内臓の構造など様々な観点から共通点を探して分類していくん

だけど……。たとえば猫と虎と狼、この分類学といつ学問において仲間外れがいるとしたらどれだと思つ?』

「猫でしょ」

クリスティが即答。一方、フランシスは少し考えてから答える。

「狼、かな?」

「理由は?」

「えー、だつて狼や虎は強くて他の動物をバリバリ食べちゃう、つて感じだけど猫は日向で『ゴロゴロ』してるだけ、つて感じだし」

「虎は本でしか見たことがないけど……。体つきとか、猫と似てる気がして」

「正解は狼。フランシスが正解ね」

「えー、なんでー?」

「猫や虎、獅子は、骨格や内臓を見比べると実は凄く似てるのよ。この分け方だと、狼は犬に近い仲間になるわ。こういうのが分類学つて学問」

そんな学問もあるのか、とフランシスは感心する。あのまま村で暮らしていくなら、動物に関しても乳を出すのが牛、毛が取れるのが羊、くらいの関心しか持たなかつただろう。世界は広い。様々な知識が溢れている。

「で、竜なんだけど、種類によつて骨格から内臓から全然違うのね。行動パターンもバラバラ。似通つてるのは『御伽噺に出てくる竜』っぽい外見をしている、つてところくらいかしら。……確かに、外見も生物を分類する上で一つの指標になるんだけど。でも、これを一々くくりにするのは分類学に対する挑戦だわ」

「さて、話が横道に逸れましたが。まさに今博士が言つた通り、『御伽噺の竜』の如き姿をした存在、それらを我々は竜と呼び習わし

ているに過ぎません。討伐した竜の死骸から多少のことは分かっていますが、その生態はまだまだ謎に包まれています

「それじゃ、竜は謎に包まれた巨大生物、ってことで今日のお勉強は終わり！……ってわけにはいきませんよね、あはは……」

ダイアナの一睨みに小さくなるクリスティ。またもや蛇に睨まれた蛙状態。

「危険すぎて、長期的な観察もできないからね。生殖、捕食などについてもあまりわかつていないのよ」

「……では、そろそろ詳しい話に入りましょう。今日は、特には炎竜について。恐らく我々が一番戦う機会が多いであろう相手であり、フランスを襲つたのもこの種類です。博士」

ダイアナがパトリシアを促す。詳しい説明はパトリシア担当、といつことらしい。

「1214年、ブリー＝ディアの「ゴルドア調査団」が初めて遭遇した竜がこの炎竜ね。大陸の平原部に、広く生息していると思われるわ。赤褐色の鱗が特徴。ちなみに、今までの竜との遭遇例のうち、9割以上がこの炎竜。未踏の大陸深部のことはわからぬけど、この大陸で会うのはほとんどがこの炎竜と言つてもいいくらい」

「ちなみに、成熟した炎竜の鱗は銃弾を簡単に弾き返し、砲弾の直撃でもそう簡単には致命打を「えられないほどの耐久力があります」

大砲が撃たれるのを見たことがないフランスにとつては、ややピンと来ない話である。とにかく凄く頑丈、ということだけは伝わったのだが。

「竜の鱗は、脱皮するトカゲや蛇なんかの鱗と違つて、身体の成長

とともに下からどんどん新たな層が生まれていく仕組みらしいの。成熟した竜の鱗は数十もの層で構成され、衝撃をうまく吸収する構造になつてゐるのね。あと、鱗の下にある脂肪の層も、衝撃に強い要因」

「刃物による斬撃に対しても、完璧な防備というわけではありません。もっとも、常人の腕力で竜の鱗を損傷せしめることは不可能ですが」

「裏を返せば、竜人ならば竜の鱗に傷を付けることが可能、ということだ。実際、フランシスが救出された際は、エドガーやクリスティが竜に痛手を与えていた。

「大きさは80フィート超のものまで確認されてるわね。生まれたての竜、というものの観測報告がないから小さいほうはどれだけ小さいかわからないけど」

「80フィート!? 村の教会より大きいんじゃ……」

「さすがにそこまでデカいのは滅多にいないよ。フランを襲つてたのがだいたい60フィートで、あのくらいのが一番多いんじゃない?」

「それでも十分デカいって……」

あの日のことを思い出すフランシス。大の大人を一飲みにしそうな顎。牛をも握りつぶしてしまいそうな手。そして、地響きを起して疾駆する巨躯。竜人の力を手に入れたとて、本当に自分はある存在と戦えるのだろうか、と自問するも答えは出ない。

「走る速度は最大毎時40マイル以上ね」

「あ、ごめん。毎時ってどういう意味?」

「一時間に40マイル進める速さ、ということです。具体的に言えば、訓練された馬より若干遅い程度、といったところでしようか」

「それから、硬質の爪と牙、頭頂部から首筋にかけて生えている、トサカのように逆立つた鋭角の鱗が特徴ね。あと、最大の特徴、それが炎吐息。^{ファイアーブレス}炎竜を炎竜たらしめるもの、と言つても過言じやないわね」

まさに御伽噺の竜がごとく。この大陸の竜はブレスを吐く。ただし、必ずしも炎を吐き出すといつわけではなく、竜の種類によってブレスの種類は様々だ。

「我々がどれほど入念に作戦を立て、死力を尽くして戦つたとて、ただの一撃で戦局をひっくり返されてしまう。竜が持つ恐るべき能力です」

そう言うダイアナの顔には、怖いくらいの真剣さと過去の戦いを思つてかほんのわずかな悔しさ、苦渋のようなものが浮かんでいる。

「僕を襲つた奴は吐いて来なかつたけど……クリスは見たことがあるの？」

「もちろん。あたしたち竜人なら、牙や爪の攻撃は避けられないこともない。でも、アレだけはヤバい。射程範囲内にいる者は、竜人だろうが普通の人だろうがお構いなしで消し炭だよ」

いつもお氣楽なノリのクリスティも、表情が強張つていて。竜のブレスとはそれほど恐ろしいものなのか。

「クリスの言うとおり。成熟した炎竜の吐く炎吐息は効果範囲が最大五〇ヤード。温度ははつきり分からぬけど、鉄製の装備が溶けかけたという報告もあるわ。人間が喰らつたならひとたまりもないわね」

フラン시스は、あの時の竜がブレスを吐いて来なくて本当に良かつた、と思つと同時に改めて背筋の凍る思いがする。

(あの時の自分はまさに九死に一生を得た、といつやつだったんだな……)

しかし、冷静に考えると、竜とて生身の生物である。そのような強力な炎がなぜ吐けるのか。フラン시스も立派な大人だ。御伽噺の魔法なんて実在しないと理解できるだけの分別はある。まるで魔法じやないか。しかしふランシスはそう言わずにはいられない。

「魔法でもなんでもないわよ。一応、ブレスについてはその仕組みがある程度説明されてるの。これも教えたほうがいい？」

よひしい、ヒダイアナが先を促す。

「フラン、あなた曲芸師が火吹きをするのを見たことがある？」

「うん。小さいころ、お祭りで一度見たよ」

「あれはどうやってるかと言えば、口の中に含んだ度数の高い酒を種火に向かって一気に吹きつけてるのね。竜のブレスも、基本は同じ」

アルゴールに可燃性があることは、フランシスも知つていて、改めて考えたこともなかつたが、教えられればじゅく単純な原理である。

「といつことは、竜は体の中に『度数の高い酒みたいなもの』を持つてるつてこと？」

「そう。炎竜には私たち研究者が『炎囊』と呼んでいる特殊な臓器

があるの。『ひつやつて作り出しているのかはまだ謎なんだけどとにかく、炎竜は体内でアルコールよりもはるかに高い温度で燃える可燃性物質を生成して、炎嚢に溜め込んでいる。そして、牙に挟み込んだ石をこすり合わせることで火花を散らし、可燃性物質を一気に吹きつける、というのが炎吐息の原理ね。それともう一つ、ブレスの威力を飛躍的に高めている秘密があるわ』

「それは？」

思わず前のめりになつて話を聞くフランシス。学はないが、知的好奇心は豊富な性質である。竜という強大で謎めいた存在についての解説がおもしろいのだ。一方のパトリシアも所謂『教えたがり』であり、打てば響くような反応を示すフランシスのような相手だと教えがいがあるのでうづ、非常に活き活きと話を続ける。

「うん、それは竜の腹部にある、通称『鞆腹』^{ひびこなし}と呼ばれる器皿ね」

鞆腹とは、炎竜の腹部に存在する、その名の通り鞆の役割を果たす器官である。任意に動かせる鱗と、その下にある袋状の体組織がセットになったものだ。パトリシアが、石版に白墨でこの鞆腹の略図を示す。

「まさに、鍛冶道具の鞆そっくりな構造ね。これを何個も同時に動かすことで、普通に呼吸するよりもはるかに多い空気を体に取り込むことができる。そして、腹が膨れ上がるほど大量の空気を取り込んだ時点で一気に吐き出す。これが、五〇ヤードもの射程を可能にしているのね」

「へえ、よくできるもんだなあ」

その驚異的メカニズムに、思わず感嘆するフランシス。村の鍛冶屋の老人から、鞆という道具が今の形になるまでどれだけかかった

が、なんて蘊蓄を聞かされたことがあったが、竜という生物はそれを生まれながらにして備えているのだ。

「さうね。実に合理的な機能。まったく、竜ってのは凄い生き物だわ。実に研究のしがいのある対象ね」

フランシスとこう真面目な生徒に自分の研究分野についてレクチャーしたことが楽しかったのだろう、満足げな表情のパトリシア・クリスティはと、すっかり退屈したようで手元の羽ペンをこねくり回したり、鼻の下に挟んだりしている。元来じつとしているのが嫌いな性分なのだつた。

「……さて、炎竜の生態についてはこんなところでしょう。どうですか、准尉。竜という生物についての理解は深まりましたか」「はい。とても面白い話でした。そして……」

その先を話すのを躊躇する。

「どうしました、遠慮せずに言って御覧なさい」

「あの……恥ずかしいんですが、竜って怖い生き物なんだな、って改めて思つたつていうか」

「……」「……」

しばしの沈黙。つきりクリスティには馬鹿にされ、ダイアナには叱咤されるものと思つていたフランシスにとつては意外な反応だ。

「……それが正しいのですよ、准尉」

「どうしたことでしょう」

「竜を討伐するには、まず竜がいかに恐ろしい相手であるか、といふことをはつきりと認識しなければなりません。……どうしました

？」

いかにも意外だ、と言わんばかりのフランシスの表情に気付いたのだろう。

「いえ、てっきり『そんな臆病なことでどうするー』とでも言われるのかと……」

「最初に言つたでしよう、敵を知れど。竜とは、人知を超えた力を持つ恐るべき存在である、ということを学ぶのがこの授業の目的ですから。竜が相手では、竜人の力など風の前の塵に等しいということを覚えておきなさい」

「『』の隊に入るうとする奴はね、入団審査で『』の質問されるんだよ。『お前は竜という存在をどう思つか？』って。で、竜なんか怖くない、つて強がる奴はそこで落とされる。そういう連中は大概早死にするかトンズラするから」

ちなみに、クリスティ自身はこの質問に対し「よくわかりません！」と元気良く答えたのだが……。なぜ入隊が許されたのかは謎である。

「そうです。敵の恐ろしさを認識した上で、なおも勝利のために全力を尽くせること。これが奮勇ではない、本当の勇気というものですね。軍曹、あなたにも本当の勇気を身に付けてもらいたい。戦場で兵士を最後に支えるのは技術でも体力でも兵器でも、ましてや竜人の力でもない。勇気なのですから」

と、遠くから鐘の音が響く。時報の鐘だった。

「さて、今日のところは『』までにしておきましょう。准尉は次の科目の実施場所へ移動しなさい。少尉は准尉を案内したのち、先日

の課題の書き直すこと

「りょうかい……」

力のない敬礼をするクリスティイを横目に、ダイアナとパトリシアは退室していった。

「あー、もう！ あんたの教育係なんかになつたからこんな目に！ どうしてくれるの！」

「それはハッ当たりじゃ……（というか、少佐ははじめから一緒に座学を受けさせるつもりでクリスを僕の教育係にしたんじゃないかなあ）」

まあまあ、とクリスティイをなだめながら、フランシスは次の訓練に向かうのだった。

「まだブツブツと恨み言を垂れ流すクリスティと並んで歩くフラン시스は、何とか空気を変えようと話題を振つてみた。

「ところで、ちょっと聞いていい?」

「うん?」

「僕の場合は偶然竜人になったわけだけど、クリスや他の人たちはどうやって竜人になったの?」

かねてから持っていた疑問をぶつけてみることにする。フランシスの場合、偶然傷口に竜の血が入つたことによつて竜人となつたのだが、なにせ万人に一人の資質といわれる竜人である。偶然竜の血が誰か体内に入り、そしてその誰かがたまたま資質を持っていた、なんてことはそうそう起つるものではないだろう、と考えていたのだ。

「ああ、隊長が東方遠征の最中に竜の血を飲んで最初の竜人になつた、つて話は聞いたでしょ?」

「うん」

「『竜人をたくさん集めたら凄い戦力になるぞ』、つて思うのは当然だよね。で、上層部は兵士全員に竜の血を飲ませて一人でも多くの竜人を生み出そうとした」

「それでクリスも竜の血を?」

「そういうこと。去年までは、辺境騎士団と第七騎士団の入団志願者全員が竜の血を飲まされてたんだよ。……あれは不味かったなー」

「へえ」

「あと、謝礼を出して一般の人たちから実験に付き合つてくれる人、被験者っていうの? 募つたりね。お金に困つてゐる人たちが随分集

「去年まで、つて今はもうやつてないの？」

「うん。資質がない人は、普通竜の血を飲んでも何も起こらないんだけどね。たまに、何ていうの、パーティは『拒否反応』つて言つてたかな。竜の血を飲むと凄い熱を出して寝込んでしまう人が出るみたいで、酷いときには死んじゃつたりね」

自分もそうなつていたら、と思うとゾッとする。もつとも、フランシスの場合は竜の力がなければ腹の傷が元で死んでいた可能性が高いのだが。

「で、去年、とうとう隊長が実験を全部止めることに決めたんだ。戦力は確かに欲しいけど、いたずらに死人を出すようなことはしたくないって」

クリスは語らなかつたが、人道的な問題以外にも実験が中止された背景はいくつかある。

一つは、効率。竜人の資質は万人に一人、と言われている。一万人の一般人に謝礼を払つて被験者になつてもらつても、せいぜい一人か二人の竜人を生み出すことしかできない。実際のところ、一般から千名以上の被験者を集めながら、一人の竜人も生み出すことはできていなかつた。

また、竜人の数が増えると、その中に良からぬ事を企む者も出る可能性が高くなる。竜人の力を犯罪に用いたり、あるいは他国への亡命を試みたり。特に、大きな戦力となりうる竜人の他国流出は、国として避けたいことだ。

「今は鼠とかで実験してゐらしいけど。とにかく、竜の血についてもう少し詳しく分かるまで、人間で実験することはないつてさ」

「じゃ、これから先当分竜人が増えることはないつてわけか」

「去年みたい」

「そういうことになるね。隊長があそこまで熱心にフランを誘ったのもわかるでしょ」

レナードが強引にフランシスを勧誘したのは、今や貴重な竜人が欲しかったのと同時に、竜人の力を持つ者を自分たちが管理しうる立場におきたい、とう意図もあつたのだが。

そういうしているうちに、次の訓練が行われる練兵場に到着した。

「じゃ、頑張って。あたしはこれから課題のやり直しだよ、ハア……」

がっくりと肩を落とし、クリスティが去っていく。

（自業自得、じやないかなあ……）

と思いつつ、クリスティの背中を見送るフランシスであった。

訓練の日々～剣術訓練～

その後フラン시스はいくつかの座学を受け、この日予定表の最後に記されていた科目は剣術訓練だつた。これをこなせば、初日の訓練は終了だ。慣れない座学に少々疲れを感じていたが、あともう少し、と気合を入れ直す。

クリスティはダイアナに命じられた課題の書き直しに手こずつているため、フラン시스は独り練兵場に向かう。目的地は練兵場の片隅にある、白兵戦専用の訓練施設だ。藁と木材を人間に模して造つた人型が何体も設置されている。また石畳で覆われた区画があり、そこは模擬戦を行うための試合場として使われている。

フラン시스がその訓練場に近づくと、一人の男が細身の剣を振るつているのが見えた。既に夕刻に差し掛かっており、西日が目に入つて人物の特定はできない。

しかし、遠目にもわかる男の剣技の凄まじさ。

一太刀振るうごとに大気が唸りを上げ、その剣閃はさながら迅雷のごとし。一切の無駄の無いその動きは美しささえ感じられるほどであり、剣舞を舞う踊り子を思わせる。

やがて、男は剣を鞘に納めた状態で藁人形に正対する。ゆっくりとした動作で柄を握り一呼吸。

豪という凄まじい風切り音が響き、ほぼ同時にチンという軽い金属音。

竜人となり、動体視力が格段に向上したフラン시스でさえ、その男が刹那のうちに剣を抜き放ち、また鞘に収めた音だと気付くまで少しの間を要した。さらに少し遅れ、藁人形の上半身が横に滑り落

ちた。凄まじい速度の抜き打ちで、藁人形の胴体が切断されたのだ。

「フランシスか？」

呆気にとられるフランシスに、男が声をかけた。今朝方自己紹介をしたサイラスだった。

「サイラスさんでしたか。すいません、盗み見するような真似を」
「別に構わないさ。それよりお前、剣術の訓練に来たんだろ？」

「はい。でもどうしてそれを？」

「お前の相手をしてやつてくれと、少佐から頼まれてな」

彼の剣の腕を見込んでのことなのだろう。素人目にも、サイラスの剣が尋常でないことはわかつたのだから。

「そうだったんですか。よろしくお願ひします」

「ああ。で、お前、剣の経験は？」

「いや、サッパリです。刃物なんて料理と刈り入れのときくらいしか扱ったことがないですよ」

「まあ、そうだろうな。剣なんて、近頃は兵学校でも兵科によつちやあ教練から外されるくらいだからな。実戦じゃ役に立たないってない。

「でも、僕の訓練予定表だと剣術の時間が結構たくさんありますよ」

「竜人おれたちが竜を相手にする場合、話は別だ。竜の鱗うろこつてのは弾丸には滅法強いが、『刃物で斬る』攻撃に対してもそこまででもない。まあ、普通の人間の腕力じゃ傷を付けることもできないが。それで、お前には剣術訓練をやってもらつてことだらうな」

弾丸には強いが、斬撃には弱い。先刻の座学でも、同じような話は聞いていた。

「じゃあ、始めるか。まずはこれを。おれたち竜人の訓練用にあつらえた物だ」

サイラスから、一振りの剣を渡される。幅広で、刃渡り3フィートほどの両手剣である。それは形としては確かに剣なのだが、常識的な剣とは明らかに異質なものだった。まず、どう見ても分厚い。刃の厚さは1インチを超え、そちらの斧やまさかりよりも肉厚だ。当然、重量も生半可なものではない。

これを振り回すのは無理だろう、とフランシスは思つものの、実際に持つてみると呆気ないほどに軽く感じる。常人を超えた現在の身体能力と、頭の中にあるかつての身体感覚との間には未だ大きなギャップがあり、それは簡単に適応できるものではないようだ。

「よし、とりあえず上段に振りかぶつて振つてみる」「はい」

とにかく剣を上に掲げ、振り下ろしてみる。が、剣の勢いに振り回され、大きくバランスを崩してしまつ。

「ああ、それじゃあ駄目だ。ちょっと見てる」

そう言つてサイラスはフランシスのものと同じ型の剣を手に取る。

振りかぶると、一気に振り下ろす。太刀筋は美しい軌跡を描き、振り下ろした剣先は中段でぴたりと静止している。具体的に何が違うのかは分からなかつたが、自分とは明らかに違うといつことだけはフランシスにも分かつた。

「いいか、剣を振るとき大事なのは腕じゃなくて足腰だ。まずは足の親指でしつかり地面を踏み締めろ」

言われたとおり、足腰に意識を集中させ、一二振り三振り。へなへなした太刀筋ではあるものの、剣の重さに体を持つていかれることがなくなつた。

「よし、次は膝にも意識を集中させてみる。軸足の膝に溜めた体重を、一気に前に移動させる感覚だ」

さらに5、6度繰り返す。サイラスの見せた手本を思い出しながら剣を振る。

「あとは、腕を振るという動作には必ず背中の筋肉と腹の筋肉が連動していくことを意識しろ。そして、下腹を引き締めて一気に振り下ろせ」

一呼吸間を置き、今まで教わったことを頭の中で反復する。よし、と気合を入れ、一気に剣を振り下ろす。今度は体の軸がぶれることなく、真っ直ぐ剣を振り下ろすことができた。無論、サイラスの洗練された素振りには遠く及ばないものだつたが。

「よし、悪くないぞ。あとはその感覚を忘れないようにひたすら繰り返せ」「はい！」

数度、素振りを繰り返す。

「漫然と数をこなしても駄目だ。一太刀」とに考えながらやれ」「はい！」

さらに繰り返す。足の指、膝、腹筋、背筋。一太刀一太刀集中して素振りを繰り返す。

「とにかく、最初は『剣を振るつ』感覚を身体に染み込ませるんだ。これさえ身に付きや、あとは武器がなんであろうと応用が利く」「はい！」

それにもしても、サイラスの指導は実に理知的で的確だ。軽薄そうなイメージを抱いていたフランシスは、第一印象で決め付けてしまった自分を恥じるとともに、尊敬の念を抱く。

何度も繰り返しただろうか。フランシスの額からは大粒の汗がとめどなく流れ、シャツも汗で身体にへばりついている。

「よし、そろそろ休憩するか」「わかりました」

練兵場には、訓練後に渴きを潤したり身体を清めるための井戸が数箇所掘られている。二人は、その一つに向かった。

「フランシス、お前はなかなか見所がありそうだな。剣術に向いてるんじゃないかな」「そうでしょうか？　でも、サイラスさん、さつきの凄かつたですね」

訓練前にサイラスが見せていた剣技を指して、フランシスが賞賛する。

「さつきの？　ああ。あれか。まあな、これでも王都じゃこいつの腕でちょっとした有名人だつたんだぜ」

腰に挿した剣の柄をポンと叩き、サイラスが言つた。

「王都？　王都ってブリーディア本国の？」

「ああ。昔は王都の第一騎士団にいたからな」

第一騎士団とは、ブリーディア王都および王城を守護する近衛軍だ。自然、エリートが集まる。そのくらいのことはフランシスも知つていた。

「へえ、凄いですね」

「大したことじやない。一応貴族の三男坊でな。兄貴たちは官僚になつたが、俺は顔と剣の腕以外取り得がなかつたから、騎士団に放り込まれたつてわけだ。言つてみればコネ入団だな」

(さらりと顔の自慢をしたよ、この人。でも、何でこんな辺境に……)

「何でこんなところに、つて顔をしてるな
『いやいや、そんなことは……』

凶星を突かれ、慌てて否定する。他人の素性をみだりに探るのは不謹だと思ったのだ。

「まあ、聞きたいんなら遠慮するな。隠してるわけでもないしな」「いいんですか？」

「ああ。ちょっととしたヘタをやつちまでな、ここへ来たのは左遷つてわけだ」

「へマつて？」

「不倫がバレた」

絶句するフランシス。

「相手は、とある仮面舞踏会で出会った女だ。『そういう関係』になつてその後も度々会つてたんだが、運悪く密会の現場を旦那に見つかつてな。さらに不運なことに、その旦那は騎士団の偉いさんだつた。事は親父が揉み消したが、俺は責任を取らされて新大陸送りになつたつてわけだ」

恥ずべき過去を、なんでもない」とのようす語るサイラス。さつきの尊敬を返せ、と言いたくなるフランシスだつた。軽薄そうなイメージは間違いでなかつたらしい。

「まあ、じつちの暮らしも悪くないな。食い物は美味しいし煩い上司もいない。綺麗な姉ちゃんが少ないのとフェティキア（）のワインが飲めないだけは不満だが。……よし、そろそろ再開するか」

と、サイラスがフランシスを促す。なんだかなあ、といふ思いを抱えつつも、フランシスは日が暮れるまでひたすら素振りを繰り返すのだった。

（ ）ワインの産地として有名な地域

歓迎会

日もどつぷりと暮れた頃。初日の訓練を終え、軽く水浴びをした。フランシスは、自室で新しいシャツに袖を通していところだった。

部屋のクローゼットには、騎士団の制服や肌着など一通りの衣類と、背嚢や弾薬入れなどの小物が収められていた。無論、官給品である。当面生活に困ることはなさそうだが、細々としたものはやはり足りない。ちなみに、村を出たときに持ってきた荷物は竜に追われた際にどこかへ失くしてしまっている。事情を鑑みたダイアナの配慮により、初月分の給料の三割が先渡しされているので、近いうちに生活必需品を買いに行かなれば そんなことを考える。

「お腹空いたな……」

思わず一人ごちた。体力測定のときの一歩も動けない状態 クリストイは『燃料切れ』称していた ほどではないが、かなりの空腹だ。先刻の剣術訓練の影響だろう。そろそろ食堂に行くか、とフランシスがドアノブに手をかけたちょうどそのとき、ノックが鳴つた。

「はい、どなたですか」「サイラスだ。今いいか?」「サイラスさん? どうぞ」

フランシスがドアを開けると、そこにはサイラス、クリステイ、エドガーという竜人兵の三人がいた。

「どうしたんですか? こんな時間に」

「突然だが、お前晩飯はもう済ませたか？」

「いいえ、これから食堂に行こうかと思っていたところです」

「それは好都合」

三人は顔を見合わせ、頷きあつ。

「あのー、一体どうこう」とぞよつ「ひ

「これからちよつと飲みに行こうと思つてな。お前さんを誘いに来たんだよ」

にんまり笑つてエドガーが答える。

「飲みに、つてお酒ですか？」

「ああ、お前さんの歓迎会も兼ねてな。心配するな、今夜は俺たちの奢りだ」

「歓迎会ですか？ でも、僕はまだ仮入隊の身だし、そんなことをしてもらうわけには……」

「細かいことは気にするなつて。たとえ一時でも、同じ隊の仲間であることには変わりないんだからな」

「そうだよ、サイラスはこう言つてるけど、口実を作つて飲みに行きたいただけなんだから。遠慮しないで」

「こら、クリス！ 自分だけいい子ぶるんじゃない。お前も同じだろうが」

フランシスはそんなやり取りを見て苦笑しつつ、ありがたく申し出を受けることにする。

「そうですか……。じゃあ、有り難く受けさせてもうります。それで、場所は？ 食堂ですか？」

「馬鹿言つな。あそこには酔になりかけの料理酒しか置いてちゃいな

い。街へ出るんだよ」

「でも、もう六時過ぎてますよ。門限は七時だつて確か隊規に……」

「大丈夫だ。点呼を取るわけじゃないし、ばれないように忍び込めばいいんだ」

「それに、俺たちや竜人だからな。門が閉められたつて、その気になりや基地の壙なんざひとつ飛びだ」

「本当に大丈夫？」

「うん、うちはそういうところ緩いから。少佐にさえ見つかなければ」

「クリス、余計なことは言わんでいい！」

エドガーとサイラスが慌てたようにクリスを制止する。

「ヘイワード少佐？ ……やつぱり怖い人なの？」

座学でクリスティに見せたダイアナの剣幕を思い出す。いわゆる典型的な『怒らせると怖い』タイプなんだろう、という想像はついた。

「と、とにかく大丈夫だ。怒った少佐は確かに竜よりヤバいが、要是見つからなければいいだけの話さ」

「ほら行くぞ、美味え料理と酒が待ってるぜ」

エドガーがフランシスの肩を抱え、強引に部屋から連れ出そうとする。

(本当に大丈夫かなあ……)

困惑するフランシスだが、空腹ゆえに美味しい料理を奢るというのは逆らい難い誘惑だつた。

「そういうことなら……」

「よし、決まりだな。じゃあ、早速行こうか」

対竜部隊の本部基地があるシラーズの町は、フロンティアの中心都市だ。人口は8万人、フロンティアで生産される様々な物産の集散地であり、交易の中心地である。旧大陸の大都市のように大きく華美な建物こそ無いものの、新しい土地を切り開いて生きる人々の活力が満ち溢れる賑やかな町だ。集散地ゆえ、食べ物が安価で美味しいところもある。

小さな開拓村で生まれ育ったフラン시스にとっては、何もかもが珍しい。キヨロキヨロと余所見をしながら歩いていたせいで、時折人とぶつかりそうになる。

「そんなにシラーズが珍しいの？」

「ああ、うん。僕はジーンの村からほとんど出たことがなかつたしね」

「シラーズでこの調子だと、本国の王都なんか行つた日には大変なことになるな」

サイラスが苦笑する。ちなみにブリーディア王都の人口は50万以上。シラーズとは桁違いの大都市である。

「あたしも王都には一度だけ行つたことがあるけど……。人が多すぎてちょっと嫌になっちゃったな」

「それに関しては同感だ」

やがて、四人は繁華街の片隅にある一軒の酒場に辿り着いた。大通りからやや奥まった場所で、酒場としてはあまり良い立地とは言

えないのだが、それでも店のは多くの醉客で賑わつており、人気のほどが覗える。カウンターと10卓ほどのテーブル席で構成されている店内はほぼ満席状態だ。

サイラスたちは顔馴染みらしく、店に入るなり何も言わずに隅のテーブル席に通された。テーブルには『予約席』の札が。手回しのいい事に、事前に席を確保してあつたらしい。注文を取りに来た女給に、サイラスが慣れた様子で料理を注文する。女給の去り際に尻をなでようとするサイラスだが、盆で振り払われてしまった。

「痛う、盆で思いつきり叩くことないだろ？」「……。とにかくでフランシス、お前酒はいける口か？」

「そもそもあまり飲んだことが無いんですよ。収穫祭のときにワインやビールを一杯だけ、つて感じです」

「そうか。なら、いきなり強い酒は止めておいたほうが良いだろ？」

「な。とりあえずはビールでいいか。おおい、ビール4丁！」

程なくして、陶器のタンブラーに並々と注がれたビールが運ばれてきた。ペールエールと呼ばれる濃い金色をしたタイプで、強い香りとコクが楽しめる。

「それでは、ここに新たな仲間を迎えたことを祝して 乾杯！」

サイラスの音頭に合わせ、一同がタンブラーを傾ける。フランシスも、他のメンバーに倣つて一気にビールを流し込んだ。空きつ腹にアルコールが染み渡り、胃の辺りから熱い感覚が全身に広がつていいく。

「ぐう～～～！ 美味しい！ お姉さん、ビールあと四つね

早くも杯を干し、お替りを注文するクリステイ。

「ちょ、クリス、早くない？」

「何言ってんだ坊主、ビールなんざ水と変わらねえだろ。姉ちゃん、
今のはナシだ。タンブラーじゃなくてかめ甕で持つて来い」

高さ一フィートほどもある甕に並々と注がれたビールと、同時に最初に頼んだ料理のうちいくつかが運ばれてくる。牛スネ肉の煮込み料理、ピクルスやチーズの盛り合わせ、刻んだキャベツに塩コショウ、オリーブオイル、ワインビネガーで味付けしたサラダなど、予め仕込みが住んでいるもの、調理の手間がかからないものが中心だ。

勧められるまま飲み食いするうちに、フラン시스はすっかりいい気分になってきた。会話も弾み、流れから血の生い立ちや騎士団に入ることになった経緯などを話す。

「あたしはこの前聞いたけど……。フランって苦病人だよね」「そうかなあ。フロンティアには同じような境遇の人はたくさんいるだろうし

「いやいや、立派なもんだ。うちの餓鬼と変わらないくらいの時分に『親亡くしたってんだからな』

「あれ、エドガーさんにはお子さんいるんですか」

「おう、娘が一人な。こんな商売だからなかなか会えねえんだが。ニコマイアの町の近くにカミさんの実家があつてな。そつちで暮らしてるよ」

「エドガーって顔に似合わずすつじい親バカなんだよ。この前も『エミリーから手紙が来た』って大はしゃぎしちゃって

「つるせえな、お前も親になつたらこの気持ちが分かるだろうよ」

ぱつが悪そうに顔を赤らめるエドガー。豪快な男の意外な一面で

ある。

酒もいい感じに回り始め、一同はすっかり打ち解けた雰囲気になつた。

「ところで、一人はどうして騎士団に？」

ほろ酔い加減になつたフランシスは、遠慮することもなく質問をぶつける。

「おお、俺たちだけ坊主の身の上聞いたちや不公平だわな」

最初に答えたのはエドガーだ。

「俺の親父は指物師だった。本当は長男の俺が跡を継ぐはずだったんだが、素質がないつづーか、どうにもああいう細けえ仕事は性に合わなくてな。俺に向いてる仕事を探した結果が騎士団つてわけだ。なにせ、このガタイだからな」

そう言って、分厚い胸を叩く。豪傑、戦士という雰囲気を全身から発しているエドガーである。適材適所だつたと言えるだろう。

「クリスは？」

「あたし？ あたしは『竜と戦える』ってここに惹かれてね。凄いよね、だつてまるでお話の中の英雄みたいじやん」

「そんな理由で……」

好き好んで竜と戦いたがる人間がいるとは。驚愕するやら呆れるやらのフランシスである。

「まあ、ほかに行くあてがなかつた、つてのもあるんだけど」

「どういうこと？」

「あたし、^{ブリーディア}本国の商人の娘だつたんだけね～。親に無理矢理結婚させられそうになつたから、一年くらい前こつちに逃げてきたんだよ」

「それつてもしかして家出！？」

「まあ、そうなるね。素性の怪しい小娘なんて雇つてくれるところなんてなかなかなくつてさ。いやあ、^{うち}辺境騎士団の入団資格が緩くて助かつたよ。あのままだと大人しく家に帰るか、娼婦になるかの二つしかなかつたからね」

クリスティの言つとおり、辺境騎士団の入団資格はかなり緩い。慢性的な人員不足に悩まされているため、やる気のある人間は男女年齢問わず大歓迎という状態なのだ。

「でも、ご両親は心配してるんじゃない？　連れ戻されたりしないの？」

「実際連れ戻しに来たんだけどね～。でも、そのときには、あたしはもう竜人になつてたからね。隊長が両親を説得してくれて、それで諦めたみたい」

フラン시스の勧誘のとき片鱗を見せたように、レナードはかなり押しの強い人物だ。そして、相手に有無を言わせぬオーラがある。何より、『ドラゴンスレイヤー』の大英雄、音に聞こえたレナード・パーシヴァル直々に説得されてはクリスティの両親も引き下がるほかないつただろう。

「僕なんかよりよっぽど凄い人生送つてるよつな……」

フラン시스と同じ年なのだから、二年前といえれば16歳かそこらである。そんな歳で単身海を渡り、女だてらに軍隊に入るなど並大

抵の行動力ではない。フランシスは呆れるばかりだ。

「それより、サイラスの野郎がコルドアに流れてきた話のほうが傑作だぜ」

「残念だったな、その話はもう済ませたよ。……そういうや、お前の両親はブリーディアじやワイン用の葡萄を作つてたって言ったな」

サイラスが話題を変える。

「どこに住んでたんだ？　マーシスか？　それともライトウイッジ？」

「マーシスです。どうして分かつたんですか？」

「ブリーディアでワインの産地、しかも疫病で葡萄が全滅したって言つただろ。ワイン好きならこれだけでピンと来るさ」

「僕が生まれる前にこっちに来たから、正直マーシスのことは全然知らなかつたんですけど……。マーシスのワインってそんなに有名なんですか？」

「ああ。旧大陸じゃ五本の指に入る産地だな。特に、長期間寝かせるのに適した赤ワインに関しては他の追随を許さない。疫病以前に作られたマーシスのワインなんて、今じゃ従来の何十倍の値段に釣り上がつているほどだ。それだけの値段を払つても飲みたい、つて奴がたくさんいるってことだな。お前の前では不謹慎かも知れんが、新しい葡萄が育つまで最低数十年はあのワインが造れない、つてのは文化的損失と言つていい」

「あーあ、またサイラスの蘊蓄が始まつちやつたよ。語りだすと長いんだよねー」

「サイラスよ、そろそろビールも空いちまう。講釈はそのへりにしても、お前の大好きなワインでも頼もうじゃねえか」

「……分かったよ。マーシスには敵わないが、ここコルドアのワインも中々だ。特に赤はいい。しかも安いときてこる」

いつの間にか、甕一杯のビールが空になっていた。フランシスもそこそこは飲んだのだが、特にエドガーとクリスティはよく飲む。

「おーい、姉ちゃん、赤を四本な。ああ、いつものだ。あと、ソーセージ盛り合わせと鴨のスマーケ、羊の肩肉の香草焼きも頼む。あとお勧めの肉料理は？……鹿？そりゃあ最高だ、いいといひ見繕つて持つてきてくれ」

程なくして、ワインが運ばれてきた。同時に、薄作りの高給そうなグラスが四つ。なんでも、それはサイラスの私物で、わざわざこの酒場に預けてあるのだそうだ。

サイラスは慣れた手つきで抜栓すると、グラスの3割程度までワインを注ぐ。

「ヨリヨリのワインは長期熟成には向かないが、その分芳醇で若々しい香りが楽しめる。こうしてグラスを回すと香りがだな」

「だから、蘊蓄はいってば。ほら、フランも」

そう言いつつ、クリスティはエドガー、フランのグラスに並々とワインを注ぐ。

「全く、お前らときたら……。ワインの嗜み方つてものをわかっちゃいないんだよ」

ぶつぶつ言いながら、サイラスは手酌でワインを飲み始める。やがて、先ほど頼んだ肉料理が運ばれてきた。運んできたのは、今までフランシスたちのテーブルの給仕をしていた女給とは違う女性だった。年の頃は二十代前半、明るい巻き毛のブロンドで、パツチリした眼が印象的な愛嬌のある女性である。

んん、と田を細めるフラン시스。この女性、どこかで見たことがあるような。

「あら、騎士団の皆さんじゃない。久しぶりね」

「お、ナタリーちゃんか。今日は姿が見えなかつたが」

「店長の言いつけで、ちょっとお使いにね。……あれ？ そちら新

人さん？ つてどこかで見覚えが……」

ナタリー。フラン시스には、その名前に一人だけ心当たりがあつた。忘れるはずもない、その女性。よくよく見れば、当時の面影が残る。間違いない。

「もしかして、ナタリー姉ちゃん？ ジーン村のカーチスさんちの」「あなた……もしかしてフラン？ フランね！ いやまあ、随分大きくなっちゃつて！ こんなところで会えるなんて、ビックリしちやつたわよ」

「僕も驚いたよ。……久しぶり、姉ちゃん」

「なになに、二人は知り合いだつたの？」

「ええ、村で近所に住んでたの。六年前に一家でこっちに引っ越してきて以来だから 六年ぶりになるのね」

ナタリー・ヘイワード。かつてジーンの村で、フラン시스が暮らす教会の近所に住んでいた女性だつた。心根が優しく世話焼きで、孤児院の仕事を手伝つたり、子供たちの遊び相手になつたりしていつた。フラン시스にとつては幼馴染のお姉さん、という存在だつた。もともと可愛らしい少女だつたが、今はすっかり大人びた美女に成長していた。出るところはしっかり出ていて、スタイルも抜群だ。

「フラン시스、騎士団に入ったのね。あなた、喧嘩もしたことなかつたのに」

「いやあ、色々あつてね、アハハ……」

竜人であることは部外者には極力伏せておくよう、とダイアナから注意されていたため、入団の経緯については誤魔化しておく。

「いつからこっちに?」

「来たばかりだよ。騎士団に入つたのだけて昨日だし」

「そう。　会えて良かつたわ。　ふた月遅かつたら、すれ違いになつてたところだから」

「すれ違い?」

「うん。私、お嫁に行くから。あとふた町でこの町を出るの
「なんだ、ナタリーちゃんに会えなくなるのかよ。こんな美女を手
に入れた黒報者はどこのどいつだ」

「お相手はね、ここから南に40マイルくらい行つたところにネス
つて町があるのでしょ、そこで農場やつてる人」

幸せそうな笑顔を浮かべるナタリー。

「そつか……。おめでとう、今度お祝いさせてよ」

「ありがと。そんなわけだから、残り短い間だけど顔見せに来てね。
じゃあ、お姫さん呼んでるから私行くわね」

そう言つと、ナタリーは立ち去つていつた。

「結婚か……。姉ちゃん、結婚しちゃうんだ……」

「坊主、どうした?　浮かない顔してるぜ」

「あ、わかつた!　フラン、ナタリーのこと好きだったんでしょ。
もしかして初恋の人?」

「ち、違うよ!　そんな、好きとかじやなくて……」

慌てて否定するが、それは図星であった。恋心と呼ぶにはあまりに幼く漠然としたものであつたにせよ 確かにナタリーはフランスの初恋の人だった。ナタリーの一家が村から引っ越し越して6年。彼女のことばは、良き思い出として昇華できていたはずだった。しかし、いざ結婚するという話を聞くと、寂しいような哀しいような複雑な思いがちくり、ちくりと胸を刺す。

「離れ離れになつた初恋の人と再会したら、いきなり結婚の話か~。
そりやへこむよね~」

「そうかそうか。まあ、元気を出せ。初恋は実らないもんさ」「だから、違いますってば!」

この手の話でからかわれるのに慣れていないフランス人は、顔を真っ赤にして反論する。

「ほれ、もつと飲め。飲んで忘れちまえ」

「ああもう、エドガーさんまで! こつなりやとこどん飲んでやりますよ!」

やけくそ氣味にグラスをあおるフランス人。
フランス人の失恋話を肴にして、宴は続くのだった。

幕間その四

日付が変わりかけたころ。酒場でしこたま痛飲した四人は、基地へと戻っていた。

門限どころか消灯時間もとっくに過ぎており、当直の者以外は寝静まつていろははずの時間だ。当然門は硬く閉ざされている。

この部隊は規則違反に寛容だ、とはいっても、堂々無断外出しているところを見咎められれば処罰は避けられない。あくまでも「ばれないようにやるなら田をつぶる」という話なのだ。ただし、対竜部隊には、門限破りが咎められるのは現行犯のみ、という慣例がある。

「とりあえず、西側に回ろう。あつちは見回りの順路からは外れているはずだ」

サイラスの先導に従い、一同は基地をぐるりと囲つ壙に沿つて進む。

「よし、このあたりだな。フランシス、酔いは醒めてるか？」

「はい、多分大丈夫です」

ほとんど初めての酒であり、しかもどう考えても大量に飲んだはずなのだが、不思議なことに既に酔いは醒めかけていた。若干の頭痛とふらつきがこそ残っているものの、行動に支障が出るほどではない。サイラス曰く、この酔いの醒めやすさも竜人の特徴の一つらしい。便利な身体である。

「クリス、まずお前が先行して様子を探ってくれ。安全なようなら、

「了解」

「了解」

そう言つと、クリスティはひらりと塀を飛び越えた。3ヤード近くもある塀を、いとも簡単にである。

数秒のうち、クリスティから合図が送られる。

「よし、フランシス、次はお前だ。着地には気をつけろよ」

頷き、思い切り跳躍。やや高さが足りなかつたが、塀の上端に手を付き、その勢いで塀を乗り越える。膝のばねで衝撃を和らげ、できる限り音立てぬよう着地する。サイラス、エドガーも続いて飛び降りてきた。

「よし、兵舎までは500ヤードだ。慎重に行くぞ」

抜き足差し足、まるで盗人のように歩く四人。と、先頭のクリスティが突如立ち止まる。

「どうした？」

「シッ！ 足音が聞こえる……。あっち、本部棟のほう

フランスたちの右方、おおよそ300ヤード離れたところにある本部棟。フランシスはそちらに向けて目を凝らす。竜人の視力が、僅かな灯火に照らされた足音の主の姿を映し出す ブルネットの女性だった。

「やべえ、少佐だ！」

エドガーが思わず声を上げた。

「バカ、声がでかい！」

一同は、慌てて物陰に隠れる。クリスティが首だけ出して様子を伺う。どうやら、気付かれなかつたようだ。

(危なかつたな、あの眼のいい少佐によく気付かれなかつたもんだ)

同じ竜人でも、その能力には当然個人差というものがあり、ダイアナの視力は特に秀でているのだ。

(きつと、少佐も疲れてたんだよ)

(ああ、この時間に本部棟から出でてくるつてこたあ、残業でもしてたんだわうよ)

小声で会話する。

(で、これからどうするんですか？)

(大丈夫だ、少佐の向かう先は俺たちと同じ、士官用兵舎だわう。ここでやり過ぐして、頃合を見て兵舎に忍び込めばいいぞ)

(.....)

(どうした、クリス。顔が固まってるぞ)

(.....おしつこ、したくなつちやつた)

(その辺でしる、と言いたいところだが.....。音で気付かれちまう、今は我慢しろ)

もちろん、大量の飲酒が原因だわう。

(漏れるつ、漏れちゃうつー)

なんとか尿意を紛らわせようと、腰をくねらせ足踏みをするクリ

ステイ。と、運悪くその足元には枯れ枝が。乾いた音を立てて、枝が折れた。

「！ 誰か、そこにいるのですか！？」

鋭い声が響く。

（バカ、なにやつてんだ！）

（しょ、しょうがないでしょ！ 切羽詰つてるんだから！）

（言い合ひしてる暇はねえ！ 少佐が来ちまつ！）

そうしている間にも、靴音がどんどん近づいてくる。

（気付かれた以上、誰一人少佐に捕捉されずに逃げ切ることは不可能。……エドガー、クリス。今日の宴の主役は誰だった？）

（フランでしょ）

（ああ。俺たちの誘いに乗つて付き合つてくれたフランシスを、処罰させるわけにはいかない。そうだよな？）

（そいつはその通りだ）

（なら、俺たちがやることは一つだ。フランシスを無事、兵舎まで送り届ける。お前らも協力してくれ）

（……わかったよ）

（……もちろんだ）

（よし、フランシス、よく聞け。俺たち三人はこれからんでバラバラの方向に走る。少佐にわざと顔がばれるようにしてな。俺たちは門限破りの常習犯だから、少佐は怒り狂つてつて三人のうち誰かを追いかけるはずだ。お前はここで身を潜め、俺たちが少佐を十分引きつけるのを待つてから兵舎に入るんだ。いいな）

（でも、それじゃ誰か一人が犠牲に）

（気にすんなつて。さつきサイラスが言つたとおりさ。お前を逃が

すのが俺たちの責任つてやつだ）

（エドガーさん……）

（もう時間がないよ！ 敵との距離あと50…）

（行くぞ。いいか、俺たちの死を無駄にするなよ）

（じゃあね、フラン。短い間だったけど……。楽しかったよ）

（じゃあな、戦友。あの世で先に待ってるぜ）

無駄に悲壮な覚悟で、三人は物陰を飛び出していく。

「いや、大げさすぎるでしょ」

と、フランシスは三人の背中を見送った。

「サイラス・ガーランド！ またあなたたちですか！」

数秒後、皆が寝静まった基地内に、ダイアナの怒声が響き渡った。生贊となつたのは、サイラスだったようだ。続いて、鞘走りの音と、刃先が風を切る音が聞こえてくる。

「今度といつ今度は絶対に許しません！ そこに直りなさい！ この手で修正してあげます！」

「ちょ、少佐！ 真剣はまずいつて！ ってうわっ、切れる…やめて！ 切れてるって…！」

ダイアナの怒声とサイラスの悲鳴が交互に響く。

（じつや、死を覚悟するのもしょうがないのかも……）

「すいません、サイラスさん。あなたの犠牲は無駄にしません」

亟き、フランシスはサイラスに背を向け兵舎へと走つていった。

翌朝、食堂には端正な顔をボコボコに腫らし、体中に包帯を巻きつけたサイラスの姿が。ダイアナを怒らせるようなことは絶対にしないようにしようと心に決めるフランシスだった。

訓練の日々～弾道学～

フラン시스の訓練が始まって、一週間が経過した。その日最後の科目として、本部棟の作戦室で参謀科の中尉から戦術論の講義を受けたフラン시스（とクリスティ）。フラン시스はなかなかの飲み込みの早さを見せ、その中尉から参謀科に来ないか、と誘われたほどであった。クリスティのほうは半分眠つていたが。

作戦室を辞して、自室へ戻ろうとするフラン시스とクリスティだつたが、隣の部屋の開け放されたから聞き覚えのある声が漏れるのを聞いた。覗いてみると、そこでは客員研究員・パトリシアが一人の中年将校に向かつて何やら解説をしている。

「あれ、フラン？」

パトリシアと田代が合つてしまつた。

「ごめん、邪魔しちやつた？」

「別にいいわよ。ちょうど終わろうとしてたところだつたから」

「お、お前さんが噂の新入りだな」

中年将校から声をかけられる。40過ぎの精悍な男だ。長身で体格が良く、黒髪を短く刈り込み、濃い顎鬚をたくわえている。叩き上げの軍人であろうことは風貌から察せられた。

「はい、フラン시스・ファウラー准尉です」

慣れない敬礼をしながら、自己紹介をする。

「俺はスコット・ベイカー少尉だ。^{スコット} 対竜部隊で砲兵隊長をやってい

る

「よろしくお願ひします」

差し出された手を握る。皮が分厚く、じりじりした掌だった。

「ベイカー少尉は、大砲での竜の討伐記録を持つ有名人なんだよ」「へえ、凄いなあ」

大砲で竜を殺傷するのは難しいと聞いている。その大砲で竜の討伐記録を持つ、というのだから大変なことだ。

「あんまり持ち上げるなよ、クリス。たいがいマグレなんだからよ」

スコットが謙遜する。

「ところでパーティ、君も講義をしてたの？」

「うん、弾道学ってやつの解説を少尉に頼まれてね」「弾道学？」

「要するに、大砲の弾が発射されてから着弾するまでの間、どんな軌道を描いて飛ぶのか、ってことを数学的に解き明かそうって学問。最近ようやく形になってきた、まだまだ発展途上の学問ね」

「へ？ 大砲の弾って真っ直ぐ飛ぶんじゃないの？」

わざわざそんなことを研究する必要なんてないんじゃ、と思つてしまふフランシス。

「まあ、近くに近い距離に、水平に打ち込むのならお前さんの考えもあながち間違っちゃいないんだがな。現実はもう少し複雑なのさ」「どういうことですか？」

「話は、そもそも大砲や銃の弾つてのは真っ直ぐ飛ぶもんじゃない

つてどこからだな

フランシスにとつては意外な言葉だった。大砲や銃の弾は、撃ち出したら凄い速度で目標目がけて一直線、という漠然としたイメージがあつたのだ。

「まずは風の影響をかなり受ける。強い横風の場合、500ヤード先の目標から数ヤード以上ずれることもある。あとは引力だな。これは俺もまだまだ勉強中だから、先生に説明してもらつたほうが良いだろ?」「うう

「もう、先生呼ばわりは止めてつてば。少尉は私のお父さんより年上なのよ?……えと、引力っていうのはね、全ての物体は引かれあう性質を持つ、つて最近提唱された学説

「引かれあう……? なんだか良く分からんだけど

「確かに難しい話だけどね。そうね、例えば体力測定のとき、あなたも鉄球投げをやつたでしょ。別に、鉄球じゃなくて小石でも何でもいいんだけど」

「それが大砲の弾とどう関係あるの?」

「手から離れた鉄球は山なりに飛びながら、地面に引かれるように段々と高さが落ちて行き、やがて地面に着く。じゃあ、どうしてこの鉄球は地面に落ちるの?」

「?? ごめん、ちょっと言つてることがわからないや

「うーん、そうね。じゃあ、話を変えるけど。例えばこの机、横から押せば反対方向に動くわよね。『物体に力を加えれば、その物体は移動する』。動物ですら経験的に知つている、宇宙の法則」

当たり前といえば、当たり前の話だ。うんうん、と頷きながら話を聞くフランシス。教えたがりのパトリシアは、その様子を見て饒舌になつていいく。話が長くなりそうなのを察知したクリスティは、あたしはパス、と言つて先に帰つてしまつた。

「じゃあ、この白墨。これを持ち上げて手を離す。すると、白墨は床に向かって落ちる。これっておかしいと思わない？」

「……手を離しただけで力を加えていないのに、『床に向かって移動した』のがおかしい、そういうことだね」

「（）名答。『なぜ物体は地面に落ちるのか』という当たり前のことをことを学者たちが散々考えた末、出した学説が『引力』。面倒な説明を省いてざっくりと言うなら、『地上の全ての物体には、常に地球に向かって引っ張られる力が働いてる』ってことね」

「へえ……。そんなのがあるんだ」

フランシスは多少こんがらがりながらも、パトリシアの言つていることをおおむね理解することができた。それにしても、学問といふのは面白い、といくつかの座学を経験して思つ。当たり前に起きている現象に対し、『なぜ』それが起こるのか考えるのが自然科学の出発点だ。日常にある些細なことにも、学問の種は転がっているのだ。

「で、この理屈に従えば、投げられた鉄球と同じく、砲弾も弧を描いて地面に落ちていくことになるわ」

「実際、そういう現象が起きてるんだな、これが。近距離じゃ無視していい程度の動きだが、長距離になればなるほど影響はでかい」

スコットは、長年大砲を撃ち続けてきた叩き上げのベテランである。そのスコットが言つのだから間違いないのだろ？。

「風、引力、その他もうもの要素を考慮に入れて、もっとも適切な発射角を算き出すのが弾道学なの」

よつやく話が最初に戻った。

「今まで砲手の勘と経験でやつっていたんだがな、もつと精度を上げる方法は無いもんかと先生に相談したら、数字で計算できるって聞いてな」

「それで週に一度、こうして弾道学と数学を教えてる、ってわけ。私も専門外だから、ほんの基礎的なことしか教えられないけどね」

いかつい砲兵隊長が背中を丸めて数字と睨めっこしている姿も意外だが、砲術に数学が必要だ、ということもフランシスにとつては意外だった。それにしてもこの少尉、この齢にして感心すべき向学心である。

「ところでそろそろ三ヶ月になるけど効果は出てるの？」

「若いもんにも勉強させてるし、先生が考えてくれた計算尺も役に立つてる。精度は確実に上がってるな。だが、理屈は正しくても、いかんせん砲と弾と火薬の精度が問題で頭打ちの状態だ。せっかく教えてもらつてるのに申し訳ないんだが」

大砲や弾の加工精度にばらつきがあるため、引力や風を考慮に入れておいてもどうしても弾着はずれてしまう。火薬の質・気温・湿度によつて火薬の燃焼に変化が起こるため、その影響もある。いくら弾道を計算しても、こうした不確定要素が着弾を乱してしまうのだ。スコットが竜を倒したのを『まぐれ』とい称するのも、大砲を狙つて当てる難しさを散々体験しているからなのだろう。

「まあ、俺たちにできるのはとにかく弾をばら撒いて、竜の動きを抑えることくらいなもんさ。最終的に頼りになるのは、お前たち竜人の白兵突撃だ。なにせ、一年ぶりの新人竜人兵だからな、みんなお前さんに期待してるんだぜ」

「仮入隊のフランシスあんまりプレッシャーかけないでよ、少尉」

「おお、スマンかつたな。まあ、死なない程度に頑張ってくれや、ハツハツハ」

ポンとフランシスの肩を叩き、スコットは出て行った。ほかの兵士たちから期待をかけられていることを知り、不安を禁じえないフランシスだった。

フロンティアのある街道。

5人の騎馬の男たちが、談笑しながら進んでいた。

「最近ようやく暖かくなつてきましたね」

「そうだな。このあたりは吹き曝しから、冬の巡回は辛くてたまらなかつたぜ」

「そうそう。いつのこと、炎竜にブレスでも吐かれたほうが楽だつて思えるくらいでしたよ、班長」

男たちは、辺境騎士団の団員。街道沿いの巡回と警備を受け持つてゐる。この日も、いつもの順路を回つていた。

「それにしてもいい陽気ですね。いつもして馬に揺られてるだけじゃ眠つちまいそうだ」

「バカ野郎、気を抜くんじやない。ここいらじや犯罪は少ないが、旅人が狼やジャッカルの群れに襲われたつて報告もあるんだぞ」

「すいません、班長。……ん？ あれはなんですかね」

一行の前方、街道から外れた平原の只中に一台の馬車の姿が。遠目からは分からぬが、何」とか問題が起きて難儀しているようだつた。

「なんだ？ とりあえず行つてみるか

近づいてみると、どうやら荷車の車輪が窪みにはまり、動けなくなつてしまつているようだ。三人の車夫が押したり引いたりしているが、なかなか脱出することが出来ない。

「いかんな。おい、我々も手伝つんだ」「了解」

団員たちの協力で、ようやく荷車を引き上げることに成功する。車夫たちは、へこへこと恐縮しながら感謝の言葉を述べた。

「なに、これも職務のうちだ。それにしてもお前ら、なぜこんなところに?」

「へえ、こここれらの道は大きく曲がってるでしょう。真ん中を突つければ近道になるつてわけでして」

「なるほど。気持ちは分かるがな、この辺は人通りも少ない。運よく我々が通りかかっていなければ、立ち往生していたかも知れんぞ。次からは横着せずに街道を通過のことだ」

「へえ、へえ。申し訳ないこつて。それじゃ、失礼しやす、騎士様」

そう言つて、馬車馬に鞭を入れようとする車夫。しかし、巡回班の班長は、その物言いに引っかかるのを感じた。『騎士様』。確かに自分たちは辺境騎士団員だ。しかし、騎士という職業は、ブリーディアおよびコルドアではとっくの昔に廃れてしまっている。このあたりの一般人は、自分たちのことを『兵隊さん』『軍人さん』などと呼ぶが、『騎士』呼ばわりは聞いたことがない。

「ちょっと待て。その荷はなんだ?」

そう言つて、班長は男たちを引き止めた。

「へ? いの荷物はうちの村の名物の、林檎の蒸留酒でござります。一冬寝かせたものを、隣町の市に卸しに行くといひでして」「そりが。念のため、中身を改めさせてもらひます。おい、お前たち

「はい」

団員たちが、荷車に近づく。と、おどおどしていた車夫たちの雰囲気が、にわかに剣呑なものへと変化した。その眼には、鋭い眼光が灯る。

「……？！　おい、お前たち、これは一体　　」
荷を改めていた団員が絶句する。一呼吸おいて、膝から崩れ落ちた。

「……余計なことに気付かなければ、殺さずに済んだものを」

喉を切り裂かれ、あるいは心の臓を突かれ、銃を構える暇もなく団員たちが次々と倒れる。

「くつ！　貴様ら一体何者だ！　――つ！」

一人残った班長の問いに、車夫は刃の一突きをもって答えた。

「……死体はどうする？」
「……隠蔽する暇はない。捨て置くしかあるまい」
「……余計な時間を食つた。急げ！」

男たちは風のようにその場を立ち去つて行つた。

「死者5名、か」

あくる日の昼下がり。ところは変わり、ここは対竜部隊本部基地、隊長レナード・パーシヴァル将軍の執務室だ。

「金品が持ち去られていることから、野盗による犯行として捜査をしています。しかし……」

報告書を読み上げる副官ダイアナが、一円言葉を切った。

「しかし、なんだね？」

「野盗の犯行ならば、わざわざ騎士団員を襲つたのが解せません。それに、殺しの手口が鮮やか過ぎます」

「鮮やか、とは」

「頸動脈、心臓。5人を絶命させたのは、いずれも急所への一撃によるものです。これは、明らかに訓練を受けた者の手口です」

「ふむ……。そうなると、犯人は軍人崩れか、あるいは 間者か」

「お言葉ですが、あの近辺に諜報活動の対象となるようなものは存在しないかと」

「それはそうなんだが……」

レナードは顎鬚をなでながら、しばし黙考する。

「……閣下、これからいかがいたしますか」

「当面は捜査の続行を。街道の巡回はひと班5人から10人体制にしそう。第七騎士団に沿岸警備の強化を要請、あとは本国の諜報部に繫ぎを取つて情報収集する、つてところだろう。まあ、本国から返答が来るのは数ヶ月後だ、諜報部のほうはアテにならんだろうが」「了解しました。手配します」

一つ敬礼をして、ダイアナが部屋を出て行く。

「……大事にならなければよいのだが」

執務室で、レナードは一人呟く。

同じころ、フランシスはシラーズの街にいた。細々とした生活必需品を揃えるためである。クリスティに案内してもらい、市場を回る。雑貨の露店で石鹼や裁縫道具を求め、支払いをしようと小銭入れの布袋を取り出す。と、横合いから小さな手が伸びて フランシスの小銭入れを搔つ攫つ。

「へつ？ なに？」

「なにボーッとしてるのー 引つたくりだよー」

田舎育ちのフランシスである。引つたくりなどという犯罪が起こること自体、全く頭になかったため、クリスティが叫ぶまで思考が停止してしまっていた。

「え？ ああ、うん、追いかけようー」

慌てて走り出す。見ると、犯人はまだ小さな男の子だ。ボロを纏つた身なりから、路上生活者であることが推測できた。

市場の買い物客に阻まれ、フランシスたちは思うように追跡をすることが出来ない。一方、その少年は小さな身体を生かし、人ごみを縫つてスイスイと逃げていく。かなりの距離を離されてしまったが、少年を見失わなかつたのは、ひとえに竜人の視力のおかげであった。

と、子供は横道に入った。恐らくは、人ごみの中でフランシスたちを撒いたと思ったのだろう。しかし、子供の考えは甘かつた。

「フラン、いた！ あそこー！」

「うんー！」

少年が振り返ると、背後には一人の姿が。しかし、彼にはまだ余裕があった。追っ手とはまだ50ヤードほどの距離がある。追いつかれる前に入り組んだ路地に入り込んでしまえば、そこは自分の庭のようなものだ。相手が常人ならば、彼の逃走は成功していたに違いない。しかし、今回ばかりは相手が悪かつた。

「一気に捕まえる！」

クリスティイが加速した。人気のない裏道ゆえに、竜人としての脚力を十一分に發揮できる。50ヤードの距離を詰めるのに、3秒とかからなかつただろう。少年は声を上げる暇もなく、クリスティイに捕縛された。

「こひ、人の物を盗つちや駄目でしょー！」

少年の頬を抓り上げ、クリスティイが怒鳴る。

「いててつ、悪かつたつて、頼むから許してくれよー！」

男の子は、涙目で許しを請う。

「子供だからって、やつてことと悪いことくらうわかるでしょー！」

「勘弁してくれって！　おいら、頼まれてやつただけなんだ！」

「はあ？　頼まれて？」

なんともおかしな言い分である。大した金額も入っていない小銭入れを、わざわざ人に依頼して盗ませるとは。

「ねえ、君。それってどうじうこと？」

「おこらにもよくわかんないけど……。わざ通りでオッサンに声をかけられて……。小遣いやるからあの軍人の財布を取つて来い、つて」

「なにそれ、変なの」

「本当に?」

「本当だって。嘘はつっちゃいないよ」

確かに、少年が嘘をつこうとも思えない。

「クリス、もういいよ。離してあげて」

「でも……」

「いいって。お金も返つてきたし」

貧しい身の上のフランシスは、路上生活者らしき男の子に同情的な気分になった。小銭を数枚取り出し、少年に握らせた。

「これは君にあげる。その代わり、もう一度と盗みはしないって約束できるかな」

「いいのか? 約束するって言つたって、おこら守らないかもしねないよ」

「それでも構わないわ」

「わかった、約束するよ」

フランシスは思つ。せめて少年に持つて欲しいのは、罪の意識。彼は貧しい路上生活者だ。望むと望まないとに関わらず、悪に手を染めざるを得なくなることがあるかもしね。そんなとき、今日の記憶が小さいながら歯止めとなるかもしれない。

「ありがとう、兄ちゃん」

手を振つて、少年は去つていった。隣のクリスティは呆れ顔だ。

「ハア、あんたがそれでいいんならあたしは文句言わないけどさ。

「フランって本当にお人よしだね」

「うん、それは自分でも思うよ」

「にしても……。妙な話だつたよね」

「うん。何者だつたんだろ、その男つて」

少年曰く、ビルにでもあるよつた服を着た、ビルにでもこそつな30男。それ以上の特徴は覚えていないといつ。

「ひょっとしてその小銭入れ、裏返すと宝の地図になつてたり、とか？」

「そんなことあるわけないだろ」

「だよねー。まあ、世の中変な人はたくさんいるからね。気にしなくてもいいんじゃない？」

「……うーん、そうかなあ」

若干の疑問を残しつつも、フランシスは買い物に戻る。この謎の男が、のちに起こる事件の鍵となることなど、このときのフランシスは知る由もなかつた。

幕間その五

フラン시스の訓練が開始されて、半月が経過した。レナードの執務室にて、ダイアナがフラン시스の訓練の進捗について報告する。

「座学は優秀です。勉強熱心で、飲み込みも早いと各担当教官も太鼓判を押しています。スタンフォード博士など、もっと早い時期に然るべき教育を受けていれば、と残念がつていてるほどです。遠くないうちに、士官としてふさわしい教養が身に付くかと」

「ほう、それは結構。実技のほうはどうだね」

「剣術はサイラス・ガーランド少尉が、格闘術はエドガー・ノリス中尉が主に担当していますが、一朝一夕で身に付くものではありませんので。実戦水準に達するまでは、今しばらくかかるでしょう」

竜人の体力は常人のそれとかけ離れているため、竜人に剣術や格闘術を教えるのは同じく竜人でなくては都合が悪い。なので、フラン시스にはサイラスやエドガーが一対一で稽古をつけている。

「馬術や野営術、銃の基本操作、応急手当などは、好都合なことに教える必要がありませんでした」

「まあ、彼も開拓地の男だからな。そのあたりの技術は当然身についているだろう。……で、どうだ、ものになりそつか?」

「申し上げたとおり、頭の回転は申し分ありません。白兵戦の技術に関しても、カンは悪くないといえます。優秀な兵士となる素質は十分にあると考えます」

「そうか、少佐がそう言つのなら心配ないだろ。引き続き訓練の総監督を頼む」

「了解しました。次の案件ですが」

そう言って、ダイアナは報告書の束を提出する。一枚目には、『ヒークス平原東部地方における炎竜の生態調査』とある。

「ほひ、どれどれ。……体長50～55フィートの成竜、ヒークス平原東部半径およそ12マイルを行動範囲とす、か。この調査隊の斥候はスオウとアルフだったな」

「はい。ですので、報告書の精度はかなり高いと思われます。いかがなさいますか」

「……よし、ニヒマイアの辺境騎士団本部に出撃を具申する。許可が下り次第、討伐に向かう」

「了解しました」

「作戦の指揮は、前回に引き続き少佐、君が執り行つてくれ」「『』命令とあらば。しかし閣下、私は……」

『前回』とは、フランシスが竜に教われる原因となつた作戦のことである。この戦いは、それまで副官として指揮官レナードの補佐をしてきたダイアナが、初めて一人で指揮を執つた戦いであった。

結果は『』存知のとおり、竜を取り逃がして一般人を負傷させるというダイアナにとって苦い初陣となつてしまつた。

唇をゆがめ、ダイアナが口『』もる。物事をはつきり言つタイプのダイアナとしては、極めて珍しいことだ。

「まだこの間のことを気にしているのか、少佐」

「……私はまだまだ未熟です。指揮官など不相応ではないかと」

ダイアナは、強すぎる責任感が仇となり、失敗を過剰に悔やむという短所があつた。レナードは、しばらくダイアナを指揮官から外して様子を見ることも考えたが、ダイアナにはこの失敗を乗り越

えられる精神力がある、そう信じて再び指揮を執らせることに決めたのだ。

「おいおい、いつまでこの中年男に前線に出さうとこいつなのだ。辺境騎士団本部からも、私の後継者を早急に育てるようこと再三指令が来ている。一度の失敗でへこたれてもらっては困るぞ」

「閣下の後継者などと…恐れ多いことです」

「君のほか誰に指揮官が務まるというのだ。判断力、分析力、決断力。どれをとっても私よりよほど優れているというのに」

「冗談が過ぎます。私など閣下の足元にも及びません」

「とにかく、だ。失敗を恐れていてはいつまで経っても前には進めない。失敗したと思うなら、次に生かせ。聰明な君のことだ、本当は言われなくともわかっているのだろう?」

レナードの言つとおりであった。次は絶対に失敗しないと心に誓い、戦術を練り直し、人知れず自らに厳しい訓練を課していたダイアナだった。

「……了解しました。拝命します」

そう言つたダイアナの表情からは、先ほどまでの不安の色は消えていた。

いい顔になつた、そう思つレナード。

「そうだ、今回はフランシスも連れて行つたらどうだね」

「准尉ですか？しかし彼の訓練はまだ」

「なにもフランシスを戦わせよう、ということではない。彼はまだ正式入隊するかどうか保留している立場だ。実際に我々の仕事をさせてやらないことには、決断もできないだろう。言ってみれば見学のようなものだ」

「……わかりました。仰せのまま」

「よし、では以上だ。よろしく頼んだぞ」

ポン、とダイアナの肩に手を置く。筋肉の緊張がレナードの手にも伝わった。表情にはおぐびも出していないが、きたる戦いに向けて早くも闘志を燃やしているのだ。プレッシャーをかけ過ぎたか、と思つレナードだったが、冷静すぎるダイアナのことだ、燃え上がるくらいがちょうどいいだらうと思つて思い直す。

（今度こそ……）

固い決意を胸に抱きつつ、ダイアナは執務室を後にする。

実戦へ

「僕が、実戦ですか？」

作戦室に集められた竜人兵の面々の前で、フランシスは実戦への参加指令を告げられた。

「はい。もちろん、まだ前線で戦わせるようなことはしません。嫌なら今回は見送つても構いませんが」

フランシスは言葉に詰まる。実戦ということは、あの恐ろしい竜と相対することになる。最前線に立たなくとも、何らかのアクシデントで竜がフランシスに襲い掛からないとは限らない。ちゅうび「この前」のよう。しかし

「分かりました。僕も連れて行ってください」

フランシスは、拒否しなかった。

「へえ……フランツて結構肝つ玉据わってるんだね。見かけによらず、なんて言っちゃ悪いけどさ」

「怖くないかと言われば、そりゃ怖いよ。でも……僕はまだ正式入団するかどうか決めかねてるわけだから。実際自分の目で見てから判断したい」

やはりフランシスは聰い、とダイアナは思つ。

「しつかりしてんなあ。俺なんてフランシスくじいの時分には女を口説くことしか考えてなかつたぜ」

「そりゃサイラスが特殊なだけじゃないのー？」

「まあ、心配すんな。お前さんには指一本触れさせねよ。ピクニックに出も行くつもりで気楽にしてろ」

フランシスの背中をバシバシ叩きながら、エドガーが豪快に笑う。

「ノリス中尉の言つとおりです。あなたを危険に晒すようなことは絶対にありません。しつかり私たちの戦いを目に焼き付けてください」

「はい」

「出発は三日後。出撃前の準備に関してはキーツ少尉に指示を仰ぐこと。以上です。解散」

訓練の合間に荷物を纏めたり、行軍について教わったりしつつ三日は瞬く間に過ぎ、フランシスたちは馬上の人となっていた。目標はヒークス平原。シラーズの街から北東におおよそ七〇マイル、未だ人の手が入らぬ未開の地である。

今回の作戦の目標は、このヒークス平原を縄張りとする炎竜の討伐だ。先行調査隊の報告によれば竜のサイズは55フィート。平均的な大きさといえる。動員された兵力は総勢250あまり、大砲が30門。実際のところ通常よりもやや多い人員だが、これは前回の失敗を踏まえての増員だった。また、この作戦には本人の強い希望で研究者のパトリシアも随行している。

竜人兵と士官、騎兵は一人につき一頭の馬が割り当てられているが、その他の兵は一頭立ての馬車に3～4人が乗り組んで移動している。他の軍隊ならば、この程度の距離だと歩兵や工兵は徒步で移動する場合が多い。しかし、対竜部隊の場合はなるべく全員が馬によって移動することが推奨される。それは、万一作戦が失敗した場

合の退却を効率よく行い、生存率を上げるためである。

戦闘に参加することはないと言われたフランシスだつたが、道中や現地で食料調達せねばならなくなることもあるため、ナイフと獵銃として使うためのマスケットを持たされた。背嚢には食料と幾許かの着替えが詰め込まれ、シャベル、毛布などとともに馬の背に括り付けられている。

クリスティはフランシス同様の装備に加え、一本の小剣と、3フレートほどの柄の先に円錐型の穂先を取り付けた、短槍のような武器を携えている。聞くと、それはスケイルピアサーといい、竜の鱗を刺し貫くための武器だという。サイラスはロングソードを三本、エドガーは長柄の巨大な戦斧を一本と、小型の片手斧を一本携えている。

三人の武器に共通して言えるのは、どれも異常に肉厚で野太く、無骨な造りだということ。竜人の腕力と竜の耐久力を考慮した結果なのだろう。

三人とも複数の得物を持っているのは、武器が損壊したときに備えてのことだ。常人をはるかに超える膂力をもつて竜に挑む竜人兵は、特に武器が壊れるリスクを考えなければならない。

「ねえ、クリス」

クリスティのほうに馬を寄せ、フランシスが話しかける。

「なに？」

「少佐はこれといって武器を持っていないよね？ やっぱり指揮官だから直接は戦わないの？」

「違う違う。ほら、少佐の得物はアレだよ」

そう言つて、クリスティは一台の荷馬車を指差す。

「アレは 銃？ 憎い大きさだけど 」

そこには、非常に巨大な銃が一挺積み込まれていた。全長は7フイート以上、太さは五インチほどもあるだろうか。もはや大砲と言つていいサイズである。肉厚で、無骨で、重厚な造りだ。

「ショミット式歩兵銃改。ハウリング・ウルフ 通称吼狼。口径一インチ、重量一五〇磅。遠距離から竜の鱗を貫通せしめる唯一の武器です」

二人のやり取りを聞いていたのだろう、少し離れた場所で馬を操つていたダイアナが説明する。

この銃は、対竜用に開発されたものだ。非常に扱いが難しく竜人以外はまともに撃つことすらできないが、その分威力は折り紙つきだ。通常弾のほか、竜の牙を削りだした被帽を用いた撤甲弾があり、これを用いた場合、入射角が深いという条件付ではあるものの、500ヤードの距離から竜の鱗を撃ち抜くことができる。この銃は、一発撃つだけで各部にガタが来て正常に動作しなくなってしまうため、一発撃つごとに整備が必要になるという困った代物だ。二挺用意されているということは、今回の作戦で撃てるのは一発のみということである。ちなみに、暴発の危険性も普通の銃よりはるかに高い。射手が常人の場合、暴発を起こすと死の危険性があるため、そういう意味でも竜人専用の武器であった。

「いささか信頼性に欠ける兵器ですが……何物にも替えがたい威力を持つのは確かです」

「少佐はアレでもう40以上も竜を倒してるんだよ」「40つてどれくらいなんだろう

数字だけ言われても、それがどれほどのものかピンと来ないフラン시스。

「少佐の次に多いのがエドガーで19だったかな。あたしが3、じやなかつた4で、でサイラスが確か7。少佐より討伐数が多いのなんて隊長だけなんだから」

「へえ、凄いんですね」

フラン시스が、素直に感嘆の声を漏らす。

「私は皆が協力して弱らせた竜に、遠く離れた安全な場所から最後の一撃を加えているだけです。賞賛されるなら、部隊全員が賞賛されるべきでしょう」

そう言うダイアナだが、40以上という討伐数は、ダイアナの卓越した狙撃技術があつてこそそのものである。いくら強力な火器とはいえ、当たる角度が浅ければ弾丸は弾かれてしまう。動き続ける目標相手に、一瞬のタイミングを見定め、確実に急所を狙い打つ。そんな芸当が可能なのは、部隊の中でもダイアナただ一人であった。

一日の行軍ののち、部隊は作戦地区である平原に辿り着いた。そこは、綿密な生態調査によつて判明した竜の縄張りから、僅かに外れた地域である。竜の縄張り意識の強さを利用して、作戦の失敗時退却しやすくなるための選択だ。きわめて異例ながら、フラン시스が竜に襲われるという事例が起きてしまったため、安心はできないのだが。

ダイアナの号令のもと、陣地の設営が始まる。フラン시스は待機を命じられたため、することがなく手持ち無沙汰である。

「退屈そうね、フラン」

パトリシアが話しかけてきた。

「お前は何もせずに見ていら、つて少佐に言われちゃって。ほら、あそこで穴を掘ってる人がいるだろ？ あのくらいの仕事は手伝わせてくれてもいいのになあ」

「働き者ねえ。尊敬すべき美德だと思つけれど、今回は対竜部隊の作戦がどういうものか知ることが第一なんだし。しつかり見学するのも大事よ」

「そういうもんかな」

話をしているうちに、設営は進む。平原の中でも小高い場所に二箇所、陣地が張られている。30門の大砲も、半分ずつ分けて設置された。

「あの大きな穴は何のために？」

「あの、って言われても……。私はあなたと違つてそんな遠くまで見えないのよ」

そう言つて、パトリシアは双眼鏡を覗き込む。

「あれは落とし穴ね。もちろん、あの程度の深さじゃ足止めにしかならないけど、膠が仕込んであるから多少竜の機動力を削ぐことができるわ」

「あの、大砲の横で組み立てるのは？」

「あれはバリ스타。巨大な弩弓ね。竜に対しても大砲より効果的なんだけど、装填にかかる手間と命中率が問題ね」

「あそこで網を広げているのは？」

「あれは跳ね上げ式の罠ね。柔軟性のある網を竜に絡ませて、動きを止めるの」

他にも塹壕を掘つたり、目印となる地点に旗を立てたり。兵士たちが滞りなく準備を進めていく。

「凄い大規模な作戦なんだなあ。まるで戦争みたいだ」

「思つていたのと違つた?」

「うん。竜人のみんなが正面から突っ込んで戦つみたいな感じかと思つてた」

竜の討伐は、竜人の白兵戦によつて行うものだと思つていたのだ。物語に出でてくる、遍歴の騎士のことくである。

「それは無茶よ。いくら竜人といつても、不用意に竜に近づくなんて自殺行為だし」

「そなんんだ。僕がクリスとエドガーさんに助けられたときは、二人だけで竜を倒してたから。そういうものだと」

「それは非常時だったからよ。それに、あの竜はブレスをはくことも出来ないくらいに弱つていたみたいだしね。あなたを追いかけたのも、最後の力を振り絞つての行動だったのよ。それでも、何のサポートもないあの状況で竜に白兵戦を挑むには決死の覚悟が必要だつたはず」

フランシスは心の中で、クリスティとエドガーへの感謝の念を新たにする。クリスティも大したことではないように振舞つていたが、あの戦闘の裏には壮絶な覚悟があつたのだ。

「トラップで足を止めて、大砲やバリスタをこれでもか、つてくれに打ち込んで、そこで仕留められればそれでよし。駄目なら少佐の吼狼、最後の手段として竜人兵の白兵突撃の出番、つてのが常道ね。竜人兵というのはあくまで最後の戦力なの。とつておきつてや

つよ

機動力を削ぎつつ、遠距離からの一方的な砲火で仕留める。それが、竜殺しの基本だつた。なるほど理に適つてゐる、とフランシスは思う。

程なくして、ダイアナのもとに伝令が。

「……先行隊、スオウ・モーガン中尉。報告にあがりました」

中背で瘦身のその男は、年のころ20代後半。特徴的な黒髪と切れ長の黒い瞳を持つていた。どことなく涼やかな、落ち着いた印象を与える男だ。

「彼はスオウ。見て分かると思つけど西方との混血で、彼も竜人兵のひとりよ」

小声でパトリシアが教える。

旧大陸エウレシアは、大陸中央部の山岳地帯・乾燥地帯を挟んで、大きく二つの地域に分けられる。ブリーディアはその東側、いわゆるルゲール文化圏と呼ばれるエリアに位置している。パトリシアによれば、彼は旧大陸西方の血を引いているらしい。

「『苦労です。では、詳細を』

「一〇〇〇時点、目標は作戦予定地より16マイル地点で大きな動きはなし。アルフレッド・ニューマン大尉が目標の監視を続行中。ダニエル・フレッチャー軍曹による『釣り出し』の準備は既に完了

一切の無駄を省いた、簡潔な報告であつた。

「よろしく。設営は間も無く完了しますので、『釣り出し』の開始は当初の予定通り一四〇〇にて。着いたばかりのところ申し訳ないですが、再び伝令を頼みます」

「了解」

短く答えると、スオウは馬にまたがり走り去った。

「作戦開始まであと3時間です。作業が終わった者から食事を取り、戦いに備えるよう伝達を」

補佐役の将校にダイアナが指令を下す。

「3時間、か」

フランシスは、独特の緊張感が部隊内に広がるのを感じる。戦いに参加することのないフランシスが出来るのは、ただ作戦の成功を祈ることのみであった。

開戦のとき

遂に、作戦開始の時刻、午後2時を迎えた。周囲の空氣はぴしりと張り詰めている。歴戦の兵士たちの顔にも、緊張の色が浮かんでいる。

フランシスは、平原を南から見下ろす小高い丘に設置された陣にて、竜が現れるときを待っていた。

同じ陣地にはダイアナとクリスティ。そこから北西方向に張られたもう一つの陣地に、エドガーとサイラスが配置されている。一つの陣にはそれぞれ多数の大砲とバリスタが設置されていた。

戦場における竜人の役割は、単なる戦闘員に留まらない。卓越した感覚器官を持つ彼らは、まず大砲発射の際の観測手となる。

そして、もう一つ重要なのが、命令の伝達係としての役割だ。

戦場で兵士たちが連携を取るには、潤滑な命令伝達こそがもっとも重要である。遠く離れた場所の味方への伝達法としては、古来より様々な音であつたり狼煙などが用いられてきた。しかし、それらはどれも伝わるまでに若干の時間を要する。「近くない場所なら音による伝達方法でもほぼリアルタイムだが、数百ヤード、あるいはマイルを超える距離となると、数秒のラグが出てしまう。光による伝達は夜間ならば有効だが、白昼に遠距離まで光を届けられる光源は今のところ発明されていない。

竜人がいる場合、話は簡単だ。その卓越した視力があれば、ハンドシグナルや手旗を使うだけで、数百ヤード先まで容易に情報を伝えることが出来るのだ。望遠鏡があれば、その距離はさらに数倍となるだろつ。

竜人兵が二つの陣に分けて配置されているのは、そういう理由があるからだ。

作戦は、『釣り出し』と呼ばれる行動から始まる。竜をわざと挑発して追いかけさせ、作戦予定地まで誘導するといつものだ。『釣り出し』の開始予定時刻が、午後2時。計画ではおよそ30分後、平原東から竜が現れる予定である。

「それにしても、釣り出しつて危険な作戦だよね」

フランシスは傍らのパトリシアに話しかけた。竜に追われた実体験から感じたことを口にする。

「まあ、そうね。でも、作戦全体の成否を左右する重要な役目だから」

そもそも、『釣り出し』が失敗すれば、作戦自体が不発に終わってしまうのだ。

「まあ……今日は大丈夫だよ、フラン」

クリスティが口を挟む。

「なにせ、『釣り餌』はダニエルだからね

「ダニエル？」

「ダニエル・フレッチャー兵長。騎士団に入るまでは、本国で競馬の騎手をしていた乗馬の名人よ

「そんなに凄いの？」

「勝率4割以上、って本人は言つてたかな」

四割と言われても、フランシスにはいまいちピンと来ない数字で

ある。

「私も競馬は詳しくないけど……。」の記録、一度と破られることはないだろうとまで言われてるわね。彼がいるからこそ、『釣り出し』という作戦が成り立つと言つてもいいくらい

「そんな人がどうしてこんな辺境に」

「竜に追われるスリルがどうのとか言つてたけど

と、クリスティが言葉を切る。

「どうしたの？」

「しつ、静かに！……………来たね。フラン、あんたら聞こえるでしょ？」

言われて、耳をすませてみる。竜人の聴覚が、異音を聞き取った。ドロドロという地響きが、はるか東方から響いてくるのだ。竜が近づく前兆であり、それは、『釣り出し』が成功したということだ。

ダイアナは、既に動いていた。

「全軍、戦闘配備！ 砲手は初弾装填せよ！」

号令とともに、部隊全員が動き出す。

「あたしも配置に着くから。フラン、あんたたちはここで大人しくしてるんだよ」

「うん。クリスも気をつけて。幸運を」

クリスティに向けて、親指を上にぐつと突き立てる。エドガーに

教わった、幸運を祈るおまじないだ。

「ありがと。じゃ、行って来るー！」

小走りに、クリスティが自らの持ち場に向かつて行つた。
地響きは徐々に大きくなり やがて、竜人ではない者の耳にも、
それがはっきりと聞き取れるようになる。

戦闘準備はすっかり整い、きたるべき開戦に備えて誰もが口を閉
ざす。あたりに響くのは、迫りつつある地響きのみ。

やがて、平原の東方、はるか彼方から土煙が上がる。疾駆する炎
竜が巻き上げたものであろうことは、一目瞭然である。
作戦指揮官たるダイアナは、口を真一文字に引き締めて『その時』
を待つ。

開戦のじや（後書き）

長くなつたので、一回投下です。
寸止めのようになつてしまい申し訳ありませんが、続
きは次話の投稿をお待ちください。

激戦

「来た来た！ 3時の方角、距離4000！ 『釣り餌』は健在！」

望遠鏡をのぞきながら、観測手を務めるクリスティが叫ぶ。間髪いれず、ダイアナの指示が飛ぶ。

「第一砲隊は地点A、第二砲隊は地点Cに照準合わせ、待機！ キ

ーツ少尉、速度は？」

「12時方向に毎分600です！」

「予定どおりですね。ベイカー少尉、準備よろしいか」

「万端であります、少佐」

砲兵隊長の威勢のいい返事が響く。

ドロドロという地響きは、やがてドシン、ドシンとリズムを刻む、はつきりとした足音となる。

竜人の視力を持つフランシスは、遂に炎竜の姿をその眼にとらえた。後足一本で平原を疾駆するその巨大な竜は、一人の騎馬の男を100ヤードほどの距離を開けて追いかけている。

「地点A到達まで、あと60秒！」

フランシスにとっては永遠にも感じる60秒。そして『釣り餌』は竜に追いつかれることなく、フランシスたちがいる南の陣から真北方向 地点Aを示す旗を通過した。

ズンという地響きと、短い咆哮。竜が、見事落とし穴に嵌った音である。落とし穴はそれほど深くなく、すぐに脱出されてしまうも

のであつたが、中には膠が仕込んである。この膠が足の鱗と鱗の間に入り込み、竜の機動力を削ぎ落とすことができるのだ。このポンントAに竜を誘導するのが、『釣り餌』たるダニエル・フレッチャ一兵長の最終的な役割であつた。

「第一砲隊、一斉掃射！ 撃——！」

ダイアナの号令とともに、凄まじい轟音があたりに響く。南の陣に据えられた15門の大砲が、一斉に火を吹いた。土煙を上げ、砲弾が着弾する。

「命中 ゼロ、至近弾は多数！」

クリステイが報告する。もっとも、これは曲射弾道での最大射程ギリギリに向けた射撃であり、端から命中は期待されていない。

「次弾装填済み次第、任意に発砲！」

次々と、砲弾が撃ち出される。

「グオオオツー！」

それまで『釣り餌』しか見ていなかつた竜が、こちらを向く。竜の怒りの対象を『釣り餌』から逸らせ、南の陣に向かわせる。それが、この砲撃の目的であつた。

「かかりましたね」

作戦通り。竜は、怒りの矛先を大砲に向けたようだ。落とし穴から這い出ると、『釣り餌』ではなく、陣地に向かい走行を開始する。

「砲隊はそのまま掃射！」

「了解！ 野郎ども、撃ちまぐれ！」

発射音の合間に、砲兵隊長スコットの怒号が飛ぶ。轟音に次ぐ轟音、やがて徐々に命中弾が出るようになる。砲に向けて真っ直ぐ進んでくる相手に対しては、狙いが付けやすい。左右の射角を気にする必要なく、とにかく目標の進行方向に砲弾をばら撒けばいいのだ。

「どうです、ベイカー少尉」「
「いけませんな。奴さん、体格の割りに随分頑丈だ。ここまでタフなのは珍しい」

望遠鏡を片手に、スコットが答える。
数発の砲弾をその身に受けるも、竜はさしたる痛手は負つていな
いようだ。しかし、これも想定どおりである。

「『吼狼』を。ジョンソン大尉、作戦指揮を。予定通りにお願いし
ます」

指揮を補佐役である若い将校に任せ、ダイアナは巨大な歩兵銃、『吼狼』を構える。地面にうつ伏せになつた、いわゆる伏せ撃ちの体勢だ。

砲撃を受けつつも、竜の足は止まらない。クリスティの報告が飛
ぶ。

「地点じまであと300㍍。
「撃ち方止めー！」

青年将校の指示により、発砲が止む。平原に響くのは、竜の足音と低い唸り声のみ。

やがて竜は、南の陣から真北に伸ばした直線、北西の陣から真東に伸ばした直線 その交差点に達する。地点Cだ。

地点Cに竜が到達した瞬間 三方から巨大な網が襲い掛かる。弓のようにしなる木材によって跳ね上げられた、特殊ネットだ。塹壕に潜んだ歩兵が作動したトラップだった。

「ガオアアアツ！」

爪を振りかざし、全身をよじつてもがくも、伸縮性のあるその網は、竜の身体を絡め取つて離さない。その間に駆け寄つた騎兵が、歩兵を回収し全力で離脱する。

好機。

地面に伏せたダイアナは、500ヤード先の目標に慎重に狙いをつけ 引き金を引く。

引き金を引いた瞬間。いけない、とダイアナは思った。遠距離狙撃は、非常にデリケートなものだ。呼吸で揺れる身体、筋肉の僅かな伸縮。頭の上から爪の先まで、全身のあらゆる感覚が引き金を引くという行為に集約されなければ、狙撃は成功しない。

言葉で言い表すことはできないのだが、どこかに、『ずれ』が生じた。ダイアナは、引き金を引いた瞬間にそれを感じ取つた。パン、という乾いた音が響き 弾丸は竜の鱗に弾かれた。入射角度が浅かつたのだ。

「全軍、全力射撃！」

狙撃失敗を見て取つた青年将校が、命令を下す。

耳を劈くような激しい発砲音が響き、一箇所の陣に設置された全ての大砲、バリスタが一気に火を吹いた。二方向からの十字砲火だ。

「グルアアアーッ！！！」

恐ろしい竜の咆哮も、激しい着弾音にかき消される。至近弾が土煙を巻き上げ、竜の姿を隠すが、砲兵は構わず発砲を続ける。

『釣り出し』によつて竜を誘導し、トラップで機動力を削ぎ、集中砲火を加える。知能があまり高くないと言われている竜に対しては、古典的で単純な作戦がむしろ一番効果的だつた。

「撃つて撃つて撃ちまくれ！ ありつたけの砲弾たまをくれてやれ！」

スコットの怒声が響く。

数分ののち、砲撃が止められた。土煙が収まるのを待ち、クリスティが戦果を確認する。

「損傷多数あるものの 目標は健在！ こちらに向けて進行を開始してます！」

ふう、とため息を一つ漏らすダイアナ。竜は手傷を負いながらもゆっくりと身体を起こし、歩き始めた。

「ベイカー少尉、砲の稼働状況は」

「6門が作動不良であります」

「向こうは 8門が健在、だそうです」

北西の陣からの手旗信号を受け、クリスティも報告する。

大砲は連射するとさまざまトラブルが起きる。砲身に歪み、ひ

び割れが起きたり、不発による弾詰まりが起きたり。また、砲身が熱を持ちすぎた場合、次弾を撃つまで冷却時間が必要になつてくる。

「あしたちの出番、ですね」

緊張の面持ちで、クリスティが言つ。

「……止むを得ません。ベイカー少尉、残りの砲のうち半分に榴弾を装填。弾幕とともに、竜人兵の突撃を行います」

榴弾と、はぐく最近新たに開発された、炸薬を仕込んだ砲弾である。対人戦では威力を發揮するものの、炎竜にはあまり効果がない。ここに使われるのは、あくまで田ぐらましとしてであつた。

クリスティは、弾薬入れなど余計な荷物を外して身軽になる。深緑の野戦服のほかに身に着けているのは、腰に挿した一本の小剣。背中には、スケイルピアサーをくくり付けた。

「いつでも行けます」

クリスティの言葉を受け、ダイアナが北西の陣に視線を向ける。エドガーとサイラスからも、準備完了の合図。

「よろしい。カウントののち、突撃開始」

ダイアナが右腕を高く掲げ、指でカウントを取る。三、二、一
ダイアナの腕が振り下ろされると同時に、クリスティが陣を走り出た。北西からは、ほんの僅かに遅れ、エドガーとサイラス。

ばねで弾かれたかのような加速だ。前傾姿勢で疾走するクリステ

イは、数歩のうちに最高速度に達する。その姿は、さながら豹か山猫か。

「支援砲撃開始！」

クリスティたちの背中を追い越すように、砲弾が飛翔する。着弾とともに上がる大きな爆炎が、大地を震わせる。

一番槍をつけたのは、クリスティ。500ヤード弱の距離を20秒からずに走破したクリスティは、爆炎と土煙を突つ切つて跳躍する。

「でええーーっ！」

逆手に小剣を持ち、身体を回転させるように叩きつける。その斬撃は、竜の首の辺りを浅く切り裂いた。

「先を越されちまつたか！」

長剣を振りかぶり、サイラスが突撃。袈裟懸けに切りつけた一撃で、足の鱗を斜めに削ぎ落とす。

「つおおおーーりやあつー！」

最後に到着したエドガーが、身の丈ほどもある戦斧を、立ち木を切り倒すがごとく横薙ぎに振るつ。斧の刃先が、鱗深くまで突き刺さった。

一方でダイアナは、一挺目の『吼狼』を構え、射撃体勢に入った。今回の作戦に持参したのは、一挺のみであり、これが最後だ。外すと後はない。慎重に、射撃のタイミングをうかがう。

「でえいつ、やつ！」

両手の小剣で矢継ぎ早に攻撃を繰り出すクリスティだが、そのほとんどが鱗に阻まれる。

「まつたく、えらく頑丈な野郎だぜ」

斧を振るいながら、エドガーが愚痴る。

「クリス、こいつは鱗が厚い、砲撃で出来た傷を狙え！」
「分かつた！」

先ほどの集中砲火で、数箇所鱗がはがれて血が滲んでいる場所があつた。三人は、そこを重点的に狙っていく。

「グオオオーーツ！！」

竜の右腕が、クリスティに向けて振るわれた。しかし、その一撃は空を切り、地面を叩くのみ。
「当たらないよっ！」

その腕を足がかりに、クリスティが跳躍。背中のスケイルピアサーを抜き放ち、全体重をかけて頭部に突き立てる。しかし、またも鱗に阻まれる。致命傷には至らない。

「ほんと頑丈だな、コイツ！」
「エドガー、クリス、まずい！」

と、サイラスが叫んだ。竜の下腹の鱗が、波打つように動いてい

た。鞄腹^{ぶいこはら}が動作している証であり、それは炎竜が持つ最強攻撃ブレスの予備動作であつた。

「やばっ！」

幸い、ブレスを吐くには数秒の『溜め』が必要であり、その間竜の動きは止まる。クリスティ、エドガー、サイラスは、その脚力をもつて全力で離脱する。竜の腹がみるみる膨らんでいき、そして、その膨らみが胸、喉へと移動する。

ブオオオオーーツ！！

炎の塊が、竜の前方180度、数十ヤードにわたってばら撒かれた。

数百ヤード離れたフランシスの肌にも伝わる、圧倒的な熱量。鉄をも溶かすと言われるファイアーブレスが、一面を焼き払う。地面が黒く染まり、岩石が赤熱するさまはまさに地獄絵図であった。

「三人は無事？　エドガーさん！？」

フランシスが、悲痛な叫びを漏らした。その眼がとらえたのは、地面に倒れ伏すエドガーだった。所々服が焼け焦げ、煙を上げている。やがて、エドガーは地面に手を突き上体を起こす。死んだわけではないようだ。

「くつ、俺としたことが、油断しちまつたぜ……」

「エドガー、離脱だ！」

エドガーに駆け寄りながら、サイラスが叫ぶ。

「支援砲撃！ 中尉の撤退を援護しろー！」

ダイアナの号令に、再び大砲が火を吹く。サイラスに肩を借りつつ、エドガーが離脱する。

「すまねえな、俺はもう大丈夫だ」

「分かった、早いところ本陣に戻れよ」

ようめきながらもエドガーは後退し、騎兵がエドガーを迎えて走り寄った。それを見届けたサイラスは、クリスティとともに再び竜と対峙した。

「どうやら大丈夫みたい。でも、危なかつたわね」

「ああ、本当に良かつた」

フランシスとパトリシアは、ほっと胸をなでおろす。

「でも、攻めるなら今が絶好の機会よ」

「どうして？」

「あの規模のブレスを吐いたとなると、『炎囊』は空に近い状態のはず。しばらくブレスは吐けないわ」

クリスティとサイラスは果敢に竜に挑んでいる。しかし、致命傷を与えることはできていない。

「ひつなつたら、少佐の『吼狼』が頼りね」

ダイアナとて、同じことを考える。しかし、残された『吼狼』は一挺。これを外せば作戦はほぼ失敗、撤退を考えなくてはならない。必然、慎重にならざるを得ない。確実性を求めるならば、もっと接

近したほうがいい。しかし、作戦が失敗した場合、兵が撤退の指示も自らの責任をもつて行わなくてはいけないため、みだりに本陣を離れることもできない。

落ち着け。

先ほどは、名誉挽回に燃えるあまり、身体に力が入りすぎていた。呼吸は規則正しく、頭は冷静に。ダイアナは、自分に言い聞かせる。（やはり狙いは、頭部。しかし、キーツ少尉の攻撃に耐えたところを見ると、頭頂部は鱗が硬い。となると……）

「キーツ、ガーランド、こちらに向けて仰け反らせろ……！」

大音声でダイアナが叫ぶ。竜人の聴覚が、それをはつきりと聞き取った。クリスティとサイラスが、頷きあう。

「サイラス、肩を借りるよ！」

クリスティが、サイラスの肩を踏み台にして跳躍。竜の肩を飛び越え、背中に取り付く。

「やああああっ！」

鱗の隙間から、スケイルピアサーを突き立てる。背中を傷つけられた竜が、上体をよじった。

「もう一丁！」

サイラスは一気に竜の懷に飛び込むと、跳躍しつつ竜の顎を斬り

上げた。

「ウガアツ！？」

思わず、竜が大きく仰け反った。顔は完全に上を向いた状態だ。刹那が、何十倍にも引き伸ばされる感覚。極限の集中によつて、自分の周りだけ時間が静止したような。そんな錯覚さえ感じじるダイアナ。呼吸によつて僅かに上下する照準が、狙いと定めた一点に合わさる。

ああ、これだ。

かちりと、歯車が合わさつた。頭で思い浮かべる理想と、自身の身体感覚との一致。あとは、人差し指にほんの少し力をこめるだけ。

「 嘉い破れ」

巨大な発砲音。竜の牙によつて作られた撤甲弾は、大砲並みの炸薬によつて押し出され、砲身に刻まれた螺旋によつて高速回転。唸りを上げて飛翔するさまは、まさに咆哮する餓狼のごとし。

乾いた破裂音と、ぐじや、という鈍い音が同時に響く。ダイアナによつて放たれた特殊弾頭が、仰け反る竜の下顎から、後頭部に抜けた音であつた。

「グ……ガハツ……」

小さく呻き声を漏らし 竜の巨躯が大きく横に傾ぐ。
地響きを立て、竜は倒れた。

遠巻きにその様子を見ていたサイラスが、恐る恐る竜に近づく。
そして送られる、死亡確認の合図。

ダイアナ・ヘイワード少佐、実に46回目となる戦果だった。

死者0名、負傷者1名。ほぼ作戦通りにことが進み、結果だけ見れば完勝だったといえる。しかし、薄氷の勝利だったのも、また事実である。

激戦（後書き）

アルファ、ブラボー、チャーリー……つてのをそのまま使るのは面白くないので、

独自に作ってみました。

異世界ファンタジーなのにアルファベットか、という突っ込みは勘弁してください。

ライフリングは、この世界においては最新鋭の技術。

ダイアナの『吼狼』以外の量産銃にはコストや手間の関係から採用されていない、
という設定です。

戦いのあと

竜を撃破したのちに行われること、通常の場合それは学者による検分である。今回の作戦には、客員研究者のパトリシアが随行している。なので、最初にパトリシアと数人の部下による詳細な竜の死体の検分が行われた。

「ダメね。体長に比べて鱗が厚いこと以外は、特筆すべき点はなし。まあ、炎竜は珍しくないし、新しい発見はそんなに期待してなかつたけど」

とは、検分を終えた際のパトリシアの弁である。

学者たちの検分が終わると、待つてましたとばかり、200人から兵士たちが我先にと争つて竜の死体に群がる。

鱗、牙、爪……。竜の身体の一部は、好事家たちの間で高値で取引されており、それらの収奪が目的だ。本来ならば褒められる行為ではないのだが、『危険手当』代わりとして黙認されている。

そして、従軍神父による祈りが捧げられ、竜の巨体は火葬される。竜の身体が燃えていくさまを、部隊全員が沈黙をもって見送った。

速やかに撤収作業が行われ、部隊は帰路につく。本部基地まで、1日の道のりだ。

途中、幸運なことに、部隊はバッファローの群れに遭遇。兵士たちの手によって十数頭が仕留められ、その日の野営の思わずご馳走となつた。人に飼われた家畜と違い、筋が緻密で硬い肉だ。しかし、塩と野生の香草のみの味付けで、こんがりと炙られた野性味溢れるその肉は、戦に疲れた兵士たちにとっては最高の美味であった。

どこに隠し持っていたのか、やがて兵士たちはめいめいに酒を取り出し、ささやかな戦勝の宴が始まった。フランシスもおそらくに『り、宴の輪に加わる。

「エドガーさん、大丈夫でしょうか」

焚き火の炎を囲みながら、竜のブレスで負傷し、一足先に緊急搬送されたエドガーを気遣う。ギリギリで直撃は免れたが、それでも身体の広範囲にわたって酷い火傷を負ってしまった。竜のブレスはその余波だけで、人を殺傷しうる威力を持つのだ。

「一般人なら危なかつただろうが……。エドガーは竜人だ、心配はいらないさ」

ワインの瓶をラッパ飲みしながら、サイラスが答える。

「まあ、さすがにしばらく酒は飲めないだろ? ね」

「ちからは、両手に骨付き肉を持ったクリスティ。先の戦いで消耗を取り返そうと、凄い勢いで肉にかぶりついている。

あたりからは兵士たちが奏でる楽器の音に歌声、それにを煽る手拍子や合いの手が聞こえてくる。戦場の帰り路とは思えぬ、ゆったりとした時間が流れていた。パトリシアは、毛布に包まって小さい寝息を立て始めている。

それにしても フランシスは考える。この人たちほどんない想いを胸に竜と対峙しているのだろうか。白兵戦を挑んだ竜人兵の三人は言つに及ばず、砲兵や工兵たちも、一步間違えれば死ぬ可能性が

あつたはずだ。

「どうした、難しい顔して」

フランシスの内心を見透かすかのように、サイラスが尋ねる。

「いえ、その……。凄いな、って思って」

「ふうひ？」

肉を頬張りながら、クリスティが反復する。

「あんな戦いがあつたのに、みんな平然として……。心が強いんだな、と」

思ったことを素直に口にする。

「別に凄くなんかないさ。現に俺だって、あと十秒して倒せなかつたら尻尾巻いて逃げちまおう、なんて考えながら戦つてたんだからな」

「やつだよ。……見て、これ」

差し出されたクリスティの両手は、わずかに震えていた。

「戦つてる最中は興奮してて、怖いのが飛んで行っちゃうとはあるけど 戰いが終わると、しばらくなはこんな感じ。夜中にうなされて目が醒めることだってある」

「中には、恐怖が快感に変換されちまってるようなタガの外れた野郎もいるが。みんな多かれ少なかれ、恐怖つてやつと付き合いながらやつてるのや」

しばし考えて、フランシスは口を開く。

「どうしてそこまでしてこの仕事を？」

「命の危険がある仕事なんぞ、それこそ世の中にはまんとある。船乗りだつてそうだし、鉱山夫だつてそうだらう。俺は、たまたま巡り合わせで騎士団に入つちました。それだけのことさ」

サイラスは、一皿言葉を区切る。

「俺は今の暮らしに気に入つてゐる。好きなように酒を飲み、気が向いたら娼婦を抱く。王都のお硬い第一騎士団にいた頃、じゃ、こうはいかなかつた。それに、だ。対竜部隊の連中は氣のいいやつばかりだ。天から授かつたこの力を、連中のために使うつてのも悪くないさ」

柄にもないことと言つちまつたな、とサイラスははにかんだ笑顔を見せた。

「あたしも、ここの人たちが好き。右も左も分からなかつた小娘を、一人の人間として見てくれた。あたしが前線に立つことで、みんなが安全に戦えるなら、つて思えば頑張れるんだ」

フランシスは、一人の言葉を反芻する。偶然手に入れた、竜の力。大切な人のために、この力を振るえるなら、それはきっと素敵なことだ。生まれ育つたジーンの村の人々、孤児院の神父と兄弟たち、ナタリー。そして最近出会つた対竜部隊の面々。様々な人の顔が、頭に去来する。しばし黙考したのち、フランシスは、ひとつ決意を固めた。

翌日。本部基地に帰還したフランシスから、レナードに届出が出

された。コルドア辺境騎士団直属・対竜部隊への正式入隊を希望するものだ。届出が、即日正式に受理されたのはいつまでもない。

戦いのあと（後書き）

短いですが、次は場面転換ですので一旦投下します。

幕間その六

「ここは、レナードの執務室。一人の男が、レナードを訪問していた。細身の長身。細く上品な口髭をたくわえ、頭髪は油できつちりと整えられている。細い目からは、抜け目のなさそうな鋭い眼光を放っている。

「ライオネルよ、いつものことだが直接お前が出向いてくるとはご苦労なことだ」

「『挨拶だな、レナードよ。お前がなかなか二エマイア《こぢら》に顔を出さないものだから、わざわざ』『うして様子を見に来てやっている』『うのに』」

「氣安い雰囲氣でレナードと話す」この男は、ライオネル・ダグラス少将。第七・辺境騎士団統合参謀長という肩書きを持つ、騎士団の幹部だ。レナードとは同期であり、ともに東方遠征を戦い抜いた戦友でもある。

「用件は何だ。顔を見に来ただけ、ということはないのだろう？」

「ああ、順を追つて話す。先日、コルドア近海で一隻の私掠船が拿捕された。エルダリア自由都市連合公認の船だ」

エルダリアは、海洋貿易が盛んな都市の連合体だ。近年、海洋でも大きな勢力を持つに至ったブリー・ディアとの関係は、あまりよろしくない。

「乗組員を尋問すると、一年ほど前から定期的にコルドアへ人員を運んでいたことを吐いた。密入国だな」

「一年前から、となると少なくない人数だろう。第七騎士団の失態

ではないか

「何しろ海岸線が長大だからな。大目に見てくれ」

ブリー・ディアが領有するコルドアの海岸線は、千マイルに及ぶ。監視の目が薄い場所を狙つての犯行だった。

「とにかくだ。正規の手続きを踏みさえすれば、他国民であつても移住は認められる。わざわざ密入国するということは」

「後ろ暗いところがある、と。だがその話、なぜ私のところに持ってきた。密入国者の取り締まりは対竜部隊の任務ではないぞ」

「先日お前が報告を上げてきただろう。団員殺しの件だよ」

街道巡回中の団員5人が殺された、あの事件である。

「なるほど。……その密入国者の素性、どこまで割れている」

「それが、『エルダリアから乗つてきた』ということ以外、全く不明なのだ。果たして連中がエルダリアの人間であるかどうかもわからん」

「悩ましいな」

「お前の想像通り、どことの間者かもしれないし、ただ単に腕に焼き印のある連中だったというだけかもしれない」

腕の焼き印は、過去に服役経験があることの証だ。当然、正規に入国することはできない。

「その連中の足取りは?」

「捜索はしているが、芳しくない。間者だとすれば、どこかに根城を構えているはずだが、未だ見つかってはいない。……団員殺しが起きた現場を考えれば、都市部ではなく未開拓地に潜んでいる可能性も否定はできない」

「なるほど、話はわかつた。うちからも人間を出して、平原を探らせむ」

しかし、レナードに一つの疑問が残る。間者だとしても、目的が知れない。良質な鉱山が多数ある地域ならともかく、対竜部隊のあるシラーズ周辺は広大な平原が広がるのみ。耕作に適した土地ではあるものの、戦略的価値は低い。

(リリにあるもの。いや、リリにしかないもの)

レナードは一つの可能性を考える。竜である。

しかし 竜をどうしようというのか。竜の捕獲は、長い竜との戦いの歴史の中で、一度たりとも成功していない。もし首尾よく捕獲に成功したとしても、人知れず運搬することは不可能だろう。

あるいは竜の血。いや、これも恐らくあり得ない。運搬は可能だが、竜の血は容易く腐敗してしまう。現地で活動する辺境騎士団でなければ、竜の血を使って戦士を作り出すことは難しい。

考え込むレナードに、ライオネルが声をかける。

「下手な考え休むに似たり、だ。お前は昔から頭を使うのが苦手なのだからな。頭脳労働はわれわれに任せておけ」

「余計なお世話だ」

「とにかく、引き続き捜査を続ける。お前のほうも用心しろ。以上だ」

そう言って、ライオネルは執務室を辞去しようとする。が、何か忘れ物をしたかのように振り返った。

「そうそう。今度本国から偉いさんを招いての晩餐会がある。『ド

ラゴンスレイヤー』のレナード・パーシヴァルにも、是非出席して欲しいそうなんだが

「興味がないと伝えてくれ。ああいう場所でちやほやされるのは、どうにも我慢ならん」

ぶつきらぼうに言い放つ。

「そう言つと思つたよ」

ライオネルが、やれやれと肩をすくめる。

「それに、先日ヒヨツコが入つたばかりでな。ここを離れたくない」

「例の新人か。見込みはあるのかね」

「わからん。鍛え方次第だらう」

窓の外の練兵場を眺めながら、レナードが答える。レナードの視線の先には、訓練を受けるフランシスの姿が。

「上手く化けてくれるといいんだがな」

そう言って、レナードは笑みを浮かべた。わが子の成長を願う父親のような、そんな表情であつた。

訓練の日々～クリスティとの格闘訓練～

正式入隊したものの、フランシスの訓練課程はいまだ修了していなかつた。規定の科目を全て受け、試験に合格しなければ階級は准尉のままであり、前線に出ることも許されない。中には竜と戦うのに役に立ちそうにないものもあるのだが、決まりは決まりだというのがダイアナの弁であった。

夕刻。フランシスはクリスティと格闘訓練を行つていた。格闘訓練の相手は専らエドガーが勤めていたのだが、そのエドガーは先の戦いにより負傷。命に別状は無かつたものの、当分妻子の暮らす家に戻り、療養することになった。サイラスは、所用で騎士団本部に出向いていて留守。必然的に、この日の訓練相手はクリスティとなつた。

ブリーディアの騎士団で採用されている格闘術は、古来より騎士たちの間で培われた組み打ち術に拳闘術、そして西方はイードの国に伝わる伝統武術を組み合わせたものだ。打撃、投げ、関節技……。あらゆる技を駆使し、素手で合理的に敵を倒せるようにと考えられたもので、まだまだ発展途上の技術体系であった。

この日、フランシスはクリスティにやられっぱなしだった。

そもそも一日の長があるクリスティと初心者のフランシスとでは、実力にまだまだ開きがある。そして、クリスティは同じ竜人であるフランシスと比べても、相當に素早い。筋力や体重差による利点が少ないと見える竜人同士の戦いにおいては、敏捷性は大きな武器となる。

さらに、ダイアナに命じられ、一日数時間の座学をフランシスとともに受けさせられるハメになつたクリスティ。勉強嫌いのクリス

ティは、鬱憤を晴らさんとばかりに苛烈な攻撃を仕掛ける。初心者相手に少々大人気ない行為である。

少しは手加減してくれてもいいじゃないか、と思いながらも、フランシスは懸命にクリスティの攻撃を防ごうとする。
顔面に向けて、リズムを刻んで飛んでくる左右の拳。両手のガードで何とか防ぐも、今度は腹部ががら空きだ。

(！　いけない！)

クリスティの右拳が、下段に溜められるのを見て取ったフランシスは、とっさに腰を引き、上体をくの字に曲げ防御姿勢をとる。
しかし腹部に来ると予想した衝撃はなかった。目の前にすでにクリスティの姿はない。あつと思う間もなく、膝の裏を叩がけ、とんでもない勢いの足払いが飛んできた。

「がはつ！」

一回転せんばかりの勢いで、フランシスの身体は背中から地面に叩きつけられる。腹部を狙つかのように見せかけた、クリスティのフェイントに引っかかった形だ。とっさに頭部は守つたものの、背中に受けた衝撃で、肺の空気が残らず押し出される。が、この体勢はまずい。仰向けに寝転がつたままでは、好きにしてください、と言っているようなものだ。

「遅い！」

クリスティはその隙を見逃さない。つつ伏せになろうとするフランシスの身体にのしかかって右腕を取るや、両足でその腕を挟みこみ、一気に引き絞る。

フラン시스も負けじと、左手で右腕を掴んで踏ん張つた。この手を離してしまつと、肘関節を極められてしまつ。

「右腕に柔らかいものが。

フラン시스の右腕を、胸元で抱えるようにして引っ張るクリスティ。その胸のささやかなふくらみの感触が、フラン시스の右腕に伝わつてゐるのだ。筋肉の塊であるエドガーとの訓練では味わつことのない、絶妙な柔らかさだ。

格闘訓練を始めたときから、フラン시스は思つていたのだが。クリスティが相手といつのは、拙い。戦場では凄まじい働きを見せるクリスティとて、年頃の女の子である。身体が密着しがちな格闘訓練を行つるのは、色々問題がある。

女性の身体を触るなんて、孤児院の女の子たちと取つ組み合いの喧嘩をしたとき以来である。それも、相当小さかったころの話だ。初めて味わう成熟した女性の肉体の感触に、戸惑うやら恥ずかしいやら。ほんのちょっとぴり嬉しかつたり。余計なことは考へるな、と自分に言い聞かせれば聞かせるほど、意識はクリスティの胸のふくらみに集中してしまつ。フラン시스がクリスティにまるで歯が立たない原因のひとつは、間違いなくこの気持ちの乱れであつた。

「ん？ どうした、集中切れてるよ…」
「いだだだつ、参つた！ 参りました！」

思わず力が緩んでしまい、あっせり一本取られてしまつ。腕を開放され、安心したような残念なような。

「まったく、フランがそんなんじや張り合ひがないよ」

文句を言いつつも、クリスティの表情は晴れやかだ。フラン시스を散々痛めつけ、気分が晴れたのだろう。一方のフラン시스は、もやもやした感情が晴れない。

「さて、このへんで終わりにしようか」

日も傾き始めている。そろそろ部隊の活動終了を告げる鐘が鳴り響くころだ。

いい汗かいたな、と言いながら、クリスティはおもむろに上着を脱ぎ始めた。下に着ているのは、薄手の袖なしシャツ一枚。シャツは汗で身体にへばりつき、ほつそりとした身体のラインがあらわになる。フラン시스は慌てて目を逸らす。

「どうしたの？」

フラン시스の挙動に、怪訝そうな顔のクリスティ。フラン시스は赤く差す西日に感謝する。赤面を気取られずに済んだからだ。

（ちょっと、無防備すぎるよなあ……。本人に指摘したらして、怒られそうな気もするし……）

「さあてと、今日の晩御飯はなにかな？」

フラン시스の葛藤をよそに、上機嫌で歩き出すクリスティ。こんなときどうしたらいいのか、サイラスあたりに相談してみようかとも思ったフラン시스だが、ろくでもないことを教え込まれそうな気がしたので、止めた。

フランシスが対竜部隊へ来て、1ヶ月が経過した。かなりの駆け足だったものの、訓練課程をすべて終了。格闘、剣術、射撃術などは及第点ギリギリだが、座学ではその要領の良さを存分に發揮し、優秀な成績を収めた。フランシスと同時に試験を受けたクリステイは、ダイアナによって一回の追試を科せられる散々な結果だったことを追記しておこう。

レナードの執務室で簡単な任官式が行われ、ここに竜人兵フランシス・ファウラー少尉が誕生した。

数日後、基地内の作戦室に、フランシス、クリスティ、サイラスの三人と、砲兵隊長スコットをはじめとした主だつた士官が集められた。次に行われる作戦の説明を行うためだ。エドガーは、未だ療養中である。今回の作戦も、ダイアナに指揮が任せられており、室内にレナードの姿はなかつた。

「本作戦の目標は、バークリー峡谷地帯に生息する、アイアンダラゴン黒鉄竜です。体長は約45フィート。黒鉄竜は比較的希少な種のため、実戦経験のない者もいるでしょう。博士、よろしく」

ダイアナに促され、パトリシアが解説役として壇上に立つた。

「黒鉄竜は、山岳地帯に多く生息すると見られている種類。黒光りする鱗は炎竜以上の堅牢性を誇るかわりに、かなり重量があるせいで敏捷性は低いわね。側頭部から生える、羊のように湾曲した角がチャームポイント」

一枚の写実画を示しながら、パトリシアが説明を続ける。

「最大の武器は、やつぱりブレス。体内に取り込んだ砂を、圧縮空気によつて対象に一気に吹きつける、通称サンドブレスが脅威となるでしょうね」

砂を吹きつけられるくらい、何ともないんぢやないかと思うフランシス。同様のことを考えていた者は他にもいたようで、それを見て取つたダイアナが警告する。

「たかが砂と侮つてはいけません。竜の力によつて吐き出されれば、砂であつても恐るべき威力となります」

「そうね。岩だらうが金属だらうが、ヤスリをかけるように削り取つてしまつわ。生身の人間が喰らえば全身が塵になるまで削られるわよ」

恐ろしい解説に、室内の空気が凍る。

「今回の目標は比較的体長が小さく、成熟しきつていないと予想されるのが幸いです」

「そうね。体長からいえば、まだまだ子供といえるわ。鱗もそこまで厚くないはず」

室内の幾人からには、安堵の息が漏れた。

「さて。目標の生息地は起伏に富む地形ゆえ、砲撃は効果が薄いと見られます。しかし、地形を利用したトラップは大いに有効となるでしょう。ノックス少尉、頼みましたよ」

「イエス、マム！」

敬礼して起立したのは、工兵隊長のサムソン・ノックス少尉だ。

年齢は40手前、顎から口にかけてびっしりと濃い鬍を生やしている、野性味溢れる風貌だ。

「騎馬による『釣り出し』も、今回の作戦には不向きです。今回は、先行して作戦地域に入っている調査隊のスオウ・モーガン中尉に『釣り出し』を行つてもらうことになるでしょう」

スオウ・モーガンは、前回の作戦において斥候を務めた混血の竜人兵だ。戦いのあと、すぐに次の任地に赴いたため、フラン시스とはまだ一言も言葉を交わしていないかった。

「結構予定日は、6日後。作戦の概要是以上です。ノックス少尉、ベイカー少尉は作戦予定地の地形図を受け取り次第、トラップと大砲の運用予定を組んでください。では、解散」

士官たちが、思い思いに退出していく。フラン시스とクリスティもその場を立ち去るうとしたが、ダイアナに呼び止められた。

「あなたにとつては初の実戦となりますね。気分はどうですか

「……正直まだ実感がわきません」

「まあ、そんなものでしょう。さて、実戦に赴く前に、あなたには武器を選んでもらわなければいけません」

「武器、ですか」

「はい。剣術訓練で使用したものと同じ型の長剣でよいのなら、それでよし。しかし、もつと自分の手に馴染みやすい武器があるかもしれません」

言われてみれば、竜人兵の面々はそれぞれ異なる武器を使用している。サイラスは両手剣、クリスティは小剣とスケイルピアサー、エドガーは戦斧といった具合だ。

「わが部隊の工廠には、様々な武器が取り揃えられています。実際

に手に取つてみて、自分に合ひうものを選んでみてください。……キ

ーツ少尉、あなたも付いてつて助言を

「了解です」

「選んだのは、出撃の日までひたすらその武器に慣れること。わ
かりましたか」

「はい」

「よつし、それじゃ行こつか、フラン」

クリスティに先導されて向かつたのは、本部基地内に設置されて
いる武器工廠だ。大砲や銃をはじめ、部隊で使われる武器のほとん
どは、ここで生産されている。

工廠の建物に入った二人を迎えたのは、工廠長のゴドフリー・フ
オースターだ。60がらみの初老の男性で、背は低いものの肩幅は
広く胸板は厚いぐりとした体型だ。綺麗に禿げ上がった頭に、
白い顎鬚。いかにも熟練の職人といった風情である。

「お前さんが期待の新人か。話は聞いてるぜ」「期待だなんて、とんでもないですよ」

〔冗談めかした言い方ではあつたが、思わず恐縮するフランシス。

「ハツハツハ、随分頭が切れるつて聞いたもんだからな。こんな純
情な青年とは思わなかつたぜ」

「親父さん、冗談はいいからさー。わざわざ案内してよ」

「わかつたわかつた。そつ急くなよ、嬢ちゃん」

「ゴドフリーに従い、二人は工廠の一角にある武器庫に足を踏み入
れた。

「ほれ、竜人用の武器はその辺にまとまつとる」

「……随分大振りな武器が多いんですね」

辺りを見回し、フランシスが感想を漏らす。剣、斧、槍、弓……。そこには、様々な種類の、様々な形をした武器の数々。そして、そのほとんどに共通しているのは、極端に長大であるか、極端に分厚いこと。剣術訓練の際に使用した長剣も、同じ特徴を持っていた。

「竜に対して使うことを考えて造ったモンだからな。このくらいじやなきや、毛ぼどの傷もつけられねえ。それに、あんまり華奢な造りだと、お前さんたちの腕力に耐えられねえからな」「なるほど」

最近、ようやく自身の力が馴染んできたフランシス。自らの腕力で通常の武器を振るえばどうなるか、とこつことは想像がつく。

「選び方のコツって無いんですか?」「基本的に自分がしつくり来るものを、としか言えねえな。ただ、そうだな……。ホレ、そこに長柄の槍があるだら?」

「ゾーデフリーが顎でしゃくった先には、柄が5ヤードほどもある長槍が立てかけられていた。

「そういうのよ、あんまり長すぎるのオヌヌメできねえ」

意外な答えだ。間合いが長ければ長いほど有利だと、フランシスは考えていたのだ。

「まあ、お前さんの考えはもつともだ。間合いは長いに越したことねえし、長ければ長いほど振ったとき先端に威力が乗るからな」「じゃあ、どうして?」

「柄が長くなると、それだけ柄にかかる力がデカくなる。お前たち竜人ならなおさらだ。その力に耐えられるようにするには、柄をより頑丈に造りにやならん。そうすると全体の重量がどんどん増えちまつて、さすがの竜人でも扱いにくくなるのだ。そいつは言ってみれば失敗作だな」

「それにさ」

クリスティがその長槍を手にとりて、フランシスに突きつけた。

「竜と戦うとき、ここの間合って実は結構危ないんだよ」「どういうこと?」

「竜の攻撃つてさ、爪や牙は避けやすいんだよ。動きが大きいしね。避けにくいのは、尻尾。こいつ見えないところから、しかも凄いスピードで飛んでくるから」

身体の後ろから半円を描くように手を振つて、尻尾の軌跡を説明する。

「で、60フィートか70フィートの竜の尻尾だと、ちょうどこの槍の間合いから先あたりが危なくなつてくるの。尻尾つて、先のほうがスピード出るからね」

「中途半端な間合いより、懐に入つたほうが安全、ってことか」

「さつすがフラン、話が早いね」

「まあ、そういうひつた。長くとも、自分の身の丈くらいのモンにしておくんだな」

二人の助言をもとに、あたりを見回す。これだと思つたものを手に取り、あるいは軽く振つてみる。

試していくうち 手にしつくりと馴染む感触が。それは、刃渡り3フィート弱、幅広の長方形の刃を持つ、剣とも何ともつかぬ武

器だった。刃の先端部は軽く湾曲し、小さな『返し』となっている。端的に言えば、ナタ。ただし、普通のナタと違うのは、やはりあまりに分厚く無骨な造りだということだ。

「気に入つた？」

「うん。こういうの、村で開墾を手伝つたときに使つたことがあるから」

「ヘヴィーハチエットってんだ。なかなか悪くない選択だと思つぜ。ほれ、同じのもう一本持つてみな。両手に一本ずつのほうが、バランスはいいはずだ」

右手を一振り。刃先の重さを利用して身体を一回転、勢いのままに左手を一振り。言われたとおり、両手に持つたほうがスムーズに身体が動くようだ。

「これに決めました」

「そうか。俺が精魂こめて作ったモンだ。大事してくれよ」

「ひして、フランシスは一本のヘヴィーハチエットを手に入れた。以降、フランシスはサイラスやクリスティに教わりながら、ひたすら武器を手に馴染ませることに専念した。数日間は瞬く間に過ぎ、とつとつフランシスは出撃の日を迎える。

三日に及ぶ行軍を経て、対竜部隊はバークリー峡谷に辿り着いた。台地が川の流れによつて縦横に侵食されてできた、雄大な景色が広がっている。この峡谷の奥に生息する黒鉄竜が、今回の作戦の目標である。

到着次第、陣の設営が行われ、砲やトラップが設置される。竜にとっての遮蔽物が多い地形となるため、砲は前回の作戦より少ない代わりに、峡谷の地形を利用したトラップが数多く設置されていた。作戦開始まであとわずか。フランシスは、本陣にてクリスティ、サイラスらと待機していた。

「どう？ 緊張してる？」

クリスティに問われ、

「う、うん。大丈夫」

そう答えるフランシスだが、これはただの強がりであつた。気取られぬよう努めているが、膝は震え、歯の根も噛み合わない状態だ。

「まあ、心配はいらないさ。今回の作戦は前回よりもさうじて単純だ。誘導さえ上手くいけば、討伐は成功したようなもんだ」

作戦予定地に誘い込んだ竜を、トラップや砲撃で谷底に叩き落し、崖の上から集中攻撃、というのがこの作戦の概要だ。常道といえる

作戦だ。

「やうやう、大丈夫だよ。相手はちっちゃいやうしーし」

フランシスの内心は、見透かされていたようだ。一人からは、フランシスを安心させるような言葉がかけられた。

一人の言葉に僅かに安堵しつつも、フランシスは考える。自分は本当に闘えるのか。自分は場違いじゃないのか。自分は本当にこの部隊に入るべきだったのだろうか。グルグル思考が回る。

そうしている間にも作戦開始の時間は近づく。緊張のためか、フランシスの喉元には酸っぱいものがこみ上げている。

「工兵隊、準備完了！」

「砲兵隊、同じく完了であります！」

「モーガン中尉による田標の誘導開始まで、あと何分ですか」

「35分であります」

「第一接触地点までの予定到達時間までは？」

「75分の予定であります」

「よろしい。各員待機。30分後をめどに、戦闘配置につくよつこ

「イエス、マム！」

本陣内で、ダイアナから最終的な指令が下される。

(予定通りにことが運べば問題はない。あとは、初陣のファウラー少尉、ですね)

フランシスの才氣は、ダイアナも認めるところだ。現場で経験を積ませ、一人前に仕立て上げればレナードも喜ぶだろう、と考える。竜人兵の出る幕なく戦闘が終了すれば、それに越したことはないの

だが。

やがて、作戦開始時刻が訪れた。予定では、先行調査隊の一員であり、竜人もあるスオウ・モーガンが、目標の竜を誘導してくることになっている。フランシスも、竜が現れる予定の方角へ望遠鏡を向ける。

「お、来たな」

と、サイラス。言われて望遠鏡を覗き込むと、一人の男が岩山の縁から姿を見せた。黒髪が特徴的な、スオウである。少し遅れて、どしん、どしんと足音を轟かせ、漆黒の巨体がその全容を明らかにする。

「へえ、あれが黒鉄竜か。あたしも初めて見たよ。黒光りして綺麗だなあ」

「俺も3年前に一度見たきりだな」

竜のうちの9割を占めると言われる炎竜と比べ、その他5種の竜は極端に数が少ない。フランシスはもちろん、部隊に入つて一年目のクリステイにとつても初めての遭遇だった。

作戦室でパトリシアが示した写実画と異なり、側頭部から生える角は随分短い。体長もさほど大きくなく、その竜が年若いことを思わせた。

スオウは、岩から岩に飛び移るように、じつじつした地面を身軽に進む。黒鉄竜は後を追うも、足取りはいかにも鈍重で、竜人の脚力ならば軽く振り切つてしまえるくらいであった。スオウは、つかず離れずの距離を保つよう、所々で速度を調節する。

「ポイント・アル
地点Aまで、あと300！」

「砲兵隊、初弾装填よろしいか。くれぐれも中尉に当てぬよう」「心得てますよ、少佐。野郎ども、照準合はせはできるな！？」

「もちろんでさ、隊長！」

「結構。では、カウントを開始します」

部隊全体の空気がピンと張り詰めた。フランシスは吐き氣をこらえつつ、彼方の竜を見つめる。第一地点にその巨体が到達するや、スオウは一気に加速して竜から離脱した。

「砲撃開始！」

轟音が響き、大砲が一斉に火を吹く。砲弾が次々地面に着弾し、盛大な土煙が上がった。

「命中ゼロ！ 至近弾も僅少です」

ダイアナはその報告に眉一つ動かさない。前回の作戦同様、第一射は牽制が目的であり、命中は期待していない。砲撃に驚いた竜が、一瞬の戸惑いを見せたのち、その砲撃の放たれた方角に意識を向けた。ゆっくりとした足取りで、本陣に向かつて歩き始めた。

「第一砲隊も斉射を開始！」

竜の進行方向側面からも、苛烈な砲撃が加えられる。数発の命中弾が出るもの。その黒鉄竜にはまるで通じていないようだった。

「進行止まらず！ 地点Bまであと150！」ポイント・ベイ

「100の時点で砲撃停止。予定通りにお願いします」

砲撃によつて、竜を作戦通りの経路を進ませることに成功した。

現在、その竜はやや狭い谷の縁を、沿つよう歩いている。

「地点Bまで十、九、八……」

そして、凄まじい轟音とともに、竜の足元が崩落した。地面に埋設された発破が、儀装して潜む兵士たちによつて爆破されたのだ。

「ゴオオオウツ！？」

竜の体はバランスを失い やがて、峡谷の底へゆっくりと滑り落ちる。

「いまだ、退路を断て！」

ダイアナの怒号とともに、次々と爆発音が轟く。仕掛けられた爆薬が連続して爆発し、峡谷の壁面が崩れる。竜の背後には土砂が積もり、壁が出来上がつていた。

罠にはまつたのを理解したのか、竜は慌てるように峡谷の底を前進する。しかし、その先に待つっていたのも工兵隊によるトラップだ。前回の作戦でも使われた、膠が仕込まれた落とし穴。一本道の峡谷を進む黒鉄竜を、それに落とし込むのは赤子の手を捻るように容易い。

追い討ちをかけるように、またもや峡谷の壁面が爆発、崩落する。

「グアアアアアツ！……」

凄まじい咆哮を上げてもがく竜に、大量の土砂が襲い掛かる。程なくして、竜の体は半ばまで、土砂に埋まってしまった。

儀装を解いた歩兵たちが、谷底を覗き込む。やつたぜ、だのざま

あみる、だのと歓声が上がる。自分たちの戦果を確認したくなる気持ちが、我慢できないのも無理はない。

「馬鹿者、さつさと離脱しないか！！」

ダイアナが叫ぶ。が、時既に遅し。

豪、と烈風が吹きすさぶような音。黄土色の旋風が巻き起ひる。サンドブレスが、あたり一面をなぎ払ったのだ。付近の岩肌をぐりつそりと削り取るほどの威力。

数人の歩兵が直撃を喰らう 文字通り、粉微塵になつて吹き飛んだ。

ダイアナをも戦慄させる、凄惨な光景だった。

「 つ、何をしている！ 歩兵の離脱を急がせろー。」

炎囊に蓄えられた可燃性物質が切れると使用できなくなるファイアーブレスと違い、サンドブレスの素となる砂はそこらじゅうに存在する。一度ブレスを吐かれたとて、気を抜くことは許されない。

歩兵たちがある程度距離を取つたのを見計らい、ダイアナの命令が飛ぶ。

「全力射撃開始！」

号令とともに、崖の両側に設置された大砲、カタパルト、バリスタが一斉に火を吹く。砲弾や岩石が、身動きの取れぬ竜に向かつて雨霰と降り注ぐ。

「Jの調子じや、俺たちの出番はないかもしねないな」

「そうかもね。……フラン、顔色悪いよ。大丈夫？」

「クククと頷くフランシスだが、腰が抜けそうになるのを堪えるのが精一杯だった。胃の中身が逆流しかけたのを、必死に飲み込む。

先ほど見た、サンドブレス。人間が、跡形もなく消滅してしまったのだ。あまりに凄惨な光景だった。なまじ視力が優れていたばかりに、兵士が血煙を上げて粉々になる様を、さまざまと見せ付けられてしまった。

視界がぐるぐると回る。油断すると、気を失いそうになる。

「あ、やつたかも！」

クリスティの言葉に、フランシスは顔を上げた。見ると、竜の頭から大量の血が流れている。カタパルトによつて打ち出された岩石が、上手いこと竜の頭蓋を打ち碎いたらしい。

竜の動きは徐々に鈍くなり やがて、完全に事切れた。

フランシスは、思わず地面に膝を突いて大きく息を吐く。白兵戦の必要がなくて本当に良かった、と心から安堵する。しかし一方で、兵士としてこんなこといいのだろうか、といつ思いが湧き上がつた。

(　自分は、臆病なのだろうか)

傍らに立つクリスティとサイラスの姿を眺めつつ、そう自問する。フランシスの胸中に、漠とした不安が広がつた。

「……申し訳ありません。私のミスです」

ダイアナのもとで、工兵隊長サムソン・ノックスが謝罪した。

サンドブレスによつて死傷者を出したことに対し、責任を感じての

行為だった。

「罷を作動させたら、速やかに撤退。」の原則をもつとしつかり叩き込んでおけば、こんなことには……」

「いえ、作戦の全責任は私にあります。少尉が気に病むことではあります。それより、今日の勝利は工兵隊の働きによつてもたらされたものです。」苦勞でした

「もつたないお言葉であります、マム」

「ベイカー少尉、止めとなつた一撃の射手は

「アームストロング上等兵であります」

「見事と伝えてください。しかるのち、褒賞が『えられることも合

わせて」

「了解です

努めて感情を表に出さぬよう心がけつつ、ダイアナは労いの言葉をかけた。

「では、撤収を急いで。……死傷者については、帰還後報告書を上げてください」

「はつ、了解しました」

撤収作業に向かうサムソンたちの背中を見送りつつ、ダイアナは唇を噛み締めた。

作戦指揮官として出した、初めての死者。

油断したその兵士が個人が悪かったとしか言えないし、サムソンやダイアナがレナードから咎められることもまずないだろ？
しかし、それでも。

(悔しい)

両の掌から血が出るほどに、強く拳を握り締め。上に立つ者の重圧を、改めてその身に感じるダイアナだった。こんなとき、レナーだけは向を思ひのぞくつか。ふと、そんなことを考えた。

初任給の使い道

フランシスが正式入隊して1ヶ月あまりが経つたある日の夜。フランシスは、自室で一人、悩んでいた。目の前の机に積まれた、金の使い道についてである。

数日前、フランシスは入隊して初めて、満額の月給を受け取った。騎士団の中でも、対竜部隊の給料は特に高い。無論、危険な職務をかんがみてのことだ。フランシスの月給は、なんとフロンティアの平均的な農家の年収に相当するほどの大金額だった。

フランシスは困惑した。なぜなら、正式入隊してから仕事らしい仕事をしていなかつたからだ。出撃は、バークリー峠谷での黒鉄竜討伐作戦の一回のみで、しかも自分の出番はなかつた。その他の期間は、ほとんどを訓練か勉強に費やした。

本当にこんなに貰つていいんですか、ヒダイアナに訪ねたのだが、「有事がなければ、常備軍とはそういうものです。それに、部隊の働きによってブリーディアの国富が支えられているといつても過言ではありません。遠慮は無用です」

との返答。その場は納得したフランシス。

しかしこのフランシスは、悲しいかな、長年の貧乏暮らしが身に染み付いているため、いざ給料を手にしても、使い道が思いつかないのだ。

急に大きな金を手にした者は、えてして金遣いが荒くなりがちだ。しかし、フランシスは実直、誠実な真面目人間だ。飲む、打つ、買うなどそもそも頭がない。唯一贅沢をするとすれば、仲間たちに付

き合ひたときの飲食代くらいなものだ。

前日の晩、フランシスはダイアナに許可を貰い、故郷であるジーンの村に馬を飛ばした。生まれ育つた孤児院の、育ての親である神父に、初めての稼ぎを渡すためである。貰つた額の実に9割を持参したフランシスだが、神父にその大半を突っ返されてしまう。

「息子が必死こいて稼いだ金を、こんなにたくさん受け取れるかバカ野郎。だいたいお前、毎月これだけの額を仕送りするつもりだったのか」

神父の言葉を肯定すると、

「こんな金額、ガキどもに村一番の贅沢をさせたって使いきれるもんじやねえだろ? 都会に出て2ヶ月経つてのに、世間知らずは相変わらずか」

と、呆れられてしまう。

喧喧諤々なやり取りの末、子供たちが進学を希望したときのための蓄えとする、といふことで半分までを受け取つてもうひとつに成功し、翌朝早朝基地に戻つたフランシス。

結果使い道の思いつかない金が残つてしまつた、といふわけだ。

「とりあえず貯金、かなあ」

一人いじらむフランシス。が、孤児院の神父の言葉を思い出す。

「貯金、大いに結構だ。しかしながら、フランシス。お前も生まれたときから貧乏暮らしで苦労したんだ。初めての稼ぎくらい、自分のためにパートと散財しちまつても神様の罰は当たらんぞ」

自分のため、と言われても、思いつくなせいやが美味しいものを食べることくらい。

「誰かに相談してみるか」

そう咳き、フランシスは部屋を出た。部隊の仲間の部屋を訪ね、どんなことに給料を使つて居るのか聞こうと思つたのだ。

エドガーの場合。

先日、よつやく療養を終え基地に戻ってきたところだ。

「俺か？ 酒に使う以外は、全額女房に送つてゐるぜ。可憐い娘の将来を考えりや、貯金はいぐりあつても困ることはねえわな」

意外に堅実な意見だった。しかし、貯金以外の使い道を模索するフランシスにとつては参考にならない。

パトリシアの場合。

局員研究者である彼女も、騎士団から少尉相当の給料を受け取っている。

「私はだいたい本ね。最近は印刷機が普及し始めて、本の値段も下がつてきてるんだけど。本国から船便で取り寄せることが多いから、どうしても割高になつちやうのよね」

そう言つパトリシアの部屋には、様々な本がつず高く積まれていて、足の踏み場もないような状態だつた。なるほど、これなら給料を使いきるというのも分からぬではない。

本を読んで教養を高める、というのは悪くない。しかし、基地に

ある書庫には、まだ読んでいない本が山ほどある。それに、現在どんな本が出版されているのか全く疎いフランス。本を買つという行為はいまいちピンと来なかつた。

サイラスの場合。

「まずは希少なワインのコレクションだな。実は、こここの倉庫番を丸め込んで、地下の一部屋をワイン庫にしてるんだ。今度見せてやるよ。他には、女を抱いたり、博打に使つたりだ。ん？ どうした、その顔は？」

悪い大人の見本であつた。

ダイアナの場合。

「実家に仕送りをして、残つた余剰の金額は投資に費やしています。時代の流れを読み、他者とは異なる着眼点を持つことが必要であり、戦略眼が養われますよ。あなたもやってみませんか？」

増やしてもしうがないし、損をしてしまつたらそれはそれで空しい。またも、参考にはならない。

最後に、クリスティの部屋をノックしよつとしたところで、名案が思いついた。

仮入隊の一ヶ月間、クリスティには指導役としてずっと世話になつた。この初任給で、彼女に何かお礼をする。うん、これがいい、とフランシスは思つた。自分のために使え、という神父の言葉からは少々ずれているものの、誠実なフランシスの人柄がよくわかる考え方である。

とはいって、年頃の女の子に喜ばれること、ところのがまるで思いつかない。一緒に街へ出て、本人の希望に沿つようなものをプレゼントでもすればいいか、とフランシスは考えた。

都合のいい事に、翌日は大きな予定もない。部隊では月2回の休暇が認められているため、申請さえすれば外出できるはずだ。

「クリス、今いい？」

「ん？ フラン？ いいよ、開いてるから」

部屋には、ラフな服装でくつろぐクリスティの姿が。リンネルのゆつたりとした部屋着の上下、という服装だ。騎士団の制服を着ている姿しか見たことがなかつたフランシスの目には、新鮮に映る。脱ぎ散らかした服が散らばるなど、部屋の中は雑然とした雰囲気だつた。

「で、どうしたの？ こんな時間に」

「あ、うん。明日なんだけど……。お休みもらって一緒に遊びに行かない？」

「…………へ？」

一瞬ボカーンとした表情を浮かべるクリスティ。ハッとしたかと思つと、今度は頬がみるみる紅潮していく。

「あ、あんた、それって、もしかして で、デートの誘い！？」

「へ？」

今度はフランシスが絶句する番であった。恋愛経験が皆無に等しいフランシスだが、そう取られても仕方のない言葉だったことに気が付く。

「い、いや、そういうのじゃなくて！ その、訓練でお世話になつたから、何かお礼でも、と思って！ 変な下心とかないから！」

「あ、そ、そうなの？ ふう、ちょ、ちょっと驚いたじゃん、アハハ」

気恥ずかしい空気が流れる。一つ深呼吸して、フランシスが再び話を切り出す。

「そ、それで、僕はどうしたらクリスが喜んでくれるか分からなくなつて。一緒に街に行って、クリスの欲しいものを何かプレゼントしようかな、と」

「別にお礼とかいいのよ。フランらしいっしゃらしいけど。まあ、フランがそう言つなら、ありがとうございますか」

「それで、明日はどう？』

「うん、いいよ。時間は、そつだね、10時くらいがいいかな」「わかった。じゃあ、休暇の申請は、クリスの分も僕が出しておくから。お休み」

部屋を去ろうとするフランシスの背中に、クリスティの声がかかる。

「あ、せつかく遊びに行くんだから、騎士団の制服はナシだよ？」
「ええっ！？ 僕、外で着られるようなのは、いいの制服しか持つてないんだけど……」

入隊以来、ほとんどを基地で暮らしていたフランシス。必要最低限の衣類は支給されているし、服装に頼着するタイプでもなかつたため、私服を買うという発想がなかつた。

「ハア、しょうがないなー。礼服の下に着るシャツあるでしょ？」

とりあえずあれでも着てきなよ。明日、あたしが街でフランの服を見繕つてあげるから。楽しみにしてて」

「……お手柔らかに頼むよ」

クリスティの部屋を出たとたん、フランシスに先ほどの気恥ずかしさが戻ってきた。年頃の男女が連れ立つて出かける。そういうつもりはなかつたが、一般的にいつてそれは『デート』と呼ばれる行為だろう。

「なんだか緊張してきた……」

その後、なかなか寝付けぬ夜を過ごすフランシスだった。

デート？

翌日。

フランシスは、基地正門にて、クリスティが来るのを待っていた。デートではない、とは言つたものの、どうにも気分が落ち着かない。そわそわしながらクリスティを待つ。

「ごめん、待つた？」

「わっ！」

背後からの声に、フランシスは思わず飛び上がる。振り返ると、そこにはクリスティの姿が。

すみれ色のフレアスカートに、純白のブラウス。首元の桃色のリボンがアクセントとなっている。足には、花柄の装飾をあしらったサボを履いている。

いつもの無骨な軍服姿と違い、まるで花が咲いたかのような印象を受ける。パツと見では、彼女が対戦部隊の、それも最前線で戦う兵士であることなど、想像もできないだろう。

「…………」

「ちょ、あんまりジロジロ見ないでよ」

「「、「ごめん！ そういう格好してて見たことなかったから、驚

いちやつて」

「どう、似合つ~」

「えーと、その……」

じきもささずフランシスを見て、クリスティがからからと笑う。

「まあ、とつさに氣の利いた台詞が言えないのがフランシスらしい

よねー。じゃ、行こつか

赤面するフランシスをよそに、クリスティは先に立つて歩き出す。

季節は初夏。照りつける日差しも、次第に強くなつてきている。街路に植えられた樹木の緑は、その色を濃くしている。少し汗ばむような陽気の中、一人はシラーズ市街に辿り着いた。

「とりあえず、どうしようか」

「こうこうときは、男がリードするもんでしょうに……。まずは、フランの服を買わなくちゃね」

フランシスの服装は、シンプルなシャツにズボン。決しておかしな格好ではないが、華やかなクリスティと不釣合いなのは否めない。二人は、辻に店を構える既製服店に入った。クリスティはあれこれと悩み、店員に相談しながらフランシスのコーディネートを決めていく。

「野生的なのも意外に悪くないけど フランはやっぱり、清潔感がある格好が似合つかな」

彼女が選んだのは、水色の立て襟シャツと、紺色のズボン。シャツのボタンの一番上を外し、バックルが付いた新大陸風のベルトを締めるのが、最近の流行だとか。

「どう?」

「うん、似合つ似合つ。一気に都会風になつた感じだね」

「じゃあ、すいません店員さん。これください」

会計を済ませ、店を出る。時刻は11時を少し回つた辺り。

「少し早いけど、お昼にしようか。この時間ならまだどこも空いてるし」

「わかった。今日は僕のおごりだから、好きなものを食べていいよ」「いいの？ 竜人の本気、見せちゃうよ？」

「……お手柔らかに頼みます」

次に一人が入ったのは、洒落た感じのレストラン。旧大陸風のコース料理が食べられる、少々高級な店だ。

「いいの？ この店高いって聞くけど」

「大丈夫。僕がいくら給料貰ってるか、クリスも知ってるでしょ」

「まあ、そうだね。じゃ、遠慮なく」

慣れない作法に戸惑いながらも、食事を進めるフラン시스。一方のクリスティは、意外なほどに見事な手つきで食器を扱っている。

「クリス、食器の使い方上手だなあ」

「まーね。あたし、これでもブリーディアにいたころはちょっとしたお嬢さんだつたんだから」

「そういえば、商人の娘、って言つてたつけ。……ところで、クリスは給料何に使つてるの？」

昨晚、他の仲間に聞いた質問をクリスにぶつける。

「んー、だいたいは実家に送つてるよ」

フラン시스にとつては、意外な回答だ。今までの話の流れから、てっきり裕福な家だと思っていたのに。

「うひつて、ブリーディアで毛織物の仲買やつてたんだけだね。父さんが、なんて言つたつけな、先物？ とかいうのに手を出して大損しちゃつてね。母さんもカンカンで……あれは怖かつたなあ」

ダイアナも投資をしていと言つていた。もつとも、慎重で頭脳明晰なダイアナのことだ。大損を出すようなことはないのだろうが。

「んで、あたしが結婚させられそうになつたのも、あたしを嫁にく れたら金を貸してやる、つて人が現れたから」

「それで、こつちへ渡つてきたつてことか」

「そういうこと。でも、欲をかいだ父さんが悪いって言つても、実家が潰れるのは嫌だしね。仕送りしてるとてわけ。まあ、最近は持ち直してきたらしいから、もう心配ないんだけど」

「へえ。でも、そんなに結婚が嫌だつたの？」

クリスティがコルドアに渡つたのは16歳のとき。都市部に暮らす一般的な女性としてはやや早いが、結婚していくてもおかしくない年齢ではある。

「相手つていうのが40過ぎのオッサンでさ。デブだしハゲだし脂ぎつてるしで、おまけにやらし~眼であたしを見るわけよ。もう、無理、つて感じ。同じ40過ぎでも、隊長みたいな人だったら考えないこともなかつたけど」

確かに、レナードは格好がいい。男のフランスにすら、そう思わせるほどだ。単に外見だけの問題ではなく、内面からも溢れんばかりの魅力を放っている。余談であるが、レナードが舞踏会に出席しようものなら、会場の女性すべてが群がつてくるほどの人気を見せる。しかも独身であるからなおのことだ。

「あ、フランみたいな人でもオーケーだつたかも」「からかわないでよ、もう……」

デザートをつつきながら、フランシスが赤面した。

レストランを出た一人が次に向かつたのは、宝飾店。この日の主旨である、クリスティへのプレゼントを買つためだ。

自分の服を買い、レストランでの食事代を負担してなお、フランシスの懐には相当の金額が残つてゐる。多少高くても気にせず買つてやろう、と意気込むフランシスだったが、クリスティが選んだのは比較的安価なペンダントだつた。

大振りなルビーがトップに据えられたそのペンダント。店員曰く、石に不純物が多くて価値は低いが、その不純物が作る独特の模様をデザインとして好む人も多い、とのこと。また、それでもここまで安いのは、多数の宝石が産出されるコルドアならではだ、とも教えられた。

「これにする？ もつと高いのでも大丈夫だけど」

「いいつて。それに、こういうのつて値段じゃないでしょ」

「……うん、それもそうだね。店員さん、これを」

「あ、着けてくから包まなくていいです」

そう言って、クリスティは早速ペンダントをかける。ありがとね、と笑うクリスティの姿は、確かに『女の子』だつた。

最後に、一人は雑貨屋に立ち寄つた。もうすぐ嫁に行くナタリーへの祝いの品を買つためである。やはり実用品がいいだろう、ということで、こうして雑貨屋に来たのである。

あたしもお世話になつたから、とクリスティも自分の分の祝いの品を選ぶ。

フラン시스は、悩んだ末、切子細工が入ったグラスのセットを選んだ。クリスティが選んだのは、花模様の入った磁器の大皿。贈答用の梱包をしてもらい、店を後にした。

「今日はありがとね。楽しかったよ」

「良かった。ちゃんとお礼できたか不安だつたんだけど」

「もう十分すぎるくらいに。また誘つてよ。オススメのお店がまだまだい一つぱいあるからさ」

「うん、是非」

一日歩き回つたが、不思議と疲れはなかつた。心地よい満足感が、体中に広がつている。明日からも頑張ろう、そうフラン시스が思えるのは、隣のクリスティの笑顔が見られたからだろうか。

後日、ナタリーは街を去つた。勤めていた酒場では、店員や馴染みの客による送別会が行われ、フラン시스たちも参加した。

泣きながらも、幸せそうな笑顔を浮かべるナタリーと、それをを見送るフラン시스。しかし、その胸にもはや痛みを感じることはなく、心から彼女を祝福するのだった。

恐怖

ナタリーの送別会から、1週間ほど経ったころ。フランシスをはじめ、対竜部隊の面々は、とある平原にて作戦行動に入っていた。今回の目標は、体長およそ70フィート、大型の炎竜だ。作戦はいつも通り。『釣り出し』によつて平原に誘導した竜をトラップにはめ、集中砲火、というものだ。二箇所に陣地が設置され、一つにダイアナ、クリステイ。もう一つに、サイラス、エドガー、そしてフランシスが配されている。

出撃前、フランシスはダイアナからこう言い含められていた。

「今回の目標は、かなり大型です。前回の黒鉄竜と違い、遠距離からの撃破は難しいかもしません。……言いたいことがわかりますか」

つまり、竜人による田兵戦を行う必要がある、そういうことだ。

緊張で高鳴る胸を押さえつつ、フランシスは大きく息を吐く。
大丈夫だ。足も手も震えていない。僕はやれる。
そんなふうに、自分に言い聞かせる。前回の出撃のときに感じたような、酷い緊張感はない。そういう直覚はある。
ふと、腰に手を当てる。ヘヴィーハチエットの、冷たい感触。訓練にしか使われることがなかつた、一本の武器。遂に、これを使うときが来るのかもしれない。

そして、作戦が始まった。

『釣り餌』による誘導、ここまでは上手くいった。第一接触地点にてトラップを発動、そして砲撃によつてさらに次のトラップゾー

ンへ誘導しようとしたとき 不測の事態が起きた。

順調にトラップゾーンに向かつて突き進んでいた炎竜。儀装して塹壕に潜んだ歩兵が、トラップ発動の瞬間を待ち構えている。ところが、その手前、竜はピタリとその足を止めた。

「ありやあ、いけねえ！」

エドガーが、焦りを含んだ声を上げた。同時に、もう一つの陣にて指揮を取るダイアナが、慌てて退避命令を出すも時既に遅し。

竜の腹部が見る見る膨れたかと思うと、炎の奔流が一面を紅く染めた。

塹壕から飛び出した歩兵数人が、たいまつのように燃え上がり消し炭となつて果てた。

トラップの手前で、竜に気取られてしまったのだ。儀装が甘かつたのか、それともその竜が特別鋭かつたのか。理由はわからないが、この時点で作戦の成功率はかなり低下した。

辛くも難を逃れた歩兵が、死に物狂いで駆け出す。竜は、その歩兵に向かつて怒りの矛先を向けた。

「ぐつー！」

ダイアナは素早く狙いを付け、『吼狼』を発砲。右後足の付け根辺りに特殊撤甲弾が命中し、真っ赤な血が噴出する。竜の足が止まつた。しかし、そこは急所とは言いがたい場所である。致命傷にはなりそうにない。

「砲隊、一斉掃射！ 騎兵は工作班の回収急げ！ 他の者は撤退に

備えよ！」

大砲が一斉に放たれ、砲弾が次々と竜の周りに着弾する。竜は砲弾の雨の中を、まるで意に介さず前進し始めた。

「そろそろ俺たちの出番だな、サイラスよ」

「ああ。まったく、今回ばかりは貧乏くじを引くことになりそうだぜ」

フランシスの傍らで、エドガーとサイラスが呟く。

「フランシス、準備はいいか」

サイラスに肩を叩かれ、フランシスはびくつとする。

「いいか、俺たちの仕事は足止めだ。残された手段は、少佐の『吼狼』一発だ。少佐が射撃体勢に入るまで、俺達が奴の注意をひきつけるんだ」

「……も、もし、少佐の弾が効かなかつたら？」

「そんときや撤退するしかねえな。撤退が終わるまで、殿を務めるのも俺たちの役目だ」

「ぐりとづばを飲み込むフランシス。やがて、ダイアナから指令が下った。サイラスとフランシスが突撃。負傷明けであるエドガーは、予備戦力として待機というものだ。

「行くぞ。合図とともに全力で突っ切れ」

「そんな青い顔すんなって。訓練どおりやりや大丈夫だ」

「ああ。それにお前は初陣だ、無理だと思ったらすぐに後退していいからな」

先ほどまでは、大丈夫、そう思つていたフランシス。しかし、ここに及んで、彼の身体に強烈な緊張と恐怖が襲い掛かる。

膝や掌は震え、喉はからからに渴いてくつづいていくようだ。動悸が信じられないほど乱れ、息が苦しい。こめかみには一筋の汗が流れた。

さしものサイラスとエドガーも、このときばかりはフランシスを気遣つている余裕はなかった。場合によつては、戦の中でもとりわけ難しいとされる撤退戦を強いられることになる。そして、その撤退戦の成否を左右するのが竜人兵なのだ。

遂に下される突撃の合図。

サイラスが走り出す。行かなきや、と思うも、フランシスの足は地面に張り付いたように動かない。 動け、動け！

「フランシス！」

エドガーの叫びに、フランシスはようやく体の自由を取り戻した。足をもつれさせながらも、なんとか駆け出す。

それはわずか数秒のことだったが、先を走るサイラスとは、すでに数十ヤードの差をつけられていた。必死に両手足を動かす。

最初に竜に到達したのは、例によつてクリスティ。一本の小剣を手に、果敢に竜に挑みかかる。長剣を振りかぶり、サイラスが続く。フランシスも、一本のヘヴィーハチエットを抜き放ち、竜に向かう。

しかし、目標まであと15ヤードといつどいる。フランシスに、再び異変が起きる。 全身が、鉛の塊にでもなったかのように重くなり、足が止まる。いくつかの光景がフランシスの脳裏をよぎる。

サンドブレスで消し飛んだ兵士。ファイアーブレスで負傷したエドガーに、消し炭にされた先ほどの兵士。そして、手負いの竜に襲われた、永遠とも思えるあの時間。

「あ……」

竜と眼が合った。蛇に睨まれた蛙、などという生易しいものではない。竜という存在が放つ圧倒的な存在感に当てられて、フランシスの頭の中は真っ白になる。がくがくと全身が震え、指一本すら自分の意思で動かすことができない。

びゅう、という風切り音と、自分の名を叫ぶクリスティの声。はつと我に帰ったフランシスの眼に入つたものは、唸りを上げて迫る竜の尻尾と、自分を突き飛ばしたクリスティの姿だった。

「さやんつ！」

短い悲鳴。楯にしたスケイルピアサーは、飴のよつにいとも簡単にひしやげた。丸太のような重量と、鞭のよつな速度を併せ持つ一撃に、クリスティの華奢な体は木の葉のように吹き飛んだ。

水切りの石のように、地面と平行に飛ぶクリスティの身体。

フランシスの眼には、首から下がたペンドントが光の尾を引くのが見え、二、三度バウンドし、土煙を上げて止まった。

「クリス！」

金縛りから解けたフランシスが、慌ててクリスティに駆け寄る。息はあるが、ぐつたりとして意識がない。目立つた外傷はないようだが、骨か内蔵を痛めたか、揺すると小さな呻き声を上げる。

「フラン시스、クリスを連れて下がれ！」

「サイラスさん、でも……」

「いいから早く！」

くつ、くつと唇をかみ締めながら、フラン시스はクリスティを背負つて走り出す。振り返ると、一人奮戦するサイラスの姿が。比べて、自分のなんと情けないことが。敵を前に恐怖で動けなくなり、拳句自分をかばつてクリスティが負傷してしまった。訓練で学んだことも座学で学んだことも、何一つ役に立てることができなかつた。

悔しい。不甲斐ない。申し訳ない。様々な思いが、ずきずきとフラン시스の胸を刺し、苛む。

地面を蹴るたび、背中のクリスティが苦しそうな息を漏らす。いかに竜人といえど、果たして無事に助かるかどうか。

「ごめんよ、クリス。ごめんよ……」

田尻に涙を滲ませながら、フラン시스は懸命に走る。今自分がすべきは、クリスティを無事に逃がすこと。それだけははつきりしている。

「早く、キーツ少尉を！」

ダイアナだつた。いつの間にここまで来たのか。竜までたつた70ヤード、本来作戦指揮官が近づいていい距離ではない。必殺を期するためのこの距離だ。

「ガーランド、退け！」

一言叫び、ダイアナが立ち撃ちの体勢で『吼狼』の引き金を引く。

巨大な発砲音。あまりの反動に、ダイアナの身体は後ろに大きく弾かれる。

ぱあん、という音が響き、数瞬遅れて竜の側頭部から鮮血がこぼれる。二、三度痙攣し、竜は前のめりに倒れた。

作戦は辛くも成功した。まさに薄氷の勝利である。

しかし、ファイアーブレスにより歩兵4名が即死、7名が重症。クリスティはあばら骨を中心に行箇所の骨折、一人竜に立ち向かったサイラスは軽症、ダイアナも数箇所の筋肉が断裂する傷を負い、後味の悪さを残す一戦となつた。

挫折、そして

作戦が終了してからとこりうもの、フランシスは塞ぎこむばかりであつた。

意識を失い、ただ苦しげな表情で呻くのみのクリスティの姿を思い出すたび、どうしようもない胸の痛みに襲われる。悔しさ、無力感、屈辱感、敗北感……。様々な負の感情が渦巻き、心を苛んでいた。エドガーやサイラスが言葉をかけるも、ただ力なく頷くばかり。温かい言葉は、かえつてフランシスの心を抉る結果となつた。

しかし、フランシスを誰が責められよう。竜を田の当たりにし、敵前逃亡を図った兵士の例は、枚挙に暇がない。竜に白兵戦を挑む意志を見せた、それだけでも大したものなのだ。

ところはレナードの執務室。レナードは、ダイアナから作戦の結果報告を受けていた。

「まあ、上出来だろ？ それにしても、70ヤードからの狙撃とは、少佐にしては無謀な真似をしたな」

「……それが最善と判断しました」

「しかし、だ。作戦指揮官は、指揮を取るのが仕事だ。たとえ田の前で部下がやられようと、構わず最後まで部隊全体を指揮し続けなければならぬ。責任を取るのはその後だ。辛い役回りだがな」

「申し訳ありません」

「まあ、私の口から偉そうに言えることではないんだがな、ハハハ」

レナードは戦場に立つと、部下の制止も聞かず最前線に飛び出していくことが多々あった。副官時代のダイアナにとつては、頭痛の種だったものだ。

「それで、クリスティの容態は」

「未だ意識不明ですが、命に別状はないとのことです。じきに目を覚ますかと」

「そうか。……フランシスは？」

「塞ぎこんでいるとか。……なにしろ初陣でしたので、無理もないことですが」

しかし内心ダイアナは、もうフランシスは駄目かもしさないと考えていた。戦場で強烈なショックを受け、そのことが頭に焼きつき度々追体験に苛まれる。それほど珍しいことではない。特にこの対竜部隊では、精神的な傷を負つたために退役を希望するものが後を絶たない。

「まあ、そつとしておいてやれ。何しろ、短期間に色々なことが起き過ぎた」

「はっ」

「……初陣、か」

窓の外を眺めながら、レナードが感慨深げに呟いた。

クリスティが目を覚ましたのは、一日後のことであった。

慌てて病室に駆けつけた対竜部隊の面々の中に、フランシスの姿もあった。口々に安堵の言葉を漏らす隊員たちと、弱々しいながらも感謝の言葉を述べるクリスティ。医師の説明によれば、10日ほどは寝たきりの生活になるだろう、とのこと。竜人の回復力をもつてしても、完治までは一ヶ月以上を要するらしい。

クリスティを取り囲む輪の外側で、フランシスにはかける言葉が見つからなかつた。自分の弱さが、目の前の少女をこんな目に合わ

せてしまったのだ。自責と後悔の念に、押しつぶされそうになる。

「あ、フラン。……大丈夫だつたんだね。……良かった」

人の影に隠れていたフランシスを見つけ、クリスティが声をかけた。以前のクリスティからは考えられないような、か細い声。

やめてくれ。心中で、フランシスが叫ぶ。

自分のせいでそんなになつたのに、なぜ自分を気遣うようなことが言えるのか。むしろ、いつそのこと激しく叱責してくれたほうがどれほどマシだつただろう。

「あ、あの、……」めん、僕……」

いたたまれなくなり、フランシスは駆け出す。

「あ、フラン！」

背後から、クリスティの声が届く。しかし、今のフランシスは、クリスティの声を聞くことすらも苦痛に感じた。

病室から逃げ出したフランシス。夕闇迫る練兵場で、一人遮二無二剣を振り回していた。刃引きされた訓練用の剣を、力任せに藁人形に叩きつける。常人離れした臂力によつて、藁人形は無残に砕け散つた。

「はあ、はあっ……」

肩で荒い息をしながら、フランシスは別の藁人形に向かつ。

「くそつ！ このつ！」

数度剣を叩きつける。と、手元を誤り剣先が人形から逸れた。大きくバランスを崩したフランシスは、たたらを踏んで尻餅をつく。

「どうした、剣が荒れているぞ」

背後から、落ち着いた響きの男の声が。振り返ると、そこにいたのは隊長レナード・パーシヴァルだつた。フランシスと同じ訓練用の剣を肩に担ぎ、仁王立ちしている。

「まつたく、お前は訓練なにを学んだのだ。どれ、私が一手稽古をつけてやる」

「隊長……？」

「ほら、いいぞ。どこからでもかかつて来なさい」

「でも……」

戸惑うフランシス。いくら稽古といえど、最高責任者に剣を向けるのは躊躇われた。

「来ないのならば こちらから行くぞ！」

あ、っとフランシスが思ったときには、すでに眼前にレナードの姿が。反射的に剣を立てる。と、同時に凄まじい剣圧により、フランシスの身体は吹き飛ばされた。一、二度地面を転がる。

「気を抜くな、すぐ立つ！」

再びレナードの剣がフランシスに襲い掛かる。唸りを上げて迫るレナードの剣を、どうにか受け止める。

これまでクリスティ、サイラス、エドガーとは何度も一緒に訓練

をしてきたが、その誰にも増して、苛烈な一撃だった。その剣には、ただ単に力が強い、技術が高いということには留まらない。『何か』が籠められている。これが、数多の竜を討ち果たし、英雄と呼ばれた男の剣だった。

「よし、まだまだいくぞ！」

続けて、一合、二合。剣と剣が激しくぶつかり合つ音が、練兵場に響き渡る。上段、中段、切り上げ、袈裟懸け 攻撃を受けていくうちに、自然と身体が反応するようになってきた。サイラスから、ひたすら基礎の反復を命じられた成果だ。防戦一方のフランシス。しかし遂に一瞬の隙を見い出し、レナードに一撃を加えようとすると。

「お、いいぞ。その調子だ！」

フランシスの剣を軽くいなすと、レナードはさらに苛烈な攻撃を仕掛けた。防ぎ、打ち込み、避け、また打ち込む。フランシスの頭からは余計なものが消え、目の前の剣のことしか考えられなくなる。剣戟が支配する、自分とレナードだけの世界。

レナードの剣は、決して自分を傷つけようとしているのではない。フランシスには、それがわかつた。強烈ではあるが、どこか優しさが感じられる、何かを語りかけて来るような、そんな剣だった。やがて放たれた、大上段からの山のような重さを持つ一撃。はつしとそれを受け止めた。ふつと、レナードの力が抜ける。

「このくらいにしておくか。……どうだ、少しは気が晴れたかね」「はあっ、はあ……。はい、ありがとうございました」

息も絶え絶えのフランシスに対し、汗ひとつかいていないレナー

ド。あれでも手加減していたのだということは、フラン시스にも分かった。フラン시스の呼吸が整うのを待つ、レナードが口を開く。

「この間の戦のこと、聞かせてくれるか

フラン시스は、素直にすべてを吐露した。竜を前にして動けなくなってしまったこと、クリスティにかばわれたこと。そして、自分が感じた悔しさ、不甲斐なさ。レナードは辛抱強く、その話を聞く。

「僕は、意気地なしです」

ポツリと一つ咳き、フラン시스は言葉を切った。無言でそのままの言葉を聞き続けたレナードは、フラン시스の瞳をじっと見つめ、口を開く。

「一つ、話をしよう。東方遠征に従軍した、とある一兵卒の話だ」

ビームが遠いところを見るような目で、レナードが語る。

「なんの取り得も無かつた那個男。戦場の片隅で這いずり回ることしかできない。そんな男だった

「…………」

「男の目の前で、幾人もの戦友たちがなす術もなく死んでいった。何もできない自分が惨めで、情けなかった」

ビームとなく、今の自分の境遇と似た那個男。フラン시스は共感を覚える。

「あの時自分にもつと力があれば 後悔を糧に、男は身体を鍛え、技術を磨いた。そしてある日、討伐した竜の死体を見た男は、幼い頃に聞いた御伽噺を思い出す。『竜の血を飲んだ勇者は、不死身の力を得ました』と

「あれ、それって……？」

「不死身にこそならなかつたものの、男は強い力を手に入れた。そして、大きな武勲を打ち立てた。その男が成功したのはなぜか。改めて考えれば、それは、自分の弱さを受け止めて、強くあろうと努力したからだと思うのだ。竜の血など、瑣末なことに過ぎない」

レナードの話を、フランシスはその胸にしつかりと受け止める。

「自分の弱さを認めることは難しい。だが、お前は既に自分の弱さに気付いたはずだ」

「……はい」

「弱い自分を乗り越える」と。これは、さらに困難だ。険しい路となるだらう」

「……」

「お前はこれからどうする？ 戦い続けるか、諦めるか。どちらを選ぶのかは、お前次第だ」

突き刺すようなレナードの視線を受けながら、しばしの黙考。フランシスの脳裏に、竜の尻尾で弾かれたクリスティの姿が蘇る。転がり、傷つくそのままは、はつきりと記憶に刻まれている。この記憶に背を向けて逃げ出すか、これを受け入れつつ前に進むか フランシスの心は、既に決まっていた。

「僕は……逃げたくない。このまま、自分に負けっぱなしでいるのは御免です」

それはまだ、ほんの小さな種火。フラン시스の心に、『魔氣』といふ名の火が灯つた瞬間だつた。

「よく言つた。それでこそ男だ」

レナードが相好を崩した。その笑顔が、育ての親である孤児院の神父とだぶる。

「心しる。お前が闘う相手は、自分自身なのだと」

最後にそう言い残して、レナードは去つていつた。山のよつに雄大な、『男』の背中だった。

フラン시스は、すぐさまクリスティの病室に向かつた。見舞いに訪れた人々の姿はなく、ベッドに一人横たわるクリスティ。

「フラン、心配したじゃない。いきなり飛び出しちゃうもんだから」「……ごめんよ」

「随分落ち込んでるつて聞いたけど……。あんまり気にしないでいいからね？」

「いや、クリスの怪我は僕の責任だから。僕は、このことをずっと忘れない」

「フラン……」

「僕、もっと頑張るよ。みんなと肩を並べても恥ずかしくないようにな。自分自身に負けないように。それを、言いに来たんだ」

クリスティの目に映るフラン시스の姿は、少し前とはまるで違つていた。いつたいこの短期間になにがあつたんだろう、と思つ。

「じゃあ、お休み。ゆっくり休んで早く良くなつて」

去り行くフランシスの背中を見つめるクリスティ。ドアが閉まり、再び一人きりになる。

「いい顔になっちゃって。……まったく、男の子には敵わないなあ」

病室の天井に向かって、ボソリと呟いた。

あくる日から、フランシスはひたすら訓練に打ち込んだ。体力自慢のエドガーが舌を巻くほどの熱心さで、徹底的に心身を鍛え上げる。サイラスからは、「もう勘弁してくれ」と言われるほどに、毎日剣を振った。病室の窓からはクリスティが、隊長執務室の窓からはレナードが。それぞれ、フランシスの姿を見つめる。

三週間後。対竜部隊はまた、出撃のときを迎える。

一歩

この日の作戦は、平原での炎竜討伐であった。体長約60フィート。ちょうど、フランシスを襲つたものと同程度だ。

傷が完治していないクリスティは、基地で留守番だ。ダイアナ、サイラス、エドガー、そしてフランシスの4名の竜人が、この作戦に参加している。

『釣り出し』による誘導、トラップ発動、集中砲火。作戦は、理想的な展開を見せた。しかし、後一步の所で止めを刺しきれない状態が続く。

「なかなかしづといですね。……榴弾はまだ豊富ですが、通常弾はかなり少なくなっています。いかがいたしましょうか」

砲兵隊長スコット・ベイカーがダイアナに告げる。

「……白兵戦と、『吼狼』でケリをつけしかねないでしょう。北のガーランド、ノ里斯両名に信号を。あと一斉射ののち、突撃を開始します」

遠く離れた陣にいるサイラスとエドガーに手旗による信号が送られ、了解したとの返答が返る。ダイアナは緊張の面持ちのフラン시스に声をかけた。

「ファウラー少尉、準備はいいですか。無理だとと思うのなら、待機していても構いませんよ」
「いえ……大丈夫です、行けます」

正直、恐怖心はまだ拭えていない。手足は軽く震えているし、心臓は口から飛び出しそうだ。しかし、ここで逃げてちゃ、自分はいつまで経つても弱いままだ。そんな想いが、フランシスを奮い立たせる。

フランシスは変わった、とダイアナは思う。その変化がレナードの助言によるものだということは、何となく察している。こういう部分は、真似できないとダイアナは嘆息する。戦術理解、状況判断などは、経験を積めばレナードに追いつけるかもしれない。しかし、人を惹きつける魅力、人望、それは、まさに生まれ持つてのカリスマ。望んで手に入るものではない。軽い嫉妬さえ覚える。

「よろしい。では、突撃に備えてください」

ダイアナは、自分が新兵だったころのことを思い出す。初陣で、同期の連中は皆、小便を漏らさんばかりに緊張していたのだ。無論、自分とて例外でなく。戦闘が開始して、頭が真っ白になり気が付いたときには、戦闘が終了していた。そんな時代が、ダイアナにもあったのだ。我知らず、口元に微笑が浮かぶ。

やがて、カウントが開始され 支援砲撃とともに、フランシスは走り出した。

大丈夫だ。足は動く。

心の奥から湧き上がる不安を、無理矢理押さえつける。

鬪う相手は自分自身。自分自身の弱い心。

自己に暗示をかけるように、繰り返しレナードの言葉を呟く。

次第に、周りの雜音が搔き消えていく。目に映るのは、彼方の炎竜のみ。恐怖とは違う、熱を持った何かが、フラン시스の全身を支配していく。フラン시스の脳内で、何かが切り替わる音がした。

氣付いたときには、竜は既に目前だった。砲撃が巻き上げた爆炎の中で、竜の双眸がぎらりと光つたように見えた。

怯むな。

「おおおおおおおおおっーーーー！」

腹の底から咆哮し、跳躍。戦闘ナタ・ヘヴィーハチエットを、力任せに叩きつける。剣術の基本も何もない、ただ感情に任せた一撃だつた。

ガスッ、という軽い手ごたえ。フラン시스が力任せに放った斬撃は、竜の鱗を浅く削り取ったに過ぎなかつた。

まるでダメージを与えられなかつた、その一撃。しかし、それはフランシスにとつては大きな一歩。自分自身に勝利した瞬間だつた。

「おいおい、俺が教えてやつた剣技はどうしたんだ、フラン시스。随分頭に血が上ってるじゃないか」

「いや、戦場じやこのくらい熱くなるくらいがちょうどいいんだよ

「サイラスさん、エドガーさん！」

サイラスとエドガーも、自らの武器を振るつて参戦する。フランシスは多少落ち着きを取り戻し、再び竜に向かつた。

足の親指に力を込めて、前方に向かつて体重移動。剣を振るのは、腕ではなく足腰だ。ここ数ヶ月、ひたすら繰り返した基本を、頭の中で反芻し動きに反映させる。

フラン시스は、恐ろしいほどに集中していた。竜の息遣い、筋肉の躍動　常人離れした竜人の感覚が、竜のすべてをフラン시스に伝える。竜の右後足がわずかに引かれ、同時に右肩の筋肉が収縮。右腕による攻撃が来る。瞬時に判断するや、後ろに飛びすさりながら身体を捻り、回転を利用して一撃を振り下ろされた右腕に加える。

「いいぞ。その調子で俺の分まで働いて、少しは樂をさせてくれ」「しようもねえことを言つてるんじゃねえ、サイラス」「俺はここ三週間、散々フラン시스に付き合わされたんだ。少しくらいはいいだろ?」

軽口を叩きつつも、サイラスとエドガーは見事な立ち回りを見せる。フラン시스の好調に引っ張られるように、絶妙な連携で竜に痛手を与えていく。

と、遠くからダイアナの鋭い声。それを聞き取った三人は、パッと飛びのぐ。一瞬の間を置いて、巨大な銃声。

「グルルアツ！…」

『吼狼』から放たれた弾丸が、竜の尻尾の中じろ辺りを貫いた。真っ赤な鮮血を噴出し、竜の尻尾は力なく垂れる。

「尻尾は気にせず戦いなさい」、そういうダイアナの気遣いだったのだろうか。感謝しつつ、フラン시스は剣を振るう。

「二人とも、下がれ！」

と、サイラスの警告。竜の下腹が膨らみ始めていることには、エドガーとフラン시스も気付いている。前回の轍は踏まぬとばかり、素早く離脱するエドガーに、フラン시스も続く。

「オオオオオオオツ！！」

一声嘶き、灼熱の炎が撒き散らされる。一瞬にしてあたりを數十ヤードにわたつて焼き尽くす、必殺の攻撃。しかし、フランシスたち三人は、首尾よく範囲外へ逃れていた。

「チャンスだな」

「ああ、奴さん、相当弱つていやがる」

ファイアーブレスは『炎囊』の可燃性物質のみならず、竜の体力も著しく消耗する。多数の手傷を負つたところでブレスを吐いたその竜は、もはや半死半生の状態だ。

すかさず、二挺目の『吼狼』が火を吹いた。銃口から放たれた弾丸は、狙いを違わず竜の眉間に命中。しかし ほんのわずか角度が浅かつたか、鱗を深く抉り取つたものの、致命傷には至らない。

「あそこを狙うぞ！ エドガー！」

「応よ！」

エドガーが組んだ両掌に足をかけ、サイラスが宙を舞う。自らの脚力と、エドガーの腕力を加えた跳躍だ。

「ふつ！」

戦場という場には相応しくないとさえ思わせるほど、優美で華麗な一太刀。ダイアナが抉つた眉間の傷が、さらに大きく開かれた。頭蓋骨をも切り裂く一撃だつた。

竜は前に傾ぐが、前足を突いて倒れそうになるのを堪える。致命傷には、まだ少し足りない。

「フラン시스、今日は譲つてやるよ。お前がやれ」

「……はい！」

エドガーに背中を押され、フラン시스が走る。焼け爛れた地面の熱が靴底を焦がすが、意に介しない。竜の側面に回りこむと、その身体を伝つて頭部に辿り着く。

「ウゴオアアーッツ！..」

最後の力を振り絞り、身体を激しくよじつてフラン시스を振り落とそうとする。片手で竜の鱗につかまりながら、フラン시스はヘヴィーハチエットを眉間の傷に叩きつける。

一撃、二撃 無我夢中で腕を振るうち、竜の動きは鈍くなつていき 遂に事切れた。地響きを立て、竜は地面に倒れ付す。

「や、やつた……」

竜の身体から滑り落ちたフラン시스。地面に尻餅を突いたまま、動けなくなつてしまつた。極度の高揚から開放され、力が抜けてしまつたのだろう。

「やつたじゃねえか、フラン시스。これでお前も一人前だな」

フラン시스に肩を貸しながら、エドガーが大きな手でフラン시스の頭をがしがしとなる。

「サイラスさん、エドガーさん、少佐、隊長、そしてクリス……。皆さんのおかげです」

「隊長にクリス？ 一人は戦つてねえじゃねえか」

エドガーは得心がいかない、という表情を見せる。と、そこに竜の死亡を確認していたサイラスが歩み寄った。

「ほれ、こいつを」

サイラスがフラン시스に投げてよこしたのは、一枚の鱗。大振りの硬貨ほどの大さで、涙型をしている。

「こいつは竜の尻尾の一一番先に生えてる鱗でな、テイル・ドロップといつて俺たちの間では幸運のお守りってことになってる。初めて竜を倒した奴は、これを自分のものにしていいって慣わしでな。言つてみれば、竜を討伐した証だ」

フラン시스は、手の中のものをじっと見つめる。長年の風雨に晒され、角が取れて丸みを帯びた、赤銅色の鱗。それを眺めていると、自分が竜を倒したのだという実感が、じわじわと湧いてきた。同時に、心地よい倦怠感。引きずり込まれるように、フラン시스は深い眠りに落ちた。

「なんだ、寝ちまつたぜ」

「緊張の糸が切れたんだな。寝かせといてやろつ」

「ああ、そうだな。なにしろ今日のヒーロー様だ。丁重に扱わなきやな」

エドガーの背に揺られながら、フラン시스は夢を見る。田覚めた時には忘れてしまったが、心地よい夢だったことは間違いなかつた。

基地に帰還した一同。正門で帰りを待っていたクリスティに、フランシスはテイル・ドロップを見せる。なにがあつたのか察したク

リスティは、満面の笑顔とともに右手を高く上げる。夏の空に、二
人が交わしたハイ・タッチの音が、気持ちよく響いた。

夏の日

盛夏。シラーズ周辺の夏は、非常に暑い。南西の海から吹き込む季節風が、低緯度地方の熱い空気を運んでくるのだ。

照り付ける日差しの中、フランシスたちはいつもの「ごとく訓練に励んでいた。その中には、負傷から回復した、クリスティの姿もある。

「おい、そろそろ休憩にしようぜ。こう暑くちゃたまらない」

「あたしも賛成～」

クリスティとサイラスが、建物の影にへたり込む。

「情けねえなあ。クソ暑いときこそ、訓練のしがいがあるってもんじゃねえか。なあ、フランシス」

「僕はどうせらかといふと、一人に賛成です……」

生真面目なフランシスを辟易させるほどの熱波だ。しうがねえな、と言いつつエドガーもその輪に加わる。桶に汲んだ井戸水を、皆で回し飲みして一息つく。

「次の作戦はいつだろうね。もっと涼しくなってからだといいんだけど」

「同感だな。しかし、聞いた話だが、当分は出撃はないそうだ」

「どうしてですか？」

「それは――」

「人手不足、だよ、ファウラー少尉」

背後から、何者かがサイラスの言葉に割って入った。後ろに数名

の士官を従えた、一目で高級将校だと分かる出で立ちの男だった。

「わっ！ つて、ダグラス少将！」

三人が慌てて直立不動の体勢をとり、フラン시스もそれに倣う。そこにいたのは、騎士団参謀長、ライオネル・ダグラス。フラン시스は初対面だったが、他の三人は面識があるようだ。

「楽にしたまえ。……ふむ、君が噂のファウラー少尉だな。私はライオネル・ダグラス少将だ」

「お初にお目にかかります。フランシス・ファウラーです」

「そう呂まらんでいい。皆、楽にしたまえ」

高級将校にもかかわらず、気さくな雰囲気である。

「話には聞いているよ。任官三ヶ月で初討伐とは、なかなかのものじゃないか」

「いえ、とんでもありません！」

「謙遜は無用だ。その調子で頑張ってくれたまえ」

「ところでどうしたんです？ アレならまだ届いてませんよ」

サイラスとは個人的になかつながりがあるらしい。そんな口ぶりだ。

「新入り君の顔を見に来た というのは冗談でね。まさに、先ほど君たちが話していた件について、レナードと話をね」

(レナードって、隊長と仲がいいの？)

ファーストネームで呼ばわったことについて、フランシスが疑問

に思つたことをクリスティに小声で尋ねる。

（うん、なんか同期らしいよ。対竜部隊にもちよくちよく遊びに来るし）

それにしても。

「人手不足、ですか。こんなにいっぱい人がいるのに」

辺りを見回せば、練兵場で訓練を行う多数の兵士がいる。小さな村育ちのフランシスにとって、村の人口を上回る人員がいるこの部隊が、人手不足に悩まされていると言われてもピンと来ない。

「ここ半年で、この部隊から出た死者、退役者は50名を越える。総勢600、そのうち常時出撃できるのは450ほどだ。50名の減少というのは憂慮すべき事態なのだよ」

「600名の中の50、ってそんなに大きいものですか？」

今度は、クリスティが疑問を呈する。

「近年の戦術論では、3割の損耗で軍は機能しなくなる、といわれているからな。600名中50名といつのは馬鹿にできない数字なのだよ」

「へえ、知らなかつたな～」

「いや、それは一緒に受けた座学で習つたでしょ」

さすがは、一度の追試を科せられたクリスティであった。

「東方遠征の評判のせいだ、ただでさえ辺境騎士団はなり手が少ない。国王の承認が下りれば若者を強制的に徴発することも可能だが

やる気のあるものでなければ、高い技能が必要とされる対竜部隊の隊員は務まらない」

一度行われた東方遠征。特に、第二次東方遠征は、最終的に6割を越す損耗を出すという凄惨な戦いだった。人間相手の戦争ならば、歴史的大敗北と言われてもおかしくない数字である。従軍者の口から、いかに悲惨な戦いであつたかが広まつたため、高額な報酬をぶら下げるもなお、辺境騎士団は入団希望者が少ない。

「まあ、クリスマ蒂的な物好きが、そうそいうわけもないしな」

「物好きって、失礼だね」

「まあ、近頃の若いものは意氣地がねえからな。……ただし、俺の娘が大きくなつてうちに入りたいて言つたら、全力で反対するが」「まあ、そんなわけでね。人員不足解消のための方策を、レナードと練つっていたのだよ」

実際のところは、ライオネルが考えた策をレナードに一方的に告げただけであつたが、そのことはフランシスたちが知る由もない。

「少将、そろそろお時間が……」

後ろに控えた士官が声をかける。

「おっ、すまんすまん。では諸君、引き続き励んでくれたまえ」「はっ！」

敬礼を交わし、ライオネルは去つていった。
入れ替わるように、別の人影が一同の目に入る。

「お、あれはスオウじゃねえか？」「

「あ、ほんとだ。おーい、スオウ！」

ぶんぶん手を振るクリスティに気付き、男が近づいてくる。黒髪が印象的な瘦身の男。フランシスが始めて実戦に立ち会ったときに田にした、スオウ・モーガンであった。

「お前が基地にいるなんて珍しいな。いつ帰ってきた？」

「……今着いたところだ、……そつちは？」

「フランシス・ファウラーです。初めまして」

「お前が、新人か。……よろしく頼む」

フランシスが差し出した手は握られなかつた。全く表情を変えず淡々としゃべるスオウに、フランシスは困惑を隠せない。

「フラン、別に怒つてるわけじゃないから。スオウはちよつと無愛想なだけ」

フォローのつもりなのだろうが、さらつと失礼なことを口にするクリスティ。しかし、スオウはまるで気にしない素振りである。その外見とあいまつて、フランシスは風に揺れる柳の木のような印象を受けた。

「フランシスは初めてだったか。スオウは竜の生態調査隊の一員で、隠密行動の専門家だ。普段は外を回つていることが多い」

「へえ、大変そうですね、モーガンさん」

「……前線に立つお前たち、ほどではない。それから、……俺のことはスオウでいい」

「今日は調査報告に来たのか？　どこに行つてたんだ？」

「……報告と言われば、その通り。しかし……これ以上は話せん」

「ん？　まあいいや。とにかく久しぶりだ、後で酒でも飲もうぜ」

「……うむ。では、失礼する」

飘々とスオウは去つていった。

「何か、含みのある言い方でしたね」

「まあ、俺たちは一応軍隊だからな。みだりに話せない機密、つて
のもあるもんさ」

「どうでもいいが、そろそろ訓練再開するぜ。ダラダラしていると
ころを少佐にでも見つかったら、どやされちまう」

「それだけは勘弁だね」

4人は、めいめい訓練に戻るのだった。

一方、隊長執務室。

レナードは、慄然としていた。ライオネルから持ちかけられた提
案が気に入らないのだ。

「奴め、私がああいう場を好まないのを知つていて……」

「しかし、閣下の知名度を考えれば効果はあるでしょう」

「それは、私もわかつちゃあいるんだが……」

ライオネルの提案は、こういつものだ。一日後に迫つた、コルド
ア発見記念日。沿岸部に位置するコルドア首都アマディアスでは、
毎年盛大な記念式典が行われる。多数の民衆が集まるその場で、レ
ナードが演説を行う。大英雄であるレナードが感動的な演説を行え
ば、熱狂した若者が次々騎士団の門を叩くだろう、と。

「それに、閣下に有力者と繋がりを持っていただければ、予算獲得
の際有利に働きます。いい機会かと」

「君は身も蓋もないな……まあ、しょうがない。ひとつ、広報活

動とやらをしてみるか」

「では、早速荷物を用意させましょ。明後日の式典に参加するなら、早急に出立しませんと」

ダイアナが人を呼ぼうとしたところ、ドアがノックされた。

「失礼いたします！　スオウ・モーガン中尉がお戻りであります」

伝令係の下士官が、敬礼しながら報告する。スオウと聞いて、二人の顔色が変わった。

「すぐに通すよ。あなたは下がりなさい」「はっ！」

下士官と入れ替わりに、スオウが執務室に入つてくる。

「……モーガン、ただいま戻りました」「ご苦労。首尾はどうだ」「はっ。……サンドラ平原からさらに東。……怪しい輩が徒党を組んで潜むのを発見した」

「——力月というものの、スオウはレナードの密命を受け、本来の竜の調査任務から離れて平原地帯を探索していたのだ。

「具体的な場所は？」

スオウが地図を広げて一点を指す。

「——だ。平原東の、岩石地帯。……岩山の洞穴に、根城を構えている」

そこは、付近竜の討伐は終わっているものの、岩がちな地形で農耕には適さず、これといった鉱山資源も発見されていない。好き好んで住もうという者も当然おらず、未だ地名も付けられないまま放置された区画であった。

「人数は」
「20前後」
「ふむ。あんな辺鄙な場所に根城を構える間抜けな山賊はいるまい」
「やはり、例の間者だと」
「まあ、そう考えるしかないだろう」

スオウの探索行の目的。それは、少し前に起きた騎士団員殺害事件、そしてライオネルから知られた密入国事件。それらに関連しているとみられる、何者かの搜索だった。

「正体は割れたのか？」
「そこまでは。……わかつたのは、全員ルゲール語を話すといつことだけだ」

ルゲール語は、旧大陸においてもっとも広く話される言語であり、ブリーディアの公用語でもある。それだけでは何の手がかりにもならない。

「……慎重な連中だつた。なかなか、尻尾を出さない。常に見張りを立て、武装もしている」
「いかがいたしますか、閣下」
「直接聞くのが手つ取り早いだろ。少佐、君ならどう攻める」
「……大部隊を率いれば、察知されて逃げられる可能性が高い。武装した相手と洞穴での屋内戦になる可能性が高いことを考えれば

少數精銳、竜人兵による急襲です

「妥当だな。決行はいつにする」

「一日でも早いほうがよろしいかと」

「……同意する。連中は、怪しい素振りを見せていた。近いうちに、動きがあるかも知れない」

しかし、ダイアナには懸案が一つ。レナードが数日間不在になることだ。

「心配のし過ぎではないかね？ 君を含め、竜人兵が6名。新兵が一人いるとはいえ、20そこそこの相手に万が一もあるまい」

なにせ、局地戦においては百人力とも言われる竜人兵が6人だ。戦力差は単純計算で30倍である。

「それはそうなのですが……」

なにか、胸騒ぎがする。すべてを理屈で考えるタイプのダイアナとしては、極めて珍しいことだったが、虫の知らせか第六感か。何かが胸に引っかかり、漠然とした不安が拭えない。

いや、これ以上の不安は見せまい。

ダイアナは考えを切り替える。これ以上不安をのぞかせれば、もともと乗り気でないレナードが式典参加を取りやめると言い出しかねない。

「では、決行は明日。竜人兵による急襲班を編成し、闇夜に紛れ作戦を実行いたします」

「うむ。よろしく頼む」

大丈夫。レナードの言葉通り、戦力的に万一一が起こるはずもない。

軽く一網打尽にして、尋問するだけのことだ。そう自信に言い聞かせるも、ダイアナの胸中から不安が晴れることはなかった。

急襲、そして

「ふあ～あ、いつもはもう寝てる時間なのに……いきなり召集されるから何かと思ったら、こんな荒野に駆り出されるなんて」

馬上でクリスティが愚痴る。ちょうど日付が変わろうとしている時刻。フランシス、クリスティ、サイラス、エドガー、ダイアナ、そしてオスカル。対竜部隊の6人は、間者の根城と思われる荒野の洞穴に向かっているところだ。

間者と目される者たちの活動は、綿密に計画された組織的なものと思われた。騎士団内に内通者がいるかもしれないという方に一つの可能性を想定し、作戦開始直前まで、出撃メンバーにすら情報は伏せられていたのだ。フランシスたちが突然ダイアナに招集され、作戦の説明を受けたのが夕食後のこと。すぐさま支度をして、騎馬で荒野に出たというわけだ。

先ほどのクリスティの発言も、いつもならダイアナに叱責を受けてしかるべきなのだが、事情が事情だけにダイアナも軽く諭すだけにとどめる。

「眠いのは分かりますが、もう少しで目標地点です。それまでに気を引き締めなさい

「了解……」

いささか緊張感に欠けるクリスティに対し、フランシスは緊張の面持ちだ。訓練以外では、初めて人間と戦闘することになるかもしれない。竜と戦うときと違った緊張感があつた。

「エドガーさん」

「ん、なんだ？」

「エドガーさんは人間相手の戦いつて経験あるんですか？」

「ああ、もちろん。山賊相手にドンパチやつたり、街でチンピラが暴れてるのを懲らしめてやつたりな。　人間相手にするのが怖いか？」

「怖いと言えば、怖いですよ」

竜人以外の兵士たちとも、合同で演習することははある。もちろん、個人の格闘術や剣術の訓練は竜人同士でしか行わないのだが。その経験からして、常人が20人ばかり集まると、自分たちは傷一つつけられることなく勝利できるだろう。経験は浅いが、そのくらいのことはフランスにも分かる。心配なのは　力余つて不需要に大きな怪我を負わせてしまわないか、殺してしまわないか　そのことだつた。

「まあ、心配はいらないさ。さすがにコイツを振り回せばやばいことになるが、20人程度なら素手で十分だろ?」

剣の柄を叩きながら、サイラスが言つ。念のため、ということでおのづつ他の武器を身に帯びていた。ダイアナも、『吼狼』を一挺携帯している。防壁を作つて抵抗された場合、それを破碎するのに使うためだ。

「狭い洞窟での戦いになるからな。乱戦になれば、相手もむやみに銃を使うことはできねえ。手加減はしやすいだろ?」

「そうですよね」

「しかし

ほつと安堵するフランスに、ダイアナが口を挟む。

「情報を得るなら、なにも全員を生かしておく必要はありません。身の危険を感じたなら、容赦なく殺す覚悟が必要です。自身の安全が最優先ですから」

冷徹な言葉。かなり特殊な部隊とはいえ、自分が『軍隊』に所属しているということを、改めて認識するフランシス。

「今回、新兵のあなたと負傷明けのキーツ少尉には後詰めをしてもらいますので。硬くならなくともいいですよ」

フランシスの表情が暗くなつたのを見て取ったのか、ダイアナがフォローした。

「……そろそろだ。ここからは徒步かちで行く」

先導するスオウに倣い、一同は馬を下りた。蹄の音で敵に気取られるのを防ぐためだ。手近な立ち木に馬を繋ぎ、夜の闇の中を注意深く進む。

やがて、荒野のはるか向こうに、小高い岩山の黒い影が見えてきた。岩山からは、小さな光が漏れ出ている。明らかに、人の手によるものだ。

「……あれだ。入り口は、二箇所。麓に一箇所と、中腹に一箇所。中腹のほうは、見張り台に繋がっている」

「作戦は、基地で説明したとおり。下から私、ガーランド、ノ里斯。上からモーガンが突撃します」

「了解」

「キーツ、ファウラーはそれぞれの入り口にて討ち漏らしに備えて

ください。別働隊がいる可能性もありますので、同時に荒野の物音にも気を配ること

「了解」

「配置に着いたら、モーガンが見張りを排除。同時に一斉突撃を開始します。敵に暇を『えず制圧すること』では、散開！」

フランシス・スオウの2人と、クリスティ・サイラス・エドガー・ダイアナの4人に分かれ、一斉に走りだす。

月影の下を、まるで野の獣のように疾駆する6人。

「よろしくお願いします、スオウさん」

前を走るスオウに、フランシスが小さく声をかける。

「……ああ。後詰めのお前たちに出番が回るような、へマはしない。安心して見ていろ」

相変わらずの無表情だが、言葉にはどことなく優しい響きがある。思つたことを言葉や表情に出すのが苦手な男なのだ、といふことはフランシスにも何となく察せられた。

「……右手の岩場の影から回つゝむ。足音に気をつけろ」「はい」

岩から岩へと伝い、見張り台から死角になる場所を選んで慎重に接近する。気取られことなく、一人は見張り台の真下に到達した。岩山の中腹にぽっかりと開いた洞穴の出口部分に、木材で簡単な足場が組まれており、そこで男が一人、見張りに立っていた。

「……お前はここで待て」

極めて小さな声でそつフラン시스に伝え、スオウは岩山に取り付いた。見張り台へ直通する梯子は使わず、回り込むつもりらしい。するとすると、音もなく岩肌を登つっていく。

(まるでヤモリみたいだ……)

フラン시스が感心している間にも、スオウは器用に岩山を登る。見張りには、全く気付かれていない。凄い技術である。やがて、見張り台のすぐ近くまで辿り付くと、一気に跳躍する。見張りの背後に着地するや、首筋に一撃。振り返る間も与えず、見張りを昏倒させてしまった。

上がつて來い、とスオウの合図。音を立てぬよう注意しながら、梯子を上る。フラン시스が見張り台に辿りついたところで、スオウがダイアナに手信号を送った。

三、二、一 ダイアナが指でカウントを取り 突入が開始される。

「辺境騎士団である！ 不法入国のかどにより、お前たちを拘束する！」

先陣を切つて突入したダイアナが叫ぶ。律儀なことに、規定に則つての行動である。もつとも、九分九厘クロと決まっている相手だ。当然大人しく従うはずもなく 亂戦が始まった。

見張り台から、フラン시스は洞穴の中を覗く。天然の洞穴を、ある程度人の手で掘り進めて作られたらしいその空間は、ちょっとした広間程度の広さがあった。

間者と思しき男たちは手に刃物を持つて応戦するも、圧倒的な力の前に躊躇されていく。

特に活躍めざましいのが、スオウであった。敵の攻撃を『受け止める』のではなく、『受け流す』。騎士団式の格闘術とは違つ、獨特の技術だ。相手の動きに逆らわず、いなし、体勢を崩したところで急所を的確に突き、昏倒させていく。まるで、川のせせらぎを思わせるような立ち回りであった。

と、一人の男がナイフを振りかざし、背後からスオウに襲い掛かつた。危ない、とフランシスが叫ぶ間もなく、ナイフがスオウの背に迫る。しかしナイフは、スオウの身体の直前で止められた。後ろ手にまわされた、スオウの一一本の指によつて。振り返りもせずにナイフを摘み取つたスオウは、裏拳で男の顎を一撃。叫び声も上げず、男は昏倒する。まるで、後ろに眼が付いているかのような動きであった。

程なくして、戦闘は終了した。20人からの男たちは、あるいは昏倒させられ、あるいは関節を砕かれ行動力を奪われた。かかった時間は2分に満たなかつただろう。スオウの予告どおり、入り口を押えていたフランシスとクリスティの出る幕はなかつた。

「速やかに捕縛してください。猿ぐつわを噛ませて、自害を防ぐのも忘れずに」

「やれやれ、こいつら全員を連行するのはホネだな」

「ぼやくなよ、サイラス。　おい、そこのお前、何をしてやがる！」

エドガーの鋭い声。一人の男が、怪しい動きを見せたのだ。男は、最後の力を振り絞つて地面を這いざると、天井から吊るされた一本の紐を引いた。

ジッ、つと何かに点火される音が、フランシスの頭上から響き、

一瞬遅れてヒュルヒュルヒュル、パーン。岩山の上に、花火が上がった。

「なに、今の！？」

「ファウラー、キーツ！ 外を探れ！」

困惑するフランシスたちに、洞穴内からダイアナの指示が飛ぶ。離れた場所にいる仲間に向けた、何らかの信号。そう判断したのだ。

「フラン、あっち！ 馬の蹄の音！」

「……ほんとだ！ これは 馬車か？」

蹄の音に混じって、車輪が地面を刻む音。竜人の常人離れした聴覚が、数マイルも離れているであろう場所から発せられたその音を聞き取つた。

「抜かつたか！ 追いなさい！ われわれもすぐに向かいます！」
「了解！」

クリスティと並んで、フランシスが走り出す。目標までは数マイル。竜人の脚力をもってすれば、数分で追いつける距離だ。みるみる馬車の姿が近づく。二頭立ての幌馬車に、一人の御者が乗つているのが見えた。

「あたしが御者を捕まえるから、あんたは馬を抑えて！」
「了解！」

二人は左右に散らばると、同時に馬車に飛びついた。クリスティが御者を馬車から引き摺り下ろして押さえつける間、フランシスは手綱を引いて馬車を止める。

「ふう、手間かけてくれちゃって」
「ぐつ……」

腕を極められ、うつ伏せに押さえ込まれた男が呻く。
ていつ、とクリスティが首筋に一撃をいれ、男は力なく意識を失つた。

「それで、積荷はなんだつたんだるつ」

フランシスが荷台を覗くと、そこには一つの包みがあった。中身を傷つけまいとする厳重な梱包で、高価な美術品を運んでいるかのようだ。

「これ、少佐が来るまでこのままにしておいたほうがいいよね」「別にいいんじゃない? 開けてみようよ」

「あ、待つてよ、クリス! 重要機密だつたりしたら……」

フランシスの言葉を全く気にせず、クリスティが梱包を解いていく。そして、中から出てきたのは ひとつの中空の卵。灰色地に黒のまだら模様が入り、表面はざらざらしている。何の変哲もない卵。一抱えほどの大ささがある点を除いては。

「なにこれ……卵?」
「でも、こんな大きい卵なんて見たことある?」
「あるわけないじゃん。でも、どう見ても卵だよね」
「それはそうなんだけど。……もしかして」
「ひょっとしてフラン、あたしと同じことを考へてる?」
「……たぶん」

ありえない大きさの卵。卵が大きいということは、生まれてくる『何か』も当然相応の大きさだろう。ここに「ゴルドア」で、それがなにを意味するのか

「竜の卵」

一人の言葉が重なった。

「パーティは竜の生殖についてはよく分かっていない、って言つてたけど」

「それなら、これって大発見、なんじやない?」

「本當なら、そうだらうね」

「でも、なんでこいつは竜の卵なんかを運んでたんだろ」

「それは尋問すればわかるんじやん?」

と、一人の耳が異音を聞きつけた。荒野の彼方から、遠雷が轟くような、そんな音。

「クリス、これって……！」

対竜部隊員なら、『馴染み深い』その音。

「ヤバいよ、これー！」

やがて、月に照らされた地平の向こうから、巨大な影が現れた。

絶望的状況

「オゴアアアアアーネツ！」

咆哮が、雷鳴のように夜の静寂を切り裂いた。

荒野の彼方から現れた影　言づまでもなく、それは竜であった。

「ど、どうして安全地帯に竜が…？」

フランシスが安全地帯で竜に襲われたときは、その竜は怒りに我を忘れた状態だった。極度の興奮状態でなければ、竜が縄張りを越えて行動することはないはず

「つて、あつ！」

一人同時に、一つの可能性に気がつく。

「もしかして　『これ』のお母さん？　いやお父さん？」

パトリシアの座学で、竜には雌雄の性別がない、ということを教わっていたフランシス。若干混乱気味だ。

「いや、そんなのどっちでもいいから！　早くみんなの所に戻らなくちゃ！」

「わ、わかった！」この男と　卵はどうする？

「こいつはとりあえず放つておいて、卵は少佐に見せたほうがいいよね」

「よし、じゃあ急いで！」

卵を抱え、フランシスとクリスティが走り出す。

2人が戻ったとき、4人は既に異変に気付き、根城の外に飛び出していた。

「一体何があつたのですか！」

さしものダイアナも、興奮気味だ。

「それが、一味のものらしい馬車からこんなものが」「これは、卵？まさか　ゴルドア発見から一度も存在が確認されていない竜の卵が！？」

パトリシアら研究者も、「どうやら卵生らしい」、ということはわかつっていた。しかし、未だその現物は一度も発見されていなかつたのだ。

「なるほど、アレはこの卵の生みの親、といつわけですか」

わが子を奪われた親の怒り。たとえ異なる生物種だとしても、その怒りは十分推し量ることができる。その竜が、縄張りを越えて現れた理由も。

「……少し、静かにしてくれ」

スオウが、地面に耳を当て、注意深く足音を探る。

「……炎竜だ。相当、でかい。80、いや90フィート……！？」
「90だって！？　そんなデカブツは聞いたことがねえぞ！？」
「……時速40マイル以上だ。こちらに向かっている

史上類を見ない巨大な竜が、全速力で向かってきている。メンバーを戦慄させるには、十分な情報だった。

「ど、ど、ど、じょ、う、」コレ返したら大人しく帰つてくれるかな？」

「キーツ少尉、落ち着きなさい！」

努めて冷静を装おうとするが、ダイアナも焦りは隠せない。眉間に深い皺があり、こめかみから冷や汗が流れている。

「とにかく、クリスの言つとおり卵を返してやるのが一番じゃないですか？」

サイラスの提案に、ダイアナは考える。それで竜が引き下がるのなら、それでいい。学術的には大きな損失だが、致し方ないだろう。しかし、それでも竜が止まらなかつたら。　人里まで数十マイル。ここで竜を止めることができなければ、数時間のうちに大惨事が起つりうる。

「そうですね。とりあえず、やつてみるしかないでしょう。モーガン中尉、これを竜の予想進路上に」

「……了解」

スオウが、卵を抱えて走り出した。

やがて、巨大な竜が、根城からもはつきりと目視できる距離に入つた。大地を震わせ、荒れ狂つて荒野を疾駆するさまは、さながら暴風雨か竜巻か。

スオウが、卵を竜の前方の地面に置き、素早く離脱。一同は、固唾を呑んで竜の動向を見守る。

200ヤード、100ヤード　遂に、竜は卵に到達。しかし竜

は、卵を素通りしてしまった。

「……いかん。卵すら田に入っていない。ところが、もはや全く回りが見えていないのだろう」「

竜に先んじ、一足早く戻ったスオウが報告する。

卵を返してもダメだとすると、もはやなにをもつても竜を止めることはできないだろう。

「来るぞ！ 隠れろ！」

6人は、めいめい手近な岩陰に隠れる。身を潜める一同をよそに、猛り狂った竜は間者の根城を通過していくた。

ダイアナが、素早く地図を広げる。

「！」のまま直進したとすると アリソン、ネスの村あたりが危ない

ネス。その地名が、フランスの頭に引っかかる。どこかで、その名を聞いたような そうだ、ナタリーだ！

嫁ぎ先は、ネスの村の農場主。幼馴染のナタリーは、確かにそう言つた。どうしよう、このままではナタリーの身に危険が及んでしまう。

一方、ダイアナの胸中も激しく揺れていた。

(基地に戻つて部隊編成、出撃するまではどう短く見積もつても6時間。近隣の集落で避難誘導するにも、竜が到達するまでの猶予は數十分あるかどうか。くつ、なんにせよ時間が足りない！ 機密漏洩を恐れ、後方要員も連れずに作戦を行つたのが裏目に出たか……。

そして、一番の問題は閣下の不在……。）

「少佐、ネスには大事な知り合いがいるんです！ なんとかならないんですか！？」

「黙つて！ 今考えているところです！」

珍しく、苛立ちを露にしたダイアナの声に、フランシスは驚いて押し黙る。

「……ノ里斯、ガーランドは近隣集落の住民に危険を知らせて。モーガンは竜に張り付き、動向を追つてください。キーツ、ファウラーは私とともに基地に戻り、部隊を率いて再出撃。これしかないでしょ！」

「だが少佐、それだとネスの村あたりがヤバい。いくら急いで、竜の到達までほとんど間がない」

サイラスが、地図を見ながら指摘する。

「……止むを得ないでしょう。被害を最小限にとどめること、今までるのはそれだけです」

ダイアナとしても、苦渋の決断である。血が出るほど泣き、歯を嚙み締めた。

「そんな……！」

フランシスの目の前が、真っ暗になる。まさに絶望的な状況。たとえ命が助かつたとしても、村や農地は大打撃を受ける。送別会で見た、ナタリーの幸せそうな笑顔が、胸に突き刺さる。自分にはどうすることもできないのか。

いや、諦めちゃダメだ。思い出すのは、レナードとの対話。無力感に打ちひしがれているだけでは、なにを成すこともできない。そう教わったじゃないか。

フランシスは、必死に考える。今まで見てきた竜との戦い。基地でパトリシアから受けた座学。あの竜を止める手立てはないのか。フランシスの頭脳が、未だ経験したことのない速度で回転する。

実際考えていた時間は、数秒だつただろう。遂に一つの案が、フランシスの頭に浮かんだ。人に話せば、荒唐無稽と笑われるかもしない。しかし、ようやく見つけた細い細い一筋の光明。

「ファウラー、何をしていいのです。急ぎなさい」

と、走り出そうとするダイアナの行く手を、フランシスが遮った。

「少佐、提案があります」

「提案？ 何か知りませんが時間がありません。行きますよ」

「お願いです、話を聞いてください！」

フランシスには珍しい必死の懇願に、ダイアナも多少落ち着きを取り戻した。

「わかりました。手短に」

そして、フランシスは一同驚愕の策を口にする。しばし、沈黙がその場を支配した。

「いや、確かに理屈では可能かもしれないが……」

「ああ。トラップも大砲の支援もねえ状況で、しかも相手はあの『カブツだぜ』

「……成功の可能性は、極めて低い」

仲間たちが、口々に否定的な意見を漏らす。

「大事な人を想う気持ちはわかります。しかし、被害を最小限にするために、犠牲にしなければならないこともある。軍とは、そういうものです」

「……確かにナタリー姉ちゃんのこともあるし、少佐の言つてることも理解はできます。でも、被害が出るのを黙つて見過ごすなんて、僕にはできません！ なんなら、僕一人で！」

必死に食い下がるフランシス。たとえ駄目でも、命を懸ければわずかないと時間を稼げるだろう。そんな悲壮な決意がフランシスにはあった。

「フラン、あんた本気なんだね」

「うん」

クリスティの問いかけに、迷いのない真っ直ぐな瞳で頷く。

「……少佐、あたしもフランの作戦に賛成です」

「クリス！？」

「失敗したら終わりだけど……成功させればいいんでしょ？ フランは、やると決めたらかなづやる。この前の戦いで、それを証明してくれた。あたしは信じるよ」

「……ありがとう、クリス」

「フラン一人じゃ難しくても、一人なら可能性は倍です。少佐、お願い、許可を」

二人は、必死に頼み込む。

「しょうがない、俺も付き合ひつか。まあ、危なくなつたらさつさと逃げさせてもらひがな」

やれやれ、と肩をすくめてサイラス。

「そうだな。ここまで言われてイモ引いちゃあ、俺も娘に会わす顔がねえや」

腕組みしながら、エドガーはニヤリと笑う。

「……新入り、いや、フランシスの勇気に敬意を表する。俺も、贊同しよう」

スオウは、相変わらずの無表情だ。

「みんな……！」

そんなやりとりを見つめるダイアナ。先程は否定したものの、頭の中ではフランシスの策を真剣に検討していた。6人の竜人兵の戦力。そして、『吼狼』に装填された弾丸。確かに困難だが、不可能ではない。そして、成功すれば被害はゼロに抑えることができる。

「この場にレナードはいない。決断できるのは、自身のみ。

「……わかりました、やつてみましょつ

しばしの黙考ののち、ダイアナが答えた。

「少佐！」

「ただし、私が失敗と判断した時点で、必ず撤退すること。これだけは絶対に守つてください。全滅してしまっては、近隣住民を逃がすこともできませんので」

「はい！」

「そうと決まれば、時間を浪費している暇はありません。急ぎましょう」

「了解！」

6人は、遠ざかりつつある竜へ向かって走り出した。

決戦

「左右に散開！　まずは足を狙え！」

騎馬のダイアナから指示が飛ぶ。

時速40マイルという速度で疾駆する炎竜。追いすがりながらでは、相対速度の関係上攻撃の威力が削がれてしまう。人里への到達を遅らせるといふことも考えれば、足に少しでもダメージを与えてスピードを弱めることが肝要だ。

フラン시스たちは左右に散らばり、竜目掛けて突撃を開始した。

「おおおおおっ！」

気合とともに、フラン시스が竜の後足に斬り付ける。しかし、分厚い鱗にはまるで歯が立たない。

「くつ！」

「フラン시스、指だ！　地面から離れた瞬間を狙って足の裏から攻撃しろ！」

サイラスが、長剣を一閃。可動部ゆえに鱗が手薄な指の裏を、巧みに狙った一撃だ。鱗の最薄部を浅く切り裂き、一筋の鮮血が流れれる。

仲間たちも、それに倣つて指を攻める。足の裏に幾筋かの傷をつけられた竜は、次第に走行速度を落としていく。一つ一つは小さな傷だが、それは人間で言えば靴の中に小石がいくつも入った状態。全力疾走は難しくなる。

「よし！　そのまま攻め手を緩めるな！」

「言われるまでもねえ！ うおおおりやああつ！」

エドガーが、巨大な戦斧を薙ぐ。刃先が、足首の間接部に深々と突き刺さった。

それまでは、フランシスらまるで意に介していなかつた竜。

「ううとおしいぞ、虫けらどもめ。

竜にとつてはその程度の認識だつたのかもしない。しかし、遂に竜は足を止めた。

卵を奪つた『あいつ』の前に、この虫けらどもを叩き潰してやる。

竜は、フランシスたちとの対決姿勢に入った。

ここまでは、作戦通り。

馬上で指示を出しながらも、ダイアナの頭は高速回転を続ける。作戦を承認した以上、全責任は自分がとらねばならない。作戦が失敗したなら、わが身を犠牲にしてでも余力があるうちに他の5人を逃がし、次善策を取らせる。それには、メンバーの体力がどれだけ残っているかを見極めることが必要だ。

（それにして、『あの方』と同じことを考え付くとは）

ダイアナがフランシスの策を受け入れことになった、大きな理由の一つ。それは 過去に同様の成功例があつたということだ。そして、そのときの作戦を考案行に移した人物こそが、対竜部隊隊長、レナード・パーシヴァルその人であつた。第二次東方遠征の最

中、撤退しか考えられない絶望的な状況下。レナードはほとんどつた一人で『それ』を成し遂げた。

今、ここには竜人兵が6人もいるのだ。ここで諦めてしまったら、レナードに会わせる顔がない。一人ひとりの力はレナードに及ばずとも、力を合わせれば不可能はないはずだ。ダイアナを突き動かしたのは、ある種の意地。レナードに対し、崇拜に近い感情を抱くダイアナ。しかし彼女は、「いつかは越えてみせる」という強い意志をも兼ね備える、芯の強い女性だった。

「ここからだね、フラン」

「ああ」

ずしん、ずしん。竜がその場で足踏み。そして、じばしの静寂が訪れる。それは、嵐の前の静けさか。

「グロオオオオオオツ！……！」

咆哮が、開戦の合図となつた。

「でえりやああつ！」

戦端を切つたのは、クリスティ。素早く走りこむや、逆手に持つた小剣で竜の脇腹辺りに切りつける。

「くつ、やつぱり硬い！」

竜の鱗は、歳経るごとに厚くなる。これほど巨大な竜ならば、その強度は推して知るべしだ。

「先走るな！ 一点を狙つて集中攻撃！ 先陣はノリス、ガーランド！」

すかさず、ダイアナの指示が飛ぶ。頑強な相手に対しても、速度をたのむクリスティよりも、一撃の威力が高いエドガー、サイラスの攻撃が有効だ。

「エドガー、左から行くぞ！」

「任せとけ！」

二人が狙うのは、比較的鱗が薄いとされる脇腹だ。繰り出された巨大な爪をかい潜り、エドガーの強烈な一撃。続いて、寸分違わぬ場所に、サイラスが鋭い斬撃を放つ。一枚の鱗に、大きな亀裂が走った。

「行くよ、クリス」

「うん！」

フランシスが、右手のヘヴィーハチエットを叩きつける。回転しつつ、その勢いを利用して左手の一撃。止めとばかり、クリスティによる神速の斬撃。鱗は、真中から千切れ飛んだ。下から、薄紅色の肉が露出する。

「……喰らうがいい」

スオウが弓を引く。分厚い板バネを幾重にも重ねて作った、竜人専用の特別製だ。背の筋肉が、みしめしという軋みが聞こえそうなほどに緊張し 開放される。風を切つて飛翔する矢。大きく重たい矢尻が、深々と突き刺さった。

傷口から、鮮血が滴り落ちる。しかし、竜にとつては大した痛手

ではなかつた。鱗が薄い部分の下には、重要な臓器が少ないので、急所と呼ばれる部分は、概して頑強な鱗に守られている。

しかし、これはフラン시스たちにとって想定の範囲内だった。

「まだだ。まだ足りない」

フラン시스が呟く。

フラン시스が考えた作戦の目的　それは炎竜にあえてブレスを吐かせることだった。

炎竜のファイアーブレスは、確かに必殺の威力を持つ恐るべき攻撃だ。しかし、一度吐いてしまつとしばらくは再び吐くことができず、体力も著しく消耗する。そうすれば、のちの対処もし易くなるだろう。

しかし、フラン시스の作戦には、まだ先があった。それは、「ブレスを吐く瞬間を狙い、この場で竜を仕留める」というもの。レナードが実行して以来、誰一人として挑戦することを考えもしなかつた仰天の作戦だ。

炎竜がブレスを吐く直前。それは戦いを挑む者にとってもつとも危険な瞬間だ。しかし、ブレスの発射体勢に入つた竜は、きわめて隙が大きい。もつとも、隙が大きいだけで竜が倒せるわけではない。

ブレスの発射には、『輔腹』による空気の吸引が不可欠であり、大量の空気を取り込んだ竜の腹は大きく膨れ上がる。フラン시스が目を付けたのはそこだ。腹が膨れるのに対し、鱗の大きさは一定。表面積が広がつた腹のすべてを覆うことができなくなるため、腹が膨れた瞬間鱗には隙間ができるのだ。

竜の腹部には重要な臓器がいくつも存在する。普段は分厚い鱗に覆われて手が出せない弱点も、この瞬間だけは守りが薄くなる。そして、狙うは一つ。数々の臓器の中でも外側に位置し、しかも可燃性物質がたっぷり詰まつた『炎嚢』だ。火矢などを用いて、これに引火させる。さしもの炎竜も、体内で大爆発が起こればひとたまりもないだろう。

これが、今までの戦闘経験とパトリシアの教えからフランシスが導き出した答えだった。

しかし、これを実行するにはいくつもの困難が待ち受ける。

まずは、ブレスを吐かせること自体が難しい。炎竜にとつてブレスは『とつておき』であり、ある程度追い詰められなければみだりに吐くことはない。少なくとも、「こいつらはなかなか手強いぞ」、と思わせる程度には痛手を与えなければならない。

また、鱗に隙間ができるとしても、『炎嚢』は脂肪の膜と筋肉に守られている。腹が膨れた瞬間を狙い、これを切り裂かなければならぬ。

そして、攻撃を加えた者が離脱してから竜がブレスを吐くまでのわずかなタイミングで、『炎嚢』に火をつける。少しでもタイミングがずれれば、攻撃者はブレスの餌食となるか、爆発に巻き込まれるハメになる。

幸運だったのは、ダイアナの『吼狼』に装填された弾丸の種類が、いつもの撤甲弾でなかつたことだ。バリケードの破碎用にと、この日詰めてきたのは炸裂弾。竜は外部からの熱や衝撃に強い。最新の技術で開発されたものの、貫通力に劣るこの弾丸は失敗作扱いされていた。しかし、この作戦に限つては、遠距離から確実に『炎嚢』に着火できるのは大きな利点となる。弾丸の開発者も、まさかこんなところで役に立つとは思わなかつただろう。

フラン시스たちは、休まず打撃を繰り広げる。どれも竜の身体を小さく傷つける程度で、巨大な竜にとっては、蚊に刺された程度にしか感じられないのかもしれない。しかし、をちょこまかと攻撃をかわし、ちくちく刺してくる蚊トンボたちに、竜は次第にいらつき始めたようだ。

最初は、軽く振り払う程度だった竜の攻撃 無論、フラン시스たちにとつてはそれほど生易しいものではないのだが、が、だんだんと苛烈になっていく。爪の一撃は大地を割り、尻尾の一撃は岩だろうと立ち木だろうとお構いなしに打ち砕く。

調子よく攻め続けていたフラン시스たちも、攻撃の手を緩めて回避に専念せざるを得ない。一旦距離を取り、尻尾の攻撃範囲外に逃れる。

「奴さん、相当イラついてるみたいだぜ」
「まったく、少し怒らせるにも一苦労だ。門限破つただけでおかんむりな少佐とは大違いだぜ」
「……矢が、尽きた」
「……もう一息だね」
「うん」

フランシスは、じくじくとつばを飲み込む。
戦いは、佳境を迎えていた。

決着のとき

ダイアナが、竜から150ヤードほどの地点でうつ伏せになり、射撃の準備に入った。作戦が成功した場合、爆発から逃げ切れるだろうと思われるギリギリの距離だ。

竜は、両眼を爛々とぎらつかせ、フラン시스たちを待つ。どこからでもかかつて来い、とも言わんばかりだ。竜という生物がこの世に誕生してから、冒険家アマディアスがコルドアを発見するまでの幾星霜。コルドアの大地に君臨してきた王者の風格が、そこにあつた。

「突撃！」

ダイアナの号令の下、5人が突撃を開始する。矢を撃ちつくしたスオウも、幅広の曲刀を抜いて竜に立ち向かう。

竜は一つ嘶くと、まずは尻尾の一撃でフラン시스たちを迎える。竜人兵とて、まともに喰らえばクリスティのように全身の骨が碎かれる。フラン시스、クリスティ、サイラスは上に跳躍し、エドガーは横に跳躍。スオウは地を這うようにそれを避ける。

身動きの取れない空中で、フラン시스に竜の巨大な右腕が迫る。

「危ねえっ！」

エドガーに引っ張られ、すんでのところで難を逃れる。その代わり、肩から地面に叩き付けられてしまつたが。

「ありがとうございます、エドガーさん！」

肩の痛みなど意に介せず、フラン시스はすぐさま起き上がり竜へ

向かう。

怒り狂った巨大な竜と、5人の竜人兵の戦いは、さながら竜巻のよう。竜の放つ凄まじい重量を持った攻撃と、常人離れした速度をもって矢継ぎ早に繰り出される竜人兵たちの攻撃がせめぎ合つ轟音が、夜の荒野に響き渡る。

ダイアナは、じりじりしながらそれを見守っていた。皆はこれ以上ないくらいに奮戦しているが、竜も手強い。なかなかブレスを吐こうとしないのだ。このままでは、『燃料切れ』を起こしてしまう。特にダイアナが心配しているのはフラン시스だ。作戦を提案した責任感が突き動かすのか、他のメンバーと比べても、ひときわ激しい戦いぶりを見せている。だが 少々入れ込みすぎている。あの調子だと、他の者より早く『燃料切れ』を起こしてしまつかもしれない。

ダイアナの心配は的中していた。いや、フラン시스の状態は、ダイアナが考えているよりも酷いものだった。自分が頑張らなくては、との想いから、フラン시스は限界に近い、いや限界をはるかに超えた力で戦い続けていたのだ。ヘヴィーハチエットを振るうたび、ふちぶちどこかの筋が切れる音がする。間接がズキズキと痛む。パトリシアならば、それは常人をはるかに超えた自身の筋力に、身体がついていけなくなつたからだと説明するだろう。それでも構わず、フラン시스は奮闘を続ける。

「いい加減ブレスを吐きやがれってんだ、クソッタレ！」

エドガーが、思わず愚痴る。その場にいる全員が、同じ気持ちだった。

直撃こそまだ誰も食らっていないものの、あるいは爪がかすり、

あるいは竜の尻尾が碎いた岩の破片を受けたりと、みな満身創痍である。そして、体力の限界……『燃料切れ』が、足音を立てて近づいているのを全員が感じている。

しかし、フランシスたちの奮戦空しく、決定機はまだ訪れない。

「……これでは、埒が明かん」

「同感だな。フランシスが限界だ。……一気に勝負をかけるしかないか」

「でもサイラス、どうするの?」

「気は進まんが……必殺技つてやつを見せてやる。みんな、合図をしたら一旦竜から離れてくれ」

「何だか分からんが、わかつたぜ!」

他の4人が再び竜に向かうのを見ながら、サイラスは竜から大きく距離を取つて呼吸を整える。剣は肩に担ぎ、上体を捻るように振りかぶる。足は大きく開き、後方の軸足に体重をかける。流麗を極める普段のサイラスの剣からは想像できない、大雑把な構えだった。一つ、深呼吸。

「今だ!」

4人が、一斉に飛びのいた。

「ハツ……！」

呼氣とともに、一気に剣を振り下ろす。剣閃すら見えないほどの中、神速の斬り下ろし。豪、と突風が拭きぬけたかのような音が響く。同時に竜の左手首が『見えない何か』に深く切り裂かれ、真っ赤な血が勢い良く噴出した。それは、サイラスの剣が生み出した、真空

の刃によるものだった。

「見たか、トカゲ野郎！」

言いつつ、サイラスは剣を取り落とした。人体の限界を超えた拳動により、肩から手首にかけての腱が一気に破断してしまったのだ。

「後は頼んだぜ、みんな！」

いくら竜人といえど、かなりの痛手である。戦闘不能になつたサイラスは、仲間たちに後を託す。

「よし、あたしも！」

クリスティが、背中のスケイルピアサーを抜き放つ。竜の背後に回りこむと、尻尾を伝つて竜の背中、頭部と一緒に駆け上がる。狙いは眼球だ。分厚く、弾力性のあるゼリー状の膜で保護されている眼球に、全体重をかけてスケイルピアサーを突き立てた。

「グオオオオッ！！」

刃先は膜を貫通し、眼球深く突き刺さつた。苦しむ竜は、激しく首を振る。クリスティは堪えきれず、空中に投げ出された。

「おつと、危ねえ！」

危うく地面に叩き付けられそうになつたクリスティを救つたのは、エドガー。

「俺も負けてらんねえな！」

一足飛びで竜の懷に飛び込むエドガー。そこに、竜の右手が横薙ぎに振るわれる。エドガーは避けようともせず、逆にその右手に合わせて全力で斧を振るった。衝撃の反動で、エドガーの巨体が10ヤード以上も転がる。しかし、竜の掌は、エドガーの戦斧によつてざつくりと斬り裂かれた。

続いてすっとスオウが進み出る。両手に傷を負つた竜は、スオウを頭から丸齧りせんと、大きなあざとを開く。子供の腕ほどもある巨大な牙が勢い良くスオウに迫る　が、スオウは流水のような滑らかな動きでこれを避けた。

「……祖先伝来の技、味わうがいい」

曲刀を放り出し、高く跳躍。一つトンボを切ると、竜の後頭部に掌底を叩き込んだ。ずん、といつ鈍い音があたりに響く。

「グ、ウウッ……？」

素手によるその一撃。信じがたいことに、その一撃は竜をぐらつかせた。硬い頭蓋を通して内部に直接衝撃を与える、スオウの妙技だ。

「みんな、凄い……！」

フランシスも思わず見入つてしまつほど、凄まじい連携だった。

そのどれも、致命傷を与えるには程遠い。しかし　ひとつ竜の怒りは頂点に達したか。

「ウゴアアアアアーーーツ！…！」

万里に響き渡ろうかという、凄まじい咆哮が夜の荒野を引き裂く。ぶるつと一つ首を振ると、竜はその動きを止めた。

「来たか！」

『吼狼』を構えるダイアナの視線の先には、『輔腹』を脈動させ、外気を体内に取り込んでいる。

ブレスの発射準備に入つたのだ。

「みんな、下がつて！」

フランシスが、走り出す。

皆満身創痍で、特にサイラス・エドガーは激しく負傷してしまった。オスワ、クリスティも、『燃料切れ』が間近であることはフランシスにもわかっている。もとより、自分が言い出したことだ。一番危険なこの役目だけは、自分がやらなくてはいけない。フランシスは、最初からそう決めていた。

「フラン、絶対死んじゃ駄目だよ！ 約束だからねー！」

背中越しにクリスティの声。振り返つて軽く頷き、さらに加速。みしり。ふちん。身体のあちこちから、色々なものが壊れる音がするが、微塵も気にすることはなく、一気に竜の下へ到達する。

田の前には、不気味に膨らむ竜の腹部。パトリシアの座学で習つた。『炎囊』は、『輔腹』の下部、右から三番目大きな鱗。そのすぐ下にある。

みるみる膨らむ竜の腹。鱗と鱗の間隔が広がっていき 遂に、『炎囊』のあるべき部分が露出した。

「そこだ、やっちゃん！」

エドガーに言われるまでもなく。右手に持ったヘヴィーハチエットを、竜の皮膚へと突き立てる。全身全霊を賭けた一撃が、竜の身体を深く深く引き裂いた。ピンク色に蠢く『炎囊』が、遂に姿を現した。

あとは少佐がなんとかしてくれる。

フラン시스は、糸が切れたようにその場へ崩れ落ちた。それまで、興奮によって忘れていた痛みが蘇る。全身の関節、筋、腱 あらゆる場所から、悲鳴が上がっている。身体は、もはやいつことを聞かない。辛うじて動く首で、竜を見上げた。その腹ははち切れんばかりに膨れ上がり、ブレスの発射まで猶予がないことを示していた。

でも、これでいい。こんな僕でも、みんなを守ることができたのだから。

最後に、仲間たちのほうを見る。皆フラン시스に向かつて口々に何かを叫んでいるが、良く聞き取れない。目の前が暗くなつていいく。もう、このまま眠つてしまおうか そうフラン시스が思つたとき、ひときわ大きなクリスティイの声。

「フラン、立つて……！」

クリスティイが、フラン시스向かつて駆けて来る。フラン시스を助けるつもりだらう。駄目だ、戻れと叫ぼうとするが、それすらも今

のフラン시스には不可能だつた。

クリスを死なせるわけには行かない。

指先に力を込める。地面に手を付き、上体を起こす。震える身体を氣合で支え、血反吐を吐いて立ち上がつた。全身に走る痛みを堪え、走り出す。

その様子を、『吼狼』越しに見つめるダイアナ。竜の口からは、今にもブレスが吐き出されようとしている。よろよろと遠ざかるフラン시스の姿に、歯噛みする。早く、早く。フラン시스を犠牲にして『吼狼』を発砲する覚悟は、まだ決められなかつた。

あまりの激痛に、一步足を進めるごとに氣絶しそうになるフラン시스。そして、遂にクリスティがフラン시스のもとに辿り着いた。フラン시스に肩を貸し、引きずるように走り出す。しかしそのスピードはいかにも遅く、とても間に合ひそうにない。

諦めちゃ駄目だ。クリスを、絶対生きて帰す。

強い想いが天に通じたのか。フラン시스の身体に、劇的な変化が起きる。全身を襲つていた激痛が、すっと引いた。いや、正確には痛みが快感に変わつた、である。快感はあつという間にフラン시스の全身を支配した。ふわふわとした高揚感に包まれる。一瞬、頭の中が真っ白になつた。

フラン시스は夢を見た。男が、竜と戦つてゐる。見慣れない風景、見慣れない服装、見慣れない武器。しかし、遠い昔、どこかで見たことがあるような

それは、刹那にも満たない、わずかな時間だつた。覚醒したフランシスは、頭の奥底からあふれ出た何かが、体の隅々にまで染み渡るような不思議な感覚に襲われた。みるみる、力が漲る。

逆にクリステイを抱えるようにして、フランシスは走り出した。竜人の限界をも超えた、凄まじい速度だ。

これならば、間に合う。限界まで、フランシスが離脱するのを待とうと決めていたダイアナは、これで心置きなく引き金を引ける。細心の注意を払つて最後の照準調整を終えた。目標までは、わずか150ヤード。極度に集中した今のダイアナに、外す要素は一つもなかつた。あとは、優しく引き金を引くだけだ。それにしても、部下たちを随分酷い目に合わせてくれた。ダイアナの胸中に、怒りが湧き上がる。

「くたばれ、クソ野郎」

人生で一度も発したことのないような汚い言葉を一つ呟き、引き金引く。

銃口から放たれた直径五インチの弾丸は、寸分違はず竜の『炎嚢』に命中。弾丸内部の炸薬が、爆炎が上がる。

竜の体が硬直し　ほんのわずかに遅れて、大爆発が起きた。身体の内部から巻き起こつたその爆発は、強固な竜の身体を跡形もなく吹き飛ばした。

爆炎が、フランシスとクリステイに迫る。最後の力を振り絞り、フランシスは走る。炎に追いつかれようとしたその時、荒野に谷間があるのを見つける。すんでのところで、谷間に飛び込んだ。頭上を、爆炎が通り過ぎ　数秒して消えていった。

「フラン、大丈夫！？ 生きてる？」

フランシスは、寝息を立てて深い眠りについていた。クリスティが揺すっても、全く目を覚ましそうにない。

「もう、しょうがないなあ。……ちょっと格好よかつたよ、フラン」

そう言つと、クリスティはフランシスの頬に軽くキスをした。

HΠRΟΪΓΕ

「皆、無事で何よりだった。よくやったぞ」

レナードから、労いの言葉がかけられる。

ここは、対竜部隊本部、医務棟。竜との戦いで、全身の筋肉やら腱やらがズタズタになったフランシスは、春以来の入院生活を強いられることになった。

数時間前ようやく意識を取り戻し、そこへシラーズから急遽帰還したレナードと、クリスティら竜人兵の面々が、揃つて見舞いに訪れたのだ。

「しかし少佐、君にしては大胆な決断をしたものだ」

「……お恥ずかしい限りです」

「いや、見事な判断だった。あそこで竜を撃破できていなかつたら、

一般人への被害は免れなかつた」

「ですが、隊員を危険に晒してしまいました。申し訳ありません」

「いや、あの作戦は僕が提案したんですから、少佐が謝ることではつて、いててっ！」

慌てて身を起こそうとするフランシスだが、激痛が全身を走る。身動きがとれず、微妙な体勢で固まってしまった。

「ほら、寝てなきゃ駄目でしょう。絶対安静って言われてるんだから

「う

「…………めん」

クリスティの手で、再び寝かし付けられるフランシス。

「フランシス、君も無茶をしたものだ」

「面田ありません」

「いや、別に怒っているわけではない。私も若じよりは随分無鉄砲な真似をしでかしたからな」

レナードの伝説的な武勇伝は、騎士団にいくつも残されている。それを知るフランシス以外の面々は、苦笑を隠せない。

「そういえば、あの連中はどうなったんです？」

「それがな。残念ながら、皆が戦っている隙に逃げられてしまったようだ。足取りは第七騎士団が全力で捜索している」

「そうですか。……何者だつたんでしょう」

「連中もさすがに慌てたと見えて、アジトには多数の遺留品が残されていた。正体が割れるのはこれからだらう」

「申し訳ありません、容疑者を取り逃がしたのも私の責任です」

ダイアナが、再び謝罪する。

「だから、あの状況なら仕方ないと言つているだらう。それに、もし竜による被害を見過ごして間者の確保を優先する、などという判断をしたのなら、ここにいる全員を張り倒していくところだ」

「あの卵は？」

「……あれは、俺が回収しておいた。今頃、研究班に回されているところだらう」

長年竜の研究をしてきた騎士団の研究班を差し置いて、他国の者が卵を発見したという事実は、パトリシアを大いに悔しがらせたのだが、これはまた別の話。

「それにしても、フランシスは良くやつたな。隊長、これは叙勲も

のですぜ」

ヒドガーの言葉に、レナードは表情を曇らせた。

「確かに大いに叙勲に値するし、私もそうしたいのは山々なのだが
　今回の一件は、秘匿されることになった。皆も、口外はしない
でもらいたい」

「どうしてですか!? フランはあんなに頑張ったのに」

納得がいかない、という表情を露にし、クリスティが憤慨した。

「間者の正体はまだ割れていませんが、場合によっては国際問題になる可能性があります。相手に手の内を晒さないという意味でも、今回のことは伏せておく必要があるのです」

ダイアナが、レナードに代わって説明した。

「勲章をやることはできないが

レナードは、一同を見回す。

「フランシスが負傷から回復したら、全員に休暇を取れる。一日がかりの、盛大な宴会を開こうじゃないか。もちろん、私のおこりだ」「……悪い話だ。騎士団に特別手当を請求しようと思つていたが、今回はそれで手を打ちましょ」

「そいつは太っ腹だ。せつかくだから、女房と娘も呼んでいいですかね、隊長」

エドガーが笑う。

「……久しぶりの、酒だ」

スオウも、口元に笑みを浮かべる。

「私は、遠慮しましょう。口づぬやうに上高がいっては、楽しめないで
しそうから」

ダイアナはそう言つたが、

「馬鹿を言つたな、少佐。久しづりに、君の飲みっぷりを見せてくれ。
上官命令だぞ」

と、レナード。

「少佐も酒をやるんですか？ そいつは意外だな」

「サイラス、少佐の酒の席での武勇伝は、私の若いころの話なんか
よつよほど刺激的だぞ。そういうえば、建国記念日のパーティでこん
なことが」

「お止めください、閣下！」

病室に、皆の笑顔の花が咲く。

「楽しみだね、フランー。でもそのためには早く良くならなきゃだ
ね」

「……うん、そうだね」

病室の窓から夏空を見上げ、フランシスはしみじみと呟く。みん

なを守れて、本当に良かった。改めて、やつはハシスだった。

Hピローグ（後書き）

このHピローグは、一応の完結となります。
シリーズものとして次のエピソードを構想中ですので、
続きを読もうと愛読いただけましたら幸いです。

新聞なるもの（前書き）

世界観補完的な文章になります。

新聞なるもの

フランシスが食堂で夕食を済ませ、士官用兵舎に戻ると、二人の男が連れ立つて入ってきた。

一人はサイラスで、もう一人は辺境騎士団参謀長、ライオネル・ダグラスだつた。レナードの同期で同じく騎士団の幹部である彼は、この対竜部隊基地にも度々顔を見せる。

「ダグラス少将、お疲れ様です」

珍しい組み合わせだな、と思いつつ、背筋を正す。

「おお、ファウラー少尉か。頑張つてるようだね」

「いえ、まだまだ力不足です」

「ははは、精進したまえ」

「はい、努力します」

恐縮しながらも、敬礼する。

「ところでサイラスさん、それは？」

サイラスが、なにやら活字がびっしりと印刷された紙の束を抱えている。

「ああ、これは『新聞』っていうんだ」

「私がガーランド少尉に頼んで読ませてもらつてるんだよ。君も読んでみるか」

「はい」

騎士団に入つて様々な座学を受けて以来、知識欲が増しているフランシス。活字ならとおりあえず読んでみたくなる習性が身についてしまつた。二人とともに、手近なテーブルに着席する。

「ええと……『アーチボルト伯とブルワー家長女が成婚』、『次期財務大臣にバイロン侯抜擢との噂』、『今秋にかけて羊毛が高騰するとの予測』……。サイラスさん、これは？」

「これは俺の王都時代の友人が作つているものでな。内政、外交に社交界のゴシップから競馬の結果まで、国内外の様々な話題を集め週に一回こうして印刷して売り出してるんだ。本人はそのうち大きな商売になる、と言つて借錢してまで最新の印刷機を買つたりして、いたが、まだあまり儲かつていないみたいだな」

「これがなかなかどうして面白いものでね。少尉に頼んで、定期的に本国から取り寄せてもらつていいのだよ。数ヶ月遅れになるのが実に残念なんだが」

「へえ……」

じつくりと読んでみる。なるほど、あらゆる分野の様々な情報が詰め込まれていた。商売人や行政に携わる者には役に立つだろうな、と考える。

「おっ、クレメンスの野郎、結婚したのか。お祝いの手紙の一つでも書いてやらないとな。なになに、『第三王女フェリシア殿下が次期コルドア総督に就任との未確認情報』だと？ これはさすがにデマだろ？ ……ところで少将、『第四騎士団がカーペンター造船に艦船大量発注との噂』ってのは本当なんですか？ カーペンターの跡取り息子とは、王都にいたころのちょっとした知り合いなんですが

サイラスが、一つの記事を指差す。第四騎士団とは、ブリーディ

アに三つ存在する海軍の一つである。

「私に聞かれても、さすがに本国の第四騎士団のことまではわからんよ。しかし 現在の国際情勢を鑑みれば、ありえない話ではないな。ほら、こちらの記事を見てみろ」

ライオネルが指示した貢には、『ヒルダリア自由都市群連合、海軍を大幅増強』との記事が。

「今、各国ではブリー・ディアに倣つて軍制改革を進めているが、一歩先んじた我々にはまだ遠く及ばない。ブリー・ディアに追いつかんとする各国が、わが国に手つ取り早く打撃を与える手段は、コルドアとの航路を断つことだ。なにせ、いまやブリー・ディアの財政はコルドアの富に大きく依存してしまっているからな」

「それに対抗するために、ブリー・ディアも海軍を強化するというわけですか」

「その通りだ、ファウラー少尉。且下、安全な航路の確保が、ブリーディアの最優先事項なのだ」

「なるほど。……うーん、それなら、僕ら竜人が海兵になることはないんですか？ 戰力的に考えて」

「確かに君たちは大きな戦力だが……。それはないだろう」

「だろうな。フランシス、お前も『燃料切れ』は経験しただろ？」「はい、最初の体力試験のときに。アレはきつかったなあ」

当時のことと思い出すだけで、フランシスは腹が鳴りそうになるくらいであった。

「俺たちは全力で戦うとすぐに燃料切れを起こすし、そのつえ大飯喰らいだ。限られた食料しか積めない船に、戦闘員として乗り組むのは不向きなんだよ」

「それに、だ。衝角で突撃し、白兵戦で船を落としていた昔ならともかく、現代の海戦はほぼ砲戦で大勢が決してしまつ。君たちの出る幕はないんだよ。観測員としては大いに役に立つだろうがね」

「竜人つてのは意外に不便なもんなんだよな。同じような理由で、長期化しやすい包囲戦や防衛線にも向かない。結局は、コルドアで竜と戦うのが一番合つてるんだよ」

「竜人の力が存分に使えるのは局地戦つてわけですか」

なるほど、と頷くフランシス。

「ふむ、噂どおり、ファウラー少尉は理解が早いな。どうだ、ニエマイアの騎士団本部で参謀科に入らないか」

勧誘されたが、その場は辞退するフランシスだった。

プロローグ

「いたか！？」

「いや、そつちは！？」

「クソ、どこへ行きやがった！」

その豪奢な屋敷にはおよそ似つかわしくない、剣呑な響きの声。男たちが走るたび、腰の武器ががちゃがちゃと音を立てる。武装したその男たちは、屋敷に雇われた私兵だった。

「まったく、ドジ踏んじまつたなあ。あんなとこでメイドと御者がイチャイチャしてるなんて思わないよな、普通」

悪趣味といえるほど、過剰に華美に造られた庭の中。東屋の柱に身を隠し、小柄な人影が一つため息をつく。フードを深く被つているため、その顔をうかがいることはできない。男たちが捜索しているのは、この人物のようだった。

「ウ～、ワウッ！」

と、私兵たちが連れている犬に反応があつた。東屋に向かつて唸り声を上げる。

「そこかっ！？」

一斉に、男たちが東屋に駆け寄る。カンテラの光が、人影を照らし出した。

「しょうがねー、強行突破といきますか！」

小さな人影は、一抱えほどの包みを抱えて走り出す。身をかがめて走るさまは、まるで猫のようだ。あつという間もなく、私兵たちの間をすり抜けて、外へ向かつた。

「野郎、何て速さだ！」

私兵たちは必死で追うが、まるで追いつけない。それどころか、見る見るうちに大きく引き離されてしまう。

小柄な人物は猿のようにするする庭木を登ると、挑発めいた笑みを浮かべて私兵たちを一瞥。跳躍して屋敷の堀を乗り越えた。

「馬を出せ！ 急がんか！」

私兵の隊長らしき男が、焦りを露にしながら部下に命令する。十数名からの私兵が、慌てて馬で駆け出した。

堀で囲まれた大きな屋敷が立ち並ぶ閑静な街並に、たくさんの蹄の音が木霊する。

「へつ、掴まるもんかつてんだ」

十数の騎馬に追われながらも、その人物は余裕綽々だ。それもそのはず、その人物はなんと馬をも凌ぐ速度で走っているのだから。夜の闇を切り裂くように、疾駆する。

「なんて野郎だ、人間じゃねえ！ あんなの捕まえられるかよ！」
「バカが！ 人間だろうが幽霊だろうが知ったことか！ 奴は旦那のお宝を盗んでいきやがったんだぞ！？ 捕まえられなきゃ俺たち全員クビになっちゃう！」

「　しめた！　このままいけば挟み撃ちにできるぞ！　何人か右へ回れ！」

偶然にもその小柄な盗人は、挾撃に都合のいい区画へ迷い込んだ。道は立ち並ぶ屋敷の高い塀に囲まれ、他に逃げ道はない。一本脇道はあるものの、隊長の記憶によれば、そこもまた高い塀に囲まれた袋小路のはずだった。

前方からの蹄の音に気付いたか、盗人は隊長の思惑通り、脇道へ入つていく。

「よし、もうつた！」

あとはひつ捕らえて、旦那の前に突き出すだけだ。そう考えながら脇道に入った私兵たちが見たものは　誰もいない袋小路だった。周りは4ヤードほどの塀で囲まれており、蟻の這い出る隙間もない。梯子やロープをかけた形跡もなし。なのに、盗人の姿は忽然と消えていた。

「「いや、どういうことだ？　まさか本当に幽霊の仕業なのか……？」

隊長が、呆然と呟いた。

翌日、コルドア首都・アマディアスの第七騎士団に、盜難の届出が提出された。被害者は、とある大手穀物商。宝石を中心に、被害総額は40万デイル（）に上った。

（）デイルは通貨単位

出張命令

うだるような熱気はなりを潜め、吹きぬける風は心地よい。林檎や葡萄の鮮やかな果実が市場を彩り始め、麦の穂はたわわに実つて収穫のときを待つばかり。シラーズ周辺も、秋を迎えるようしていた。

炎竜との人知れぬ激闘から、数週間が経過した。フランス人たちの傷もすっかり癒え、今は再び訓練の日々だ。

この日、対竜部隊本部棟の作戦室には、フラン시스、クリスティ、スオウの三人が集まっていた。スオウは、竜の生態調査から急遽呼び戻されての召集だった。

程なくして、パトリシアを伴ったダイアナが入室する。

「さて、早速ですが。3人には博士とともに出張に出でらうことになります」

「出張、ですか」

「行き先はブリー＝ディア領コルドア首都、アマティアスです」

随分唐突な命令だった。何ごとだろ？、とフラン시스たちが顔を見合わせる。

「……出張の理由を、聞かせてくれ」

他の2人の心中を代弁するように、スオウが質問する。

「はい。……近頃、アマティアスで一人の盗賊が出没しています。豪商や貴族の屋敷に忍び込み、次々と金品を盗み出す。聞いたこと

はありませんか？」

「そういえば、街の酒場でそんな話を聞いたような……でも、あたしたちとどういう関係が？」

クリスティの疑問はもつともだ。対竜部隊は竜との戦いが専門だ。しかもアマディアスを管轄とするのは対竜部隊が属する辺境騎士団ではなく、第七騎士団。アマディアスの盗難事件を解決すべきは、第七騎士団なのだ。

街の酒場というクリスティの言葉に眉をひそめるダイアナだが、ここは話の本題を進める。

「その賊の特徴はこうです。性別・人相は不明、かなり小柄で年齢も若いと見られる。馬より速く走り、数ヤードの壁も飛び越える、と」

「……考え方だ」

「普通なら、そうでしょう。しかし、私たちには信じに足りる理由がある。違いますか？」

「つまり、その泥棒は竜人である可能性がある、ってことですか」「その通り。万一それが本当なら、一般の兵士の手に負えるものではありません。そこで、我々に出動の要請が下ったのです。3人を選んだのは、敏捷性を考慮したことです」

対竜部隊でも、トップのスピードを誇るクリスティ。わずかに及ばないものの、クリスティに次ぐスピードのオスウ。フランシスは竜人兵としては平均的なスピードだが、サイラスやエドガーに比べれば幾分かは速かつた。賊を追跡するようなことになつた場合を考えての人選である。

しかし、フランシスには疑問が残る。竜人兵を増やそうという試

みは、とうに打ち切られたと聞いている。アマディアスに竜人が出没するのはいかにも不自然だ。

「そのあたりのことばは、馬車の中で私から話すわ。さあ、早く準備しましょ!」

パトリシアに急かされるよつて、フラン시스たちは自室に戻るのだった。

準備を終えた一行は、ダイアナが手配した箱馬車で一路アマディアスに向かう。アマディアスまでは、3日ほどの道程だ。パトリシアの話を聞く時間は、十分すぎるほどあった。

「私も、正直ありえない、って思つてるのよね

メガネを押し上げながら、パトリシアが切り出した。

「その泥棒の情報は何かの間違いじゃないか、って思つてるの?」「そうね。まあ、フランみたいな例もあるし、絶対ってことは言えないのだけれど」

フラン시스が竜人となつたのは、天文学的確率による偶然と言つていいく出来事だ。絶対にないとは言い切れない、程度の可能性だつた。

「竜の血を摂取したことがある者を挙げるなら、第一次東方遠征の従軍者と、一年前までの騎士団志願者。そして、一般から集められた被験者ね。あるとすれば、この中の誰かということになるわ」「東方遠征の従軍者は、選択肢から外していいかもね」「へ? フラン、どうして?」

「犯人はかなり若いとみられる、つて少佐が言つてたる。東方遠征に行つた人なら、隊長くらいの年齢にはなつてゐるはずだよ」

「あへ、なるほどね」

感心するクリスティ。フランシスとしては、大した推理をしたつもりでもなかつたのだが。

「騎士団志願者と一般的の被験者も、可能性は低いよねえ」

「うーん……たとえば初めから竜人の力を悪用するつもりで、顕れた能力を騎士団から隠してた人がいた、とか」

「あり得なくはないわね。でも、その推理だと実験の内容と目的は事前に被験者に教えられない、つて事実が穴になるわ。能力が発現するまではなにが起こるか知らないわけだから、私たちに隠すって発想がそもそも生まれないはず」

「そういえばあたしも、何も教えられずにとにかくこれを飲め、つてドロドロの赤いのを飲まされたんだよね」

当時のこと思い出したクリスティが、顔をしかめる。

「他人、たとえば既に対竜部隊に在籍していた人とかから予め話を聞いていた、つてことは？」

「それにしても、竜人はなるうと思つてなれるものじゃないから。

『話を聞いて竜人の力を悪用しようとしたごく少数の不届き者』が、『たまたま資質を持つていた』、つていうのは確率的にどうなのかなしほう。それに、実験が打ち切られたのは2年前で、賊が出始めたのはごく最近。時間差があるのも腑に落ちないわ」

竜の力は、竜の血を摂取後1週間から10日ほどで顯れる。犯罪に手を染め始めるまで、2年間も待つ必然性がないのだ。
うーん、と頭を悩ませるフランシス。

「まあ、ここで考えるより、実際その泥棒を捕まえつぼうが早いんじゃない？」

呑気な調子でクリステイ。必死に可能性を考えていたフランシスにとつては、身も蓋もない発言だった。

「……お前は、中々賢いようだな」

そこで、今まで黙つてやり取りを聞いていたスオウが、初めて口を開いた。

「へ？　僕のことですか？」

「……ああ」

「いやあ、僕なんか全然ですよ」

天才と呼ばれるパトリシアの前で褒められて、フランシスは氣恥ずかしさを感じる。

「あら、謙遜する」とはないわよ？　もしフランがきちんとした教育を受けていれば、つてこの私が残念に思うくらいだから」

「パティ、言いすぎだよ。……まあ、僕は孤児院育ちだからどうみち学校になんて行けなかつたけど」

しかし、フランシスの仕送りによって、孤児院の子供たちが就学可能な状況になっている、といつのも皮肉な話ではある。

「そういえば、スオウさん」

「……何だ？」

話題転換がてら、スオウに話しかける。仲間想いの男だ、というのは分かつてているが、なにしろスオウとは接する機会が少ない。口数は少ないし、そもそも基地にいることがあまりないからだ。今回の出張の間は、ずっと行動をともにすることになる。せっかくだから、少しでも交流を深めようと思つたのだ。

「調査隊つてどういったことをするんですか？」

とりあえず思いついた質問をぶつける。

「……色々、だ。竜の種類、大きさ、生活習慣、行動範囲。野山に潜み、竜のあらゆる情報を収集する」

調査隊の集めた情報は、討伐作戦を立案する際に大いに役立てる。また、研究班にとっても貴重な情報源であり、部隊の土台を支える役目といつていいだろ？

「長いときは何ヶ月もかけるんですね。 大変そうだなあ」

「……まあ、愉快な仕事ではない」

スオウは多くを語らない。数週間も身を清められないなんてことはざらにあつたり、補給が遅れたときは食料は現地調達。竜に気取られてしまうため、火もろくに使えない。時には蛇の生肉や未調理の野草で食えをしのぎ、泥水や小便すら飲み水にする。こんなことを話しても、不快な思いをさせるだろ？ スオウなりの配慮だったのだが、会話が途切れてしまったフランシスは困惑気味だ。

「で、でも、何ヶ月も竜に見つからないように調査するって凄いですね」

「……俺一人では無理な任務だ。しかし、調査隊にはアルフ老がい

る

「アルフ？」

「アルフレッド・ニコーマン大尉。たしか御歳69だつたかしら？儀装術の達人で、部隊最年長のベテランよ。東方遠征で竜人兵になつた3人のうちの一人でもあるわね」

「69歳！？」

フランシスが驚くのも無理はない。当時、フロンティア地方の平均寿命は60前後（）であり、フランシスの育つた村でも70歳以上の老人は稀であつた。そんな歳なのに現役の軍人を続け、しかも過酷な調査隊の任務に従事している。竜人であることを差し引いても、十分驚嘆に値することなのだ。

「お爺ちゃん、しばらく見てないけど元気？」

「……ああ。調査隊の誰よりも元気だ。あの分だと、100まで生きても不思議ではない。……まあ、俺も彼からはまだまだ学ぶことがある。早死にされては困るがな」

オスウの隠密行動の技術は、聞者のアジトを襲撃したときにフランシスも目の当たりにしている。そのオスウにここまで言わせるアルフレッドとは、どれだけの技術を持つのだろうか。

「クリス、その人ってどんな人なの？」

「うーん、基本的に陽気で面白いお爺ちゃんだよ。ただ、ちょっとスケベなのが困ったところだねえ」

「ふーん、会つてみたいなあ」

「そのうち会えるわよ。今やつてる山岳地帯の調査がもうすぐ終わる予定だから。基地にも顔出すんじゃない？」

「……今回の任務は、長くて2週間。ちょうどそのころには、アルフ老も帰還しているだろう」

2週間とは、ダイアナが決めた今回の出張の最大期間だ。例の盗人による犯行はここ数ヶ月、月に2～3度のペースだ。2週間アマディアスに滞在すれば、盗人の犯行に遭遇する可能性は高い。もしその間何も起きなかつたら、というフランシスの問い合わせに対しても

「われわれの本来の任務は、竜討伐です。それを蔑ろにしてまで第七騎士団に付き合つ必要もないでしょう」

とのことであつた。

そうしている間にも、馬車は走る。会話はだんだん途切れがちになり、フランシスは本を読んで時間をつぶすことにした。本の内容で分からぬ箇所があれば、パトリシアに質問。パトリシアは、教えたがりの性分を存分に發揮し、長々と講釈する。クリスティはそのやりとりをうんざりした顔で見つめ、スオウは押し黙つて馬車の窓の外の景色を眺めるばかり。

通り過ぎる町並みは次第に大きくなつていいく。　　3日ののち、一同はブリーディア領コルドア首都、アマディアスに到着した。

() 乳幼児の死者を含めない場合の数字

首都にて

「コルドア首都アマディアスは、コルドア大陸発見者の名前を取つた、政治経済の中心地だ。コルドア西の海岸線から15マイルほど内陸に入った場所に位置し、人口は20万人。旧大陸の大都市に規模では及ばないが、人口の増加率は世界一の水準で、現在最も勢いのある都市と言える。

街の中心の小高い丘の上にあって、ひときわ目を引く大きな建物がコルドア総督府だ。数本の細い尖塔が配された美しい城で、最新の建築様式が取り入れられている。旧大陸の歴史ある城の多くは、戦の際の砦としての役割が大きいために、おおむね頑強で無骨な造りだ。しかし、東方遠征終結を記念して約20年前に建築されたこの城は、纖細で優美な外観を持っている。

総督府の周りには、総督府に入りきらなかつた官公庁、聖堂、上流階級の人間の邸宅が並び、さらにその周りを市場や一般市民の宅地が取り囲む。丘の上有る総督府から、標高が下がるにつれて建物の高さも低くなつていくため、総督府の高さが余計に際立つて見える。

時刻は夕方に差し掛かったころ。照りつける夕日が総督府の白亜の壁を赤く染め、まるで絵画のような情景をかもし出す。

「見てよ、クリス！ うわー、凄いなあ！ 大きいなあ！」

フランシスが、馬車の窓から見える光景に思わず感嘆の声を漏らす。おのぼりさん丸出しであつた。

「ちょっと、街に入つてからはあんまりはしゃがないでよ、恥ずかしいから。でも、あの総督府は確かに凄いよね。王都でも、そこまで綺麗な建物は見たことがなかつたし」

クリスティも、その美しい情景をうつとりと眺める。
と、御者を務める下士官が声をかけてきた。

「モーガン中尉、すんません。道が混んでいて、第七の本部まではもうしばらくかかりそなんですよ」

見れば、街道はたくさんの人、馬、荷車で溢れている。収穫期と
いうこともあり、様々な物産が流入しているのが混雑の原因の一つ
だろう。仕事終わりの人々が一斉に街にあふれ出す中、比較的団体
の大きいフランスたちの箱馬車は、いかにも身動きが取り辛そう
だ。

「……この調子だと、歩いたほうが早そうだ。お前たちも、それで
いいか」

「もちろん。そのほうが街並みを見られるしね」

「クリス、遊び気分は駄目だよ。仕事中なんだから」

「分かつてるつてば。さつきまで子供みたいにはしゃいでたフラン
には言われたくないよ」

「頭脳労働者の私としては、余計な体力は使いたくないのだけれど。
しょうがないわね」

3人のやりとりに、スオウはわずかに苦笑する。

「……そういうことだ。『苦勞だった、馬車を預けたら一杯やるが
いい』

「はっ！ ありがたく頂戴いたします！」

スオウが、その若い下士官に心づけを渡すと、彼は威勢よく敬礼をして去つていった。

「……さて、行くか」

夕刻の雑踏の中を、4人は歩き出した。

「へえ、シラーズの街と違つて随分魚屋さんが多いんだ」

市の中を通り抜けながら、フランシスが呟く。

「（君）は海が近いからね。フランは魚介料理なんてほとんど食べたことないでしょ？」

「うん。考えてみたら、秋に取れる川魚くらいかなあ」

生まれてこの方、コルドア内陸で暮らしてきたフランシス。秋に川を遡上する鮭、鱈の類のほかは、小型の川魚程度しかお目にかかる機会はなかつた。

「すっごく美味しいんだよ。あ～、晩御飯が楽しみ！」

「……今季節なら、鱈にメダイ、太刀魚。カワハギなども美味しい」「スオウさん、詳しいんですね」

「……俺の父の祖国の人々は、特に魚を好んで食べる民族だつたそうだ。父も、そうだったのですな」

「どうでもいいけど、やることはやつてしまいましょう。晩御飯の話はそれから」

食事には頓着しないタイプのパトリシアだけは、あまり興味がなさそうだった。

「……それもそうだな」

第七騎士団本部の閉門時間を過ぎてしまつと、辺境騎士団の士官といえど入るのに手続きが必要になつてしまつ。一同は、足を速めて騎士団本部へと向かうのだった。

第七騎士団の本部は、総督府の周囲にある官公庁の一角にあつた。閉門時間直前に滑り込むことができた4人は、入り口に控える下士官に所属と用件を伝える。しばらくして、一同は警備隊長の執務室に通された。

警備隊は、都市の治安維持を専門としており、今回の連續盜難事件の捜査を担当する部署である。

隊長は50手前のでっぷりした大尉であり、名をフレイザーといつた。

「……モーガン中尉以下3名。特命により参上した」

ピシリと敬礼する3人。^{トバトリシア}しかし、フレイザー大尉は不機嫌そうな顔を隠そうともしない。足を組んで椅子にふんぞり返つたまま、ジロジロと3人をねめつける。

「ふん。上も余計なことをしあつて。我々の管轄の問題に、外部の人間を呼ぶとはな」

明らかに、歓迎されていない雰囲気だ。

「まあ、命令だから仕方ない。ほれ、これが捜査資料だ」

紐でくくつた紙の束を、ぞんざいに投げてよこす。あまりの態度

に、クリスティのこめかみには青筋が浮かんでいる。怒りの声を上げそうになるのを、必死に堪えているのだ。

「捜査をするなら、貴様らの勝手にしろ。ただし、我々の邪魔だけはするな。いいな」

「……我々の宿泊場所は」

「知らん。街で宿でも取ればいいだろつ。……話は以上だ」

まるで、取り付く島もない。4人は、すゞすゞと部屋を退出した。

「なに、あの態度！ 3日もかけて来てあげたのに！」

本部を出るや、クリスティが憤りの声を上げた。

「仕方ないんじゃない？ 彼らにも面子があるのよ。わざわざ外部の者を招聘する、ってことは自分たちが無能だつて言われているようなものでしよう」

「まあ、それは分かるけど……」

歳下のパトリシアに諭されるクリスティであった。

「それにクリス、あの部長さんは竜人のこと知らされていないんじゃないかな」

「……あの口ぶりだと、そうだろうな」

竜人のことを知らなければ、わざわざ外部からフランシスたちが呼ばれた理由も当然分からない。フレイザー大尉が、わけも分からぬ上からの指示に憤るのも無理はない。

「でも……やっぱり、腹が立つものは腹が立つの！」

未だ憤懣やるかたなし、といつクリスティ。

「クリス、いつまでも怒つていないで。美味しい『飯』でも食べて忘
れようよ」

「……ん、わかった」

「」飯といつ言葉を聞いて、クリスティの機嫌はぐらか上向きになつたようだ。

「……独自に捜査できるのは好都合だ。第七に氣を使わんで済む」「まあ、それはそつかもね。……よし、とりあえず宿を探そつか」「それがいいわよ。なにしりこの人出だから、うかつかしてたら泊まるところがなくなっちゃう」

「……急げ」

数件の宿で満室と告げられ、一行はよつぜん別の宿を見つけた。金持ちの邸宅が並ぶ区域から程近い場所にあり、賊が出没した場合都合がいい。宿の主に最長2週間の滞在になることを伝え、数日分の宿泊代を先払いする。取ったのは一部屋で、それぞれフランシスコウの男性陣と、クリスティ・パトリシアの女性陣に分かれることになる。

部屋に荷物を置き、平服に着替える。

「……とつあえず、酒場に行く」

「やつたー！ やつと『飯』が食べられるよ

「……情報収集も兼ねている。飲みすぎるなよ」

浮かれるクリスティに、オスカウが釘を刺した。

「私は遠慮するわ。ああいう煩い場所は苦手だから」

パトリシアは、ひとり部屋に残るつもつよつだ。

「晩御飯はどうするの？」

「亭主に頼んで何か簡単なものを作ってもらひながら。私のことは気にしないで行つてきて」

「まあ、パティがそう言つなら……じゃあ、行つてくれるよ。何かお土産買つてくるから」

「ありがとう。行つてらっしゃい」

「うして3人は、夜の街に繰り出した。

夜のアマディアスの喧騒は、シラーズのそれをはるかに凌ぐものだつた。食堂や酒場が立ち並び、呼び込みが仕事帰りの客を奪い合う。裏路地に目を向ければ、まだ夕飯時だというのに、多数の街娼が男たちに手招きをしている。青果、肉、魚などの食料品店も、これが最後の書入れ時と、大きな声を張り上げていた。

「…………こにするか」

3人が選んだのは、表通りの喧騒から外れた一軒の酒場だ。どちらかといえば住宅地に近い場所で、表通りの店ほどの客入りはない。知らない土地での情報収集の基本は、酒場。店主は幅広い客から様々な話を聞くし、酔つた客はついつい口を滑らせる。この店を選んだのは、客の流動性が高そうな表通りの店よりも、いわゆる地元の常連客が多そうだ、という理由からだ。

海産物が豊富なアマディアスらしく、その店のメニューには海鮮料理が多かった。

「僕は魚介料理はサッパリわからないから、一人で選んでよ」

「うん、それじゃあそうだね　すいません、このムール貝の酒蒸しとオイルサーディンのサラダ、それから鱈の香草ムニエルください！　全部5人前で！」

「……魚のアラの煮込みと、帆立のバター炒め。それから赤座海老のバジルソース。……酒は、辛口のスパークリングを」

程なくして、湯気を立てた料理が山ほど運ばれてきた。周りの酔客も驚きの量である。

「いただきます。…………うん、おいしい！」

フランシスが、思わず舌鼓を打つ。貝類や海老などは馴染みのない未知の食材で、一瞬食べるために抵抗を覚えるフランシス。しかし、一口食べてみれば、グロテスクにも思えたその外見も全く気にならない。

「あ～、新鮮な魚って久しぶりに食べたけど、やっぱ美味しいね！」
「……うむ。こここの料理人はなかなか腕がいい」

オスワの言つとおり、調理は見事なものであつた。大衆酒場にしては、どの料理も手が込んでいる。

「いやあ、そう言つてもらえると嬉しいねえ。それにしても良く食べるな、お客様」

3人の食べっぷりに気分を良くしたのか、店主が話しかけてきた。頭の禿げ上がった、恰幅のいい中年男だ。

「はい、とても美味しいもので、つい」

「こここの親父は、貴族のお抱え料理人だつたんだぜ。もつとも、まだ頭に髪があつた頃の話だが」

隣のテーブルの客の声に、爆笑が起る。

「髪のことは関係ねえだらうー……お客さんたち見ない顔だが、この通りの店だ。やかましいだらうが、ゆつくりしていくくんになつていく。

こんなやりとりがあり、自然と周りの常連客とも気安い雰囲気にになつていく。

フランシスはスオウに田配せすると、話を切り出した。

「僕たち最近アマティアスに来たんですけど、最近凄い泥棒が出るらしいですね」

「ああ、今アマティアス《一一一》はその話題で持ちきり。『怪盗』なんて呼ばれてな」

たちまち、噂好きの常連客たちが集まってくる。

「話を聞くようになったのは、ここ何ヶ月かのことだな。なんでも、金持ちの家ばかり狙うんだそうだ。俺たちみたいな貧乏人には関係ない話だが」

「その泥棒、一人なんですよね」

「ああ。兵隊に追われても、簡単に撒いちまつんだと。たつた一人で大したもんだよ」

盗みを働く悪人なのに、客たちの口ぶりからは嫌悪感が感じられない。むしろ、好感を持っている節さえある。

「おっちゃんたち、あんまりそいつのことを嫌つてないみたいだね」

クリスティが尋ねる。

「まあな。その怪盗は、悪どいことをして金儲けした連中ばかり狙つてるらしいからな」

「そうさ。この間怪盗にやられた穀物商のガードナーなんて、相場を操作して大儲けしやがつたって話だからな。おかげで一時期小麦がバカみたいに値上がりしたもんだから、うちみみたいに細々とやってる店は大打撃さ」

小麦の出荷をわざと抑え、品薄を煽つて値上がりを待つ。卑劣なやり方だが、現在の法律ではギリギリ合法とされる行為だった。

他にも、何人かの豪商、貴族について尋ねてみた。フレイザーカー尉から受け取つた捜査資料にあつた、被害者一覧にあつた名前である。

「ああ、グレシャム侯は自分が持つてる鉱山で、やたらに安い賃金で貧乏人をこき使つてるらしい」

だの、

「金貸しのジョイスは、詐欺まがいの証文でべらぼうな利子を取つてるんだ。俺の知り合いも一人やられてる」

だのと、皆市井の評判はよろしくなかつた。

「それに、盗んだ金を貧民街でばら撒いてるつて話だ。いわゆる義賊、つてやつだな」

「へえ、なんだかお話の人みたいですね」

悪人から金を奪い、貧しい人に分配する。こういった筋書きは、大衆演劇などでもありふれた話だ。

「……フランシス、そろそろいいだらう。行くぞ」

「そうですね」

「あ、ちょっと待つて！ この林檎のタルト、一個丸ごと包んでください！」

カウンターに陳列されたそれを、田ざとく発見するクリステイ。

「お、嬢ちゃん目が高いねえ。そいつはカリさん自慢の逸品さ。待つてな、今包んでやるよ」

パトリシアへのお土産にとケーキを買い、3人は店を後にした。

「義賊、か。そんなに悪い人じゃないのかも」

「……しかし、盗みは盗みだ」

「それはそうなんですが……」

貧しい境遇で育ったフランシス。その怪盗を憎みきれないところがある。

「でも、酒場の人たちは怪盗の能力については知らなかつたみたいですね」

「……うむ。第七が情報統制をかけているのだらう」

「誰か、実際にそいつを見た人はいないのかな」

「うん、被害にあつた人に、直接話を聞ければいいんだろうけど」

「……明日、当たつてみよう」

そんな話をしながら、3人は宿に戻った。長旅の疲れと満腹感から、一同はあっという間に眠りに落ちる。

しかし、けたたましい警鐘の音に、一同が安眠から引き戻されたのはわずか数時間後のことだった。

追跡

深夜。

皆が寝静まり、束の間の静寂が訪れていたアマデイアスの街に、突如喧騒が巻き起こつた。

警備隊が鳴らす警笛と警鐘、馬の蹄と焦りを含んだ怒号。それは、フランシスの宿の宿泊客たちの眠りを妨げるには十分であり、常人よりも優れた感覚を持つフランシスたちが、いち早くそれに気づいたのは言つまでもない。

フランシスはベッドから飛び起きるや、廊下に出る。同じ部屋で寝ていたはずの、スオウの姿は既になかった。

「フラン、こっち！」

クリステイが、廊下のバルコニーから一足飛びで宿の屋根に上がり、フランシスもそれに続く。

屋根には、スオウの姿があつた。

「……運がいい。かなり近いぞ」

スオウは、夜の街並みに目を凝らしながら言った。

この宿は周りに比べ、高さが頭一つ抜けているため、かなり遠くまで見渡すことができる。喧騒の中心は、フランシスたちの宿から、街の中心方面に数百ヤード程度の場所。高い三角の屋根と、鐘楼のある建物 聖堂のようだ。

この時間に、この騒ぎ。例の怪盗が現れた可能性が高い。

「アマデイアスに着いたそつそつ、運がいいんだか悪いんだか」

クリスティイが愚痴る。

「……急行する」

4階建ての屋根から、スオウが跳躍。着地の瞬間に膝で衝撃を和らげながら、身体を捻りつつ前転。何事もなかつたかのように走り出す。高度な受身の技術だった。

「……僕たちは階段から行こうか」

「そうだね」

眠気眼で部屋から顔を出したパトリシアに一言告げて、フランシスたちも夜の街を走り出す。

スオウの姿は、すぐに見つかった。100ヤードほど進んだところで、地面に伏して聞き耳を立てている。

「……遅いぞ」

「無茶言わないでよ。いくら竜人あたしたちでも、普通ためらいもなくあんな真似できな^いつて」

「……まあいい。あちらだ。急ぐぞ」

若干失礼な物言いのクリスティイに顔色一つ変えることなく、再びスオウが走り出した。

「泥棒の足音が分かるんですか？」

併走しながらフランシスが尋ねる。

「……警備隊の者どもの足音から人の流れを読んだ。盗人の足音を

直接聞いたわけではない

ひとりの足音を聞き分けるのは困難だが、それを集団で追跡する者たちの足音なら聞き取れる。そして、その集団の先には目的の人物がいる、ということだろう。

やがて、進行方向に警備隊らしき集団が見えてきた。何ごとかと家を出て来た野次馬に、解散を命じているようだ。

「……田立ちたくない。……上から行くぞ」

手近な商店の軒先を足がかりに、スオウはその建物の屋根に飛び乗つた。一人も続く。屋根から屋根へと、曲芸のように飛び移りながら3人は進む。

「うーん……」

「どうしたの？ 難しい顔して」

「僕もいつの間にかこういう無茶に慣れてきたなあ、って思うと微妙な気分に」

数ヶ月前まで、田舎の村で慎ましく暮らしていたフランシスのことだ。未だに時折、竜人の力に違和感を覚えることがある。

「あんなでかい炎竜倒しちゃった奴が、今更なに言つてんのや」

「それはそうなんだけど……」

と、先を走るスオウが足を止めた。

「……見えた」

視線の先には、複数の騎兵と、それに追われる一つの人影が。ど

うやり、件の怪盗に間違いないようだ。金持ちの邸宅が立ち並ぶ区画と、庶民が暮らす区画の境目あたり。大きな通りの真中を、怪盗は爆走していた。

「かなり速いね」

「うん。情報はやっぱり正しかったみたいだ」

怪盗は、凄まじい速度で走っている。馬で追つ警備隊たちも、もう撒かれる寸前だ。

「……しかし、追いつけぬほどではない

「あたしの出番だね」

確かに速いが、対戦部隊でいえばエドガーより速いが、サイラスより遅い、という程度だった。部隊一の快足を誇るクリスティならば、十分追いつける距離だ。

「じゃ、先行するねー！」

クリスティが手近な塀を蹴りつつ、屋根から下りる。着地と同時に、一気に加速した。

「やっぱ、クリスは速いな！」

走りながら、フランシスが感嘆の声を漏らす。

「……あの分だと、じきに追いつくだろう」

フランシスは、スオウとともにクリスティの背中を追いかけた。やがて、クリスティが怪盗を視界に納める。

「こら、待ちなさい！」

「自分から存在を主張してどうするんだよ、クリス！」

「…………」

大声で叫ぶクリスティに、スオウとフランシスは呆れるほかない。追っ手を撒いたと思っていたのだろう怪盗は、当然後ろを振り返つて3人の存在に気付く。黒い外套に、顔を半ばまで覆うフードとう出で立ちだ。男性だとしたら、かなり小柄だ。もしかしたら女人なのかも、とフランシスは思う。

あつ、と怪盗の口元が動いたものの、驚きを見せたのは一瞬。ニヤリと口の端を上げると、角を曲がって横道に入つていった。

「逃がさないよ！」

挑発めいた笑みに腹を立てたクリスティが、物凄い勢いで横道に入つていく。が、直後。短い悲鳴と、何か物が盛大に崩れる音が響く。

後を追つて横道に入つたフランシスたちが見たのは、飲食店のものらしきゴミの山に頭から突つ込んで倒れるクリスティの姿だった。よく見ると、地面から1フィートあたりの高さにロープが張られている。クリスティは、これに足を取られて転倒したのだろう。

「クリス、大丈夫！？」

「……俺は、先に行く」

クリスティに駆け寄るフランシスの脇を、スオウがすり抜けていく。クリスティは大した怪我はしていないかったものの、生ゴミを頭から被つて酷い有様だ。

「クリス、しつかり！ つて、うつ……」

『マリ』の悪臭に、フランシスは思わず顔をしかめる。クリステイはとこゝと、あまりの怒りに身体をわなわなと震わせている。

「……もう絶対許さない！ ぶちのめす！」

「あつ、待つてクリス！ 頭に魚の骨が！」

怒りの形相も露に走り出すクリステイを、フランシスが追いかけ
る。

一方スオウは、一人怪盗を追っていた。怪盗は土地勘があると見え、複雑な裏路地をすいすい進んでいく。クリステイの例があるため、怪盗が角を曲がるたびに注意しなければいけない。そのため、速度で勝るスオウも、なかなか距離を詰めることができなかつた。

付かず離れずの追跡が続き　ふと、怪盗がスオウを振り返つた。
口元しか見えないが、「まだついて来るのか」と言わんばかりの、
うんざりした表情なのが見て取れる。

「……それはこゝちらの台詞、だ」

毒づきながらも、スオウは内心驚いていた。いくら土地勘に勝る
といえど、竜人兵三人相手に見事な逃げっぷりだ。感嘆に値する。

と、怪盗が角を曲がつた。間に注意しつつ、スオウが後を追うと
そこに怪盗の姿はなかつた。

「　上か！」

スオウは、脇に立つ民家の屋根に駆け上がる。見回すと、数件先の民家の屋根から飛び降りる怪盗の姿が。慌てて後を追うスオウだつたが

「……やられたか」

怪盗が飛び降りた先、それは夜の街　歓楽街だった。深夜にもかかわらず、通りには人と灯火の光が溢れている。なげなしの金をはたいて女を買いに来た下層民から、お忍びでいけない遊びをしに来た貴族まで。多種多様な客たちと、それを奪い合う密引きたち。立ち並ぶ娼館のバルコニーでは、どきつい色のドレスに身を包んだ娼婦たちが、通りに向かつて手を振っている。

そこは、この時間帯のアマディアスにおいて、唯一多くの人が集まる場所だった。フードと外套を脱ぎ捨てて雑踏に紛れ込まれれば、もはや怪盗を見分ける術はない。

「スオウさん！」

フランシスたちが、よつやくスオウに追いついた。

「……すまん。取り逃がした」

田の前の光景を見て、フランシスも何があつたのか理解する。

「ええ～っ！？　じゃあ、あたしのこの怒りはどう向ければ……」

身体を震わせ、クリスティが悔しがる。

「これからどうしまじょう」

「……警備隊のフレイザー大尉に、詳細を聞いてくる。……お前たちは、先に宿に戻れ」

「あたしも行く！　このままじゃ寝てもいられないよ」

未だ怒りが収まらぬクリスティは、身を乗り出して主張する。が、
スオウは眉をひそめて言った。

「……お前は、とりあえず身体を清めてこい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6023x/>

ドラゴンズヘブン

2011年11月4日15時13分発行